

謹 賀 新 年

観世流・金剛流宗家本発行元



檜 書 店

東京都千代田区神田小川町2-1 電(291)2488-9
京都市中京区二条通熱屋町東入 電(231)1990

能 楽 の 友

題字は熱田神宮 篠田富司筆

発 行 能 楽 の 友 社

名古屋市中千種区吹上本町2-20

(郵便番号 464)

電 話 (731) 7 9 8 4

振替口座 名古屋 36393

購 読 料 1年 300円

郵送の場合 1年 400円

一 部 30円

その目録... 節会と節句を列挙すれば、次の通りである。(後世に至って定められたものを含む)

意欲的な演能期待

三月に本紙創刊3周年記念能

新しい昭和四十五年を迎えた。

ていくのではないだろうか。

ことしは、政治、経済、社会のあらゆる分野で、いわゆる「一九七〇年代」が論ぜられているが、とくに、物的な繁栄に対して、精神面での「真の豊かさ」が強く叫ばれているようである。

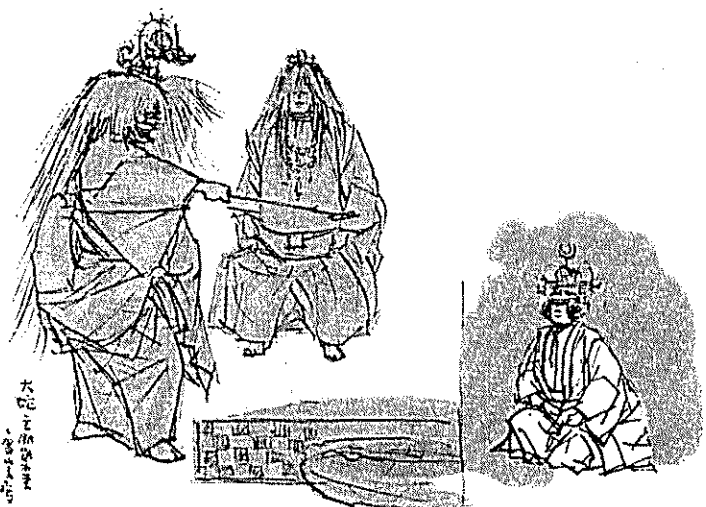
揺れ動く「価値感の変化」の時代に、人間の生命をとらえる能楽の「真の豊かさ」がより求められ、

念別会能で、能「道成寺」一「小袖

歳末助け合い義捐金

能楽協会 愛知県、名古屋市に寄託
名古屋支部

社団法人能楽協会名古屋支部(支部長田嶋徳太郎氏)では、旧暦十二月十三日、初の歳末助け合い義捐金募集会を開催、協会員はじめ愛好者の暖かい協力により大きな成果をあげ、義捐金として愛知県へ十一万二千三十五円、名古屋支部へ十一万一千三十五円が寄付された。なお、この義捐金に対して、愛知県桑原知事、名古屋市長、名古屋市長からそれぞれ協会に感謝状が送られた。



「大蛇」のスケッチ 仙田雪山子画

「大蛇」が上演される。昨年にはひきつづいて能楽界は意欲的な演能により、大きな開花が期待されている。

演能カレンダー

- (1月) 15日(祭) 清 謡 会 能 (来聴歓迎) 番組①面
- 18日(日) 宝 生 会 定式能 (有料) 番組③面
- 25日(日) 和島富太郎、泉 嘉夫、野村又三郎の三人を観る会 番組④面 (有料)

- (2月) 1日(日) 邦 謡 会 (有料)
- 8日(日) 観世会定式能 (有料) 番組③面
- 11日(祭) 幸 友 会
- 15日(日) 梅 猶 会 (有料)
- 22日(日) た な び き 会

以上熱田神宮能楽殿

「大蛇」の解説

本曲は、宝生、金剛、齊多の三流に現存している、脇方の習曲であるために、比較的に難く稀曲の中に入れられる曲である。前シテは、手摩乳、後シテは八岐の大蛇、ワキは素盞鳴神、子方稲田姫、前段は素盞鳴神の尊が出雲の国へお降りになったところ、とある疎屋の内より老人夫婦が一人の娘を中に泣き悲んで居るのを見られ、事情を聞かると、私はこの国の津神で手摩乳、脚摩乳と申す夫婦で、この少女は我子で稲田姫と申し、実は我子八人の少女を次々と年毎に飯の用の大蛇に吞まれて今又この娘をとられんとするので悲しんで居る旨を申上げた。尊は哀れを感じられ、その娘を所望され、老人夫婦は喜んで尊に差し上げられている。

謹 賀 新 年

熱田神宮 富司 篠田 康雄
権富司 長谷 晴 男

2月の謡

- NHK ライブ 毎日曜日 午後(再放送) 毎金曜日 午後
- 2月15日(日) 狂言「伯母ケ」 「八句連」
- 2月22日(日) 金存流「安」
- 2月11日(祝) NHK ライブ 能宝生流「鉢」 22日(日) 午後
- 2月15日(日) 狂言「鬼の繼」 能金剛流「鉄」 番組のかわることが

昭和四十五年 一月 一月 一月

欧 風 米 とん 九

本 神宮東門 店

社団法人 名古屋能楽会
熱田神宮能楽殿

観 世 元 昭
東京都渋谷区恵比寿南一丁目二十一番十四号

名古屋 観世九阜会
観世武喜之雄

幽 詠 会
片山 博太郎

幽 花 会
片山 慶次郎
〒603 京都市北区小山下花本町二二 電話四九二一五三〇二番

邦 謡 会
梅田 邦久

潤 水 会
林 甲子夫

中 森 晶 三
鎌倉市常盤一〇一六

名古屋 橋岡久馬 会
武田詠楽会 武田小兵衛
名古屋市中千種区下方町 高木方 橋岡市千石町一ノ九 安部方 四日市市海山道 花田方

四日市観世九阜会
塚本 秀雄

淡水会 飯田 賢
久田観正会 久田 秀雄
春鼓会 真柄 米次

大槻氏の「定家」に金賞

山本氏の「桧垣」に金賞

大阪府、大阪市の教育委員会による昭和四十四年度の大坂文化祭賞の受賞者が決まり、旧うら二四日発表された。

この賞は、十月、十一月の二か月にわたって開かれた大坂文化祭参加公演のうち、とくに成果をあげたものに贈られるもので、四十四年度は九十件の参加の中から審査委員会(委員長、演劇評論家大西利夫氏)が二十二件の受賞者を決めた。

そのなかで、とくに、すぐれた演技をみせた大槻秀夫氏「清韻会別会能における「定家」の演技」山本博之氏「故郷世元義進善能における「桧垣」の演技」花柳寿々緒氏「柳糸会公演「朝顔売り」の演技」の三氏には金賞が贈られ、金賞三件のうち、能部門が二件を占めた。

また金賞以外に能・狂言部門と

して、佐野善之氏「佐野荒陵社能における「碓」の演技」が受賞した。

なお授賞式は十二月二十六日、大阪市東区の大坂コクサイホテルで行なわれた。

同会は当面の事業として①万国博に訪れる内外観光客に、茶、華道をふくめた「伝統の美」を宣伝し、これが京都へ誘致する②新聞、放送、テレビを媒体として伝統芸能の発展育成をはかる③伝統芸能の再認識周知徹底の目的とする機関紙「伝統芸能」の刊行④伝統芸能の保存、伝承のために必要なる事業を計画している。

京都伝統芸能懇話会の幹事には渡会忠介、渡田純、顧問代表に湯浅佑一、石田民三の諸氏があたっている。

事務局所在地は 京都市右京区太秦御領町一九

大阪府、大阪市の教育委員会による昭和四十四年度の大坂文化祭賞の受賞者が決まり、旧うら二四日発表された。

この賞は、十月、十一月の二か月にわたって開かれた大坂文化祭参加公演のうち、とくに成果をあげたものに贈られるもので、四十四年度は九十件の参加の中から審査委員会(委員長、演劇評論家大西利夫氏)が二十二件の受賞者を決めた。

そのなかで、とくに、すぐれた演技をみせた大槻秀夫氏「清韻会別会能における「定家」の演技」山本博之氏「故郷世元義進善能における「桧垣」の演技」花柳寿々緒氏「柳糸会公演「朝顔売り」の演技」の三氏には金賞が贈られ、金賞三件のうち、能部門が二件を占めた。

また金賞以外に能・狂言部門と

して、佐野善之氏「佐野荒陵社能における「碓」の演技」が受賞した。

なお授賞式は十二月二十六日、大阪市東区の大坂コクサイホテルで行なわれた。

同会は当面の事業として①万国博に訪れる内外観光客に、茶、華道をふくめた「伝統の美」を宣伝し、これが京都へ誘致する②新聞、放送、テレビを媒体として伝統芸能の発展育成をはかる③伝統芸能の再認識周知徹底の目的とする機関紙「伝統芸能」の刊行④伝統芸能の保存、伝承のために必要なる事業を計画している。

京都伝統芸能懇話会の幹事には渡会忠介、渡田純、顧問代表に湯浅佑一、石田民三の諸氏があたっている。

事務局所在地は 京都市右京区太秦御領町一九

義談(二十五) 素袍(すおう)

逸 栄 井 二 と ぶ み 系

一九七〇年が爽かに明け渡った。それは、すべてのけじめがついたように、いかにも晴々しく輝かしい元朝なのである。みんながガッシリと歯車をかみ合わせてゆかなければならぬ。それは、鏡流一派。

大坂方は、葛野流、高安流、石井流、大倉流、宝生流三郎派の四

この二十三流一派によつて、能はきびしく、或は豊かに、世界の各地に花をひらかせてゆくのである。

さて装束談義、今回は素袍をかいて見たい。

素袍(すおう)は、素襖とも書き、前述の直垂と同じ仕立てであるが麻で作る。室町時代から一般武士が着用した。色や紋様には定めがなく、袖は二幅で胸紐、菊綴(スケッチは、望月のシテ・素袍)

の間で静かに出を待つシテが、自分の役柄を心の内へ深く内在させてゆく瞬間の間でもあるように、ひとりひとりが自分の仕事にピシリと魂を打込んでゆく時なのである。

さて、能を演出する流儀は現在どの位あるのか、これも一応ここで説明しておきたい。

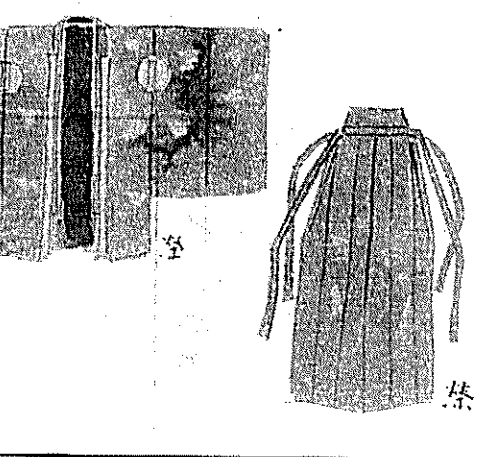
先づ、シテ方としては、観世流、宝生流、金剛流、金春流、高多流の五流。

ワキ方は、宝生流、高安流、福王流の三流。

笛方としては、藤田流、一吟流、森田流の三流。

小鼓方は、幸流、幸清流、大倉流、観世流の四流。

大鼓方は、葛野流、高安流、石井流、大倉流、宝生流三郎派の四



高木 栄一郎

謹賀新年

演能案内

名古屋 清韻会 能

昭和四十五年一月十五日(祭)十時始

熱田 神宮 能楽殿

名古屋 望月生会 定式 能

一月十八日(日)午後一時始

熱田 神宮 能楽殿

鉢 木 戸田 秀雄 馬場 富四夫

昭和四十五年

加具心

梅若六郎

梅若景英

大西信久

大西智久

武田太加志

鳳鳴

藤井久雄

藤井徳三

藤井楽人

大江又三郎

上田鏡正会能楽堂

上田照世

毎日婦人文化センター

観世流 謡曲教室

風韻会

殿島修二

大槻清韻会

大槻秀夫

大槻文蔵

大阪市東区上町二番地

名古屋淡交会

橋岡久共

泉壺泉夫会

嘉夫会

澄声会 尾関健太郎

此水会 高野瀬透

山本博之

山本勝一

静交会 高橋静夫

東京部世田谷区若林三ノ三三ノ三

電話(四一三)一一二二八番

笙月会 中川清

長浜市地福寺町八ノ二九

電話(四)〇六三〇番

童神会 竹内六郎

岡崎市六供町三ツ岩五七

島三友能面頒布会

清光会 岡田光紘

面作り五十年

泉壺泉夫会

嘉夫会

名古屋市昭和区山里町

南山太学八イム一八五

電話八三三三三三

大阪府下四条殿町

大(大患)七六二二六九

大垣浦声会

大垣市竹島町 善念寺

住 所 京都市左京区下鴨之木町五八

利

知水会 服部 抄 俊

大槻清韻会

大槻秀夫

大槻文蔵

大阪市東区上町二番地

掬水会

柴田初太郎

金剛永巖

金剛巖



謹賀新年
高木栄一郎
一月十八日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

上田観正会能楽堂
上田照世
653
神宮市東区大塚町三六一六

大垣浦声会
積古場 大垣市竹島町 普念寺
住 廣 京都市左区下鴨之木町五八

滋水会有賀滋子
知水会 服部 紗 枝

名古屋清韻会能
昭和四十五年一月十五日(祭)十時始
熱田神宮能楽殿

神
歌
坂崎 勝彦
千歳 福間 昌作
舞踊子
富士道周明
河村總一郎
助川 龍夫
藤田 昭彦

雲林院
下山 鉦一
長谷川 実
狂言
井上松次郎
佐藤卯三郎

種ノ酒
井上松次郎
佐藤卯三郎
小 督
守部 啓子
吉田 定男
半田 智子
河村總一郎
河村 洋一
鹿取 希世
富士道周明
水谷 文雄
田島英太郎
助川 龍夫
三男 竜夫

葛城
坂田 猛
田島英太郎
助川 龍夫
三男 竜夫
杜 若
大西彌八郎
松本 顕一
弱法師
松本 顕一

遊行柳
伊勢 信雄
寛 鉦一
鬼頭喜太郎
藤田 六郎兵衛
善知鳥
水野 雅子
吉田 定男
山口 亮
香取 希世

能鶴
福間 昌作
高安 勝久
河村總一郎
藤田 昭彦
カメ殿島満里子
高安 勝久
田島英太郎
助川 龍夫

安宅
桑原 信夫
吉田 定男
川村富美子
水谷 文雄
鬼頭喜太郎
寛 鉦一
鬼頭喜太郎
三男 竜夫
野守
三木美智子
田島英太郎
助川 龍夫
三男 竜夫

平能
殿島 修二
高安 勝久
西村 欽也
飯富 雅介
後見 大槻 文蔵
秀夫
地謡 長谷川 昌作
伊勢 信雄
三男 竜夫
御來観歓迎
船外仕舞
大槻 文蔵
秀夫
後援 名古屋清韻会

一月十八日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

春日龍神
西村 欽也
高安 勝久
田島英太郎
助川 龍夫
藤田 昭彦
大野 弘之

筑紫奥
佐藤 友彦
井上松次郎
八王鳥
衣斐 正宜
竹内 澄子
倉本 雅

観世会定式能
二月八日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能組
柴田初太郎
吉田 定男
後藤 孝一郎
鬼頭喜太郎
藤田 昭彦

鉢
野村 四郎
高安 勝久
田島英太郎
助川 龍夫
野村 元正
高安 勝久
田島英太郎
助川 龍夫

難波
武田太加志
山本 博之
野村 元正
高安 勝久
田島英太郎
助川 龍夫

東
西村 欽也
河村總一郎
藤田 六郎兵衛
北
西村 欽也
河村總一郎
藤田 六郎兵衛

鶴
雲林院
大槻 文蔵
秀夫
後見 梅田 邦久
佐藤 友彦
主催 名古屋観世会

昭和四十五年
加具一
神宮市東区大塚町三六一六

研能会
梅若万三郎

梅若修会
梅若盛彦

修諷会
梅若修一

井上嘉久
京都市北区紫野下島田町六

下田雄三
大阪市東区高麗橋詰町五三

若松宏守
電話(〇七九八)二二七六三九

加藤良久
藤門会

熊沢惠美子
熊沢会

掬水会
柴田初太郎
柴田収武

梅若修会
梅若盛彦

河村一謡会
河村叶石会
河村総一郎

河村一謡会
河村叶石会
河村総一郎

河村一謡会
河村叶石会
河村総一郎

河村一謡会
河村叶石会
河村総一郎

河村一謡会
河村叶石会
河村総一郎

河村一謡会
河村叶石会
河村総一郎

河村一謡会
河村叶石会
河村総一郎

金剛永謹
山田仁三郎

金剛流春鶯会
山田仁三郎

中部金剛会
山田仁三郎

金剛流凌雲社
山田仁三郎

金剛流凌雲社
山田仁三郎

金剛流凌雲社
山田仁三郎

金剛流松風社
山田仁三郎

金剛流松風社
山田仁三郎

金剛流松風社
山田仁三郎

五周年記念名古屋公演

和島富太郎(喜多流)を観る会
 泉嘉夫(鶴世流)を観る会
 野村又三郎(和泉流)を観る会
 一月二十五日(日) 午後一時
 熱田神宮能楽殿

番組
 北 泉 成佳
 高 砂 三島 恵
 能清 ツレ近藤 幸江
 シテ東 嘉夫
 経 西村 欽也
 替之型 後見 殿島 修二
 大槻 秀夫
 地謡 水田 博 塚本 秀雄
 三島 博 小林 二雄
 岡田 徳一 藤田六郎兵衛
 田鍋 徳太郎
 井上松次郎

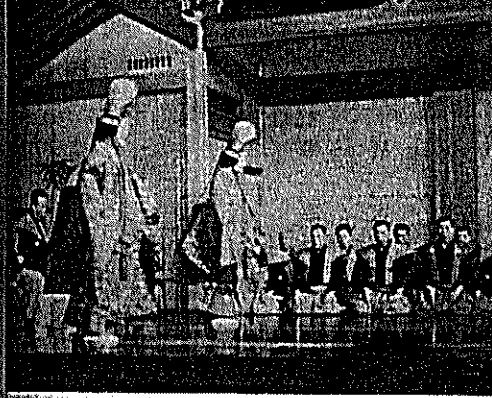
狂言 三人片輪 野村又三郎
 仕舞(喜多) 田 村キリ 松井 彬
 玉之段 梅津 忠弘
 鳥 頭 長田 暁

仕舞(鶴世) 舎 利 殿島 修二
 弱法師 大槻 秀夫
 独吟(喜多) 琴之段 二井 栄逸
 子方泉 真澄
 シテ和島富太郎 高安 勝久
 能船 弁 慶 飯富 雅輔
 真之伝 飯富 雅輔
 波間之笛子 間 早妻 東 野村又三郎
 後見 長田 暁
 富田 陽二
 主催 名古屋喜多流鑑賞会
 協賛 名古屋能楽友会
 後援 泉 能 友 会
 やるまい会
 電話 471-5067

演能記録 十二月の能から

二人静、望月 を観て
 S 生

十二月の演能のうち比較的大曲の出たのは、柳原富士忠氏職分披露能であろう。
 観世寿夫、静夫兄弟の「二人静」は、申合せもよく行き届いているため多く同一人のような感を受けた。二人共に美声とすばらしい声量で満堂を圧していた。体格が少し大小のはかばかどちが兄か、弟か、判じ難い仕手で、地もまたよく一曲を引締めて見応えのある二人静であった。
 「望月」は観世流大御所鎖之丞師でよどみない謡の中に仲々思い入れのある謡を聞かして貰えた。中人後は常は下が白大口になるのを古式のように長袴で獅子を舞わ



静夫 観世 静夫 観世



助 善 助 高安 津 善 助 高安 津

附録
 後見 長田 暁
 富田 陽二
 主催 名古屋喜多流鑑賞会
 協賛 名古屋能楽友会
 後援 泉 能 友 会
 やるまい会
 電話 471-5067

拍子謡について

大槻 秀 夫

その四

これは唯子の基本的な掛所なのである。
 即ちまず右の手を膝から放す時、にやと大きな声でかけ、押える処

昭和四十五年 賀心	社団法人 宝生会 水道橋能楽堂 東京都文京区本郷一丁目一五 電話(〇三)八二一〇六二	宝生九郎 東京都文京区本郷一丁目一五 電話(〇三)八二一〇六二	名古屋異会 主宰 辰巳孝	辰巳孝 岐阜川市香里本通二一五	雲雲会 内藤 泰二	雲雲会 東京都港区西麻布四一八二一八 野口 緑久	雲雲会 倉本 雅	雲雲会 倉本 雅	豊嶋十郎
---------------------	---	---------------------------------------	-----------------	--------------------	--------------	--------------------------------	-------------	-------------	------

佐野正治 金沢市広坂二丁目一十二	衣斐正宜	竹腰勝一	吉田俊彦	緑宝会 名古屋市緑区鳴海町池上十六ノ一 電話(六二)三四二八番 加藤 勝 利方	近藤乾三 東京都豊島区巣鴨五二二三一八	朝日文化センター 喜多流 二井栄逸	喜多流 和調会 和島 富太郎 宝塚市宝梅二丁目十二一	喜多流 喜多 流	喜多流 山本 健才	名古屋和泉流	狂言共同社
---------------------	------	------	------	--	------------------------	----------------------	----------------------------------	-------------	--------------	--------	-------

中部金春会 前田昌広 名古屋市中区老松町一ノ二八 電話(三四)三三四一	福王茂十郎 大阪市東区平野町一ノ二五	福王 幸 西宮市名次町六ノ二	福久保田千三郎 名古屋市奥山町五ノ一五 電話(八四)三二四四番	森 茂好 東京都渋谷区代々木四三三三二	高安滋郎 西村 欽也	西村 欽也	京都高安会 岡治郎右衛門 京都府下長岡町開田 静野一ノ一七	高安流白水会 和泉 太郎 東京都品川区二葉二一八一二 電話(七八)四〇九二番	谷田宗二郎 京都市北区衣笠街道町三ノ一	幸正祥光 幸潮影
--	-----------------------	-------------------	---------------------------------------	------------------------	---------------	-------	--	---	------------------------	-------------



静 シテ 月 狂言 間狂言

名古屋能楽倶楽部会長、社団法人名古屋能楽会副会長、熱田神社能楽殿運営委員会委員長、植村真太郎氏は、一月一日逝去された。享年七十九。

加島 本 倉本 吉 雅

喜多流 山本 才健

谷田 宗二 朗 幸 祥光 幸 正影 幸 潮會

犬 槻 秀 夫

即ち(1)から(4)までは右手で、(5)から(8)までは左手です。この拍子譜は、即ち本場の拍子方である。...

この拍子譜の基本的な拍子方の、即ち本場の拍子方である。...

古曲雑話

西村弘敬 我諸共にゆくと思へよ... 和泉保之

第三十番 野干(やかん)

この曲は、殺生石の後日談ともいべきもので、彼的那須野の原にて化生の者即ち金毛九尾の狐を退治したのは三浦の介、上総の介兩人で、これは勅命を受けてこの野に來り、野干(やかん)即ち野狐は犬に似ているというので、犬を使って射撃の稽古をして遂に目的の野干を射止めた。...

第三十一番 鞠物狂

九州薩摩の國伊地久の何某といふ人が、訴訟のため都へ上り、在りて仏道に入つたとの筋である。...

古曲雑話

西村弘敬 我諸共にゆくと思へよ... 和泉保之

第三十番 野干(やかん)

この曲は、殺生石の後日談ともいべきもので、彼的那須野の原にて化生の者即ち金毛九尾の狐を退治したのは三浦の介、上総の介兩人で、これは勅命を受けてこの野に來り、野干(やかん)即ち野狐は犬に似ているというので、犬を使って射撃の稽古をして遂に目的の野干を射止めた。...

梗 雲 風 會 本 倉本 吉 雅

喜多流 山本 才健

谷田 宗二 朗 幸 祥光 幸 正影 幸 潮會

大藏 彌太郎 基 義 基 義

名古屋和泉流 狂言 共同 社

幸 圓次郎 幸 義太郎

茂山千五郎 茂山千之丞

名古屋能楽鑑賞會 かすみ 會 田鍋惣太郎

大倉長十郎

善竹忠一郎

藤田六郎兵衛 藤田昭彦 龍吟 會

山本敬一郎

和泉保之

たなびき 會 田鍋惣一郎

前川善雄

三宅藤九郎 三宅右近

飯島六之佐 森田光春

幸友會 福井啓次郎 福井良久 柳原富士忠

杉市太郎

寺井政数

吳竹會 三男

観能の手びき

一月の能 熱田神宮能楽殿

一月十八日(日) 宝生会
 楊貴妃(よおきひ)
 シテ 宝生九郎

白楽天の「長恨歌」によつた異國
 だねの三番目の能である。

唐の帝、玄宗皇帝は寵姫楊貴妃が
 馬冤ケ原で殺害されて後、悲しみに
 沈み、その霊魂の行方を道士に探す
 よう命じた。道士は天上界や地下ま
 で探し求めたが判明せず、海中の仙
 郷蓬萊山へ来たところ、太真殿とい
 う宮の中から昔を想う貴妃の独言が
 聞える。来意を告げ玉の簾を引き揚
 げられ、美しいお顔を見ることが
 出来て、いろいろの帝のことも語
 る。しかし帰って後、このことを報
 告するに、何か証拠が必要と言えは
 生前皇帝と交わした私語を、もらし
 てその証とする「天にあらば比翼の
 鳥とならん、地にあらば連理の枝と
 ならん」との詠言であると涙で袂を
 濡らしありし夜遊の舞を舞う美しい
 中で愛を充分に含んだ曲である。

春日龍神(かすがりうじん)
 シテ 内藤泰二
 この曲は「古今著聞集巻二」に高
 辨上人親尊のご遺跡を拜まんと弟子
 千余人を相具して天然へ渡らんとす
 とある項より出典した世阿弥作であ
 る。

船弁慶(ふなべんけい)
 シテ 和島富太郎
 いまさら観能の手びきを記すまで
 もない衆知の曲であるが、今回は高
 多流による小書について、参考まで
 に記す。

真之伝は、観世流の前後の替、と
 ほぼ同一で、思いもよらぬ浦波の、
 声をしるべに出船の、の処へ早笛が
 入り後シテの出となる。

波間之拍子は「声をしるべに出船
 の」と舞台へ走りこんで常座で音の
 ない拍子を踏む、となつて居り、そ
 の辺にいろいろ替わつた演出が見ら
 れ、早装束は間狂言が脇に船出しを
 言い付けられ器へ入り直ちに装束を
 替えて直ぐに船を持ち出すわずかの
 間に装束を替える習い物である。

狂言 三人片輪
 (さんになかたわ)
 不具者を召抱えたいという金持の
 許へ、三人のはくち打ちが片輪に化
 けて次々と現われる。主人がめいめ
 いに絹と銭と酒の蔵を預けて外出す
 ると、彼らは本性を現わし虫のいい
 相談をするが……。

歌舞伎の所作事に改められても知
 られ、玄恵法印作と伝えられる。

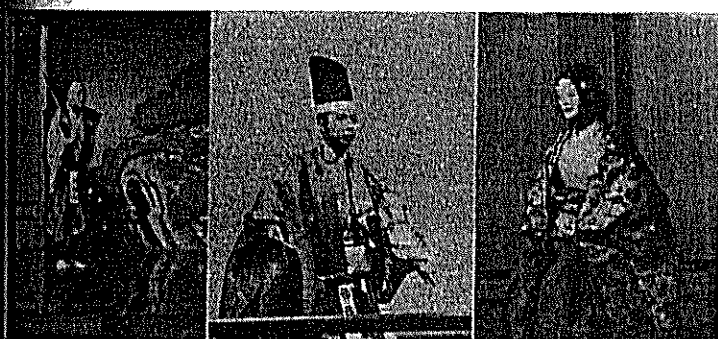
一月二十五日(日)
 和島富太郎、泉嘉夫
 野村又三郎を観る会
 清経(きよつね)
 シテ 泉嘉夫
 ツレ 近藤幸江

一月十五日(祭) 清韻会
 鶴亀(つるかめ)
 シテ 福岡四作
 ツレ 殿高満里子
 カメ 殿高博子
 半能 養老(よおろお)
 水波ノ伝
 シテ 殿島修二
 天女 佐藤アヤ子

清韻会「鶴亀」及び半能「養
 老」は十二月号(面)に紹介(十二月
 十五日とあるは一月十五日の誤り)

四十四年の掉尾をかざる乱能は、
 旧うら二十一日熱田神宮能楽殿で催
 された。

乱能 アルバムより



【写真】(上)右能「通小
 町」シテ田鍋惣一郎(小鼓)
 (左)「通小町」ツレ後藤孝
 一郎(小鼓)ワキ鬼頭八郎
 (太鼓)笛 衣笠正宜(宝生
 流仕手方)小鼓 橋岡久馬
 (観世流仕手方)大鼓 内藤
 隆二(宝生流仕手方)地謡
 河村三郎(大鼓)和泉保
 雄(小鼓)池田三郎(小鼓)

次郎(小鼓方) (左) 狂言「昆布売」
 戸田秀雄(宝生仕手方)
 上から4段目(右) 能「松風」シテ田
 鍋惣一郎(小鼓方) ツレ田鍋洋一(小鼓)
 ワキ井上松次郎(狂言方) 笛 殿島修二
 (観世仕手) 小鼓 辰巳孝(宝生仕手)
 大鼓 和泉保之(狂言)
 (左) 能「紅葉狩」小鼓 鈴木一雄(観
 世仕手) 大鼓 梅田邦久(観世仕手)
 太鼓 加藤丈太郎(観世仕手)

の友社
 次上本町2-20
 464)
) 7984
 屋 36393
 1年 300円
 1年 400円
 30円

集能 主催

愛知県、名古屋市が後援
 12月10日 能楽殿
 ことになった。
 この歳末助け合い運動には能楽
 どを公演、第一部午後二時始、第
 二部午後五時半始、会費は一部、

皮露能(有料)
 一番会(無料)
 川能(有料)
 定式能(有料)
 番組別掲
 能楽鑑賞会
 (有料)
 会乱能(有料)
 番組別掲

謹賀新年
 ご尊家の御多幸を祈り上げます
 能楽の友 同人一同社

山助 川口 義郎 夫
 野崎 太郎 茂郎
 池田 茂郎
 長生 会
 鬼頭 喜太郎
 鬼頭 八郎
 吉田 定男
 筑鉦 一

昭和四十五年
 賀正

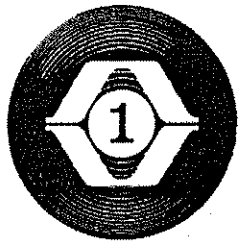
土木・建築・請負業
 設計・施工
井口土建株式会社
 代表取締役 井口 鳴留
 建築部専務 井口 吉次
 土木部専務 井口 哲志
 豊橋市魚町一三 建築部 電話☎4370・☎5128 土木部 電話☎0674

あなたに心をこめておくりする……
富士道の婚礼道具

III 家具のふじみち

本 社 名古屋市中区栄3丁目34番40号
 ショールーム TEL 代表(262) 5547
 工場 愛知県西加茂郡三好町 TEL (05613) 2-1178

鮮魚 魚節
伊 魚
 豊橋市魚町一八 電(52) 5256
 豊橋也留舞会連絡所(山本浅太郎方)



現代をみつめる眼 東海テレビ

能楽の友

題字は熱田神宮 鎌田宮司筆

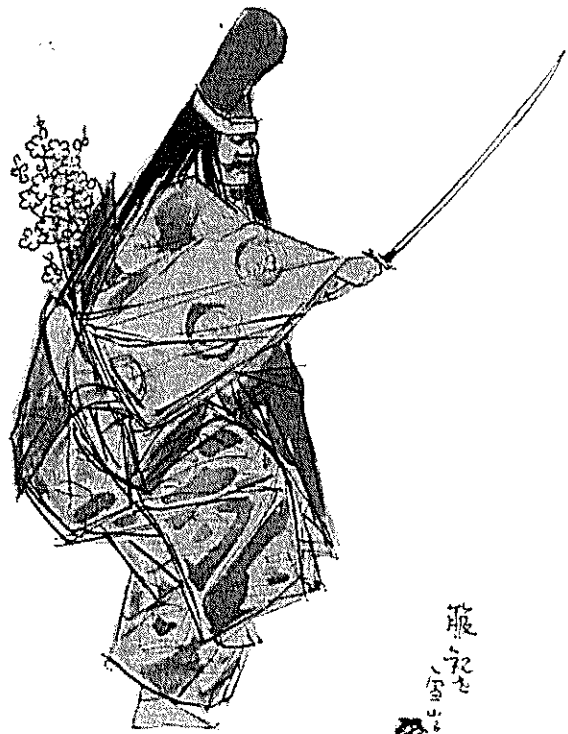
発行 能楽の友社

名古屋千種区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 300円
郵送の場合 1年 400円
— 部 30円

能楽の友創刊3周年記念

能「道成寺」「小袖曾我」

3月21日 別会能を公演



「籠」のスケッチ 仙田雪山子画 (解説②面掲載)

能楽愛好者の要望にこたえて、四十二年一月創刊された「能楽の友」紙は、ここに創刊三周年を迎え、これを記念して特別企画として、きたる三月二十一日(祭)熱田神宮能楽殿で「三周年記念別会

六十通越えるお礼状

能楽協会 歳末義捐に感謝の手紙

名古屋支部

社団法人能楽協会名古屋支部(支部長田鍋惣太郎氏)では、さる十二月十三日、初の歳末助け合い義捐金募集能を開催、協会員はじめ愛好者のあたたかい協力により、義捐金として、愛知県、名古屋市にあわせて二十二万二千七百円の義捐金を寄託したことは、前号既報のとおりであるが、この義捐金に対して、県下、名古屋市の老人福祉施設、母子寮、厚生施設、療養所、身体障害施設、乳児施設、児童施設から一月末日現在六十通の感激の礼状が寄せられて

心温まる気持で正月を迎えることができるとお祈り、これからも多くの本を点訳し少しでも多くの盲人に読んでもらうという点字文庫会員、親子三人で働いて必らず恩を返させて頂きたい、私もその覚悟で一生涯懸命に働きますと鉛筆書きの母、小さく世の片隅に生きていることから大きな暖い気持ちにふれたという母、手紙、はがきの一通一通に気持ちが通ったお礼の手紙である。

なお能楽協会名古屋支部では早速丁寧な謝辞と激励の言葉をそえて返信している。

観世流能「道成寺」の能二番を自由席一、五〇〇円、学生券六〇〇円。
また今回の三周年記念能にあたり、熱田神宮宝物殿の観覧特別優待券が能楽の友社から謝意の意をこめて贈呈される。
なお会員券のお申し込みは、関係事務所、熱田神宮能楽殿、連絡所、名古屋千種区吹上本町二ノ七三、田鍋方(電話七六一七九九)、能楽の友社にお問い合わせ下さい。
〔番組は②面掲載〕

うら。久しぶりに観たくせに「能を語る」などはオコがましいが、別に立派な何ぞやだ。つむじは、いだが、小生はあれで結構と思つからご安心しなさい。また立派な何ぞやだ。

ウしました。「清経」は小生の大好きな能。「少し弱過ぎはしなかつたか」などとおっしゃる通人が、だが、小生はあれで結構と思つからご安心しなさい。また立派な何ぞやだ。

毛頭ないが、オシだけが自立たぬこと、自立たぬこと。それには一方メクラやイザリ協力も必要だ。ところだ。後シテの知盛はずごかつた。まことにどうも何とも

たことは、何人として感謝にたえませぬ。どうかこのうらえともご支援、ご愛顧を賜りたくお願い申し上げます。

能楽の友社同人(順不同)
伊藤鉄之進、梅田邦久、加野昭二、佐藤卯三郎、殿島修二、杉村竹翠、高安滋郎、田鍋惣太郎、二井栄逸、内藤泰二、野村又三郎、花本徳三郎、来田初太郎

演能カレンダー

- 〔2月〕
15日(日) 梅猶会 能 (有料) 番組①面掲載
22日(日) たなびき会 (米聴放)
 - 〔3月〕
1日(日) 九阜会 (米聴放) 番組①面掲載
8日(日) 青陽会 (有料) 番組①面掲載
21日(祭) 能楽の友創刊3周年記念別会 能 (有料) 番組②面掲載
22日(日) 藤門会 (米聴放)
 - 〔4月〕
5日(日) 竜吟会 (米聴放)
12日(日) 久田観正会 (米聴放)
18日(土) 猶風会 (米聴放)
19日(日) 観世会定式能 (有料)
26日(日) 大槻清韻会 (有料)
29日(祭) 幸友会 (米聴放)
- 以上熱田神宮能楽殿—

演能案内

名古屋梅猶会能 二月十五日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿	東 北 舞 組 前川芳周 大泉賢次郎	巻 網 舞 熊沢恵美子 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎 三男	班 舞 之 段 河村 鉦二 殿島 修二 加藤丈太郎 久田 秀雄	天 鼓 之 段 久田 秀雄	梅若 猶義 高安 滋郎 高安 勝久 河村 鉦一郎 福井啓次郎 藤田六郎兵衛 佐藤 秀雄 佐藤卯三郎	昆 布 狂 言 井上松次郎 井上礼之助 大野 弘之	玄 師 長 梅若 修一 ツレ 梅若 修一 佐藤 太俊 梅若 盛義	附 祝 言 西村 欽也 飯富 雅也 佐藤 友彦 田鍋惣太郎 助川 昭彦
--------------------------------------	--------------------------	--	---	------------------	--	------------------------------------	---	--

能野 守 高安 滋郎	能 熊 田鍋 惣太郎 高安 滋郎 佐藤卯三郎 井上松次郎 大野 弘之	能 頼 河村 鉦二 西村 欽也	研究 能 高橋 鉦一 輪 高安 勝久	青 陽 会 能 三月八日(日) 熱田神宮能楽殿	天 鼓 之 舞 西村 欽也	羽 衣 舞 高安 滋郎	名古屋観世九阜会大会 三月一日(日) 熱田神宮能楽殿	田鍋 社中 たなびき会囃子会 二月二十二日(日)午前十時始 熱田神宮能楽殿
------------	--	--------------------	-----------------------	-------------------------------	------------------	----------------	----------------------------------	--

蔵 酒 蔵 社
金山店・富士
大津橋店・大

日本人と能楽



熱田神宮宮司 篠田康雄

能楽は南北朝から室町時代にかけてその型をととのえ、とくに足利義満の保護で芸域をひろげたもので、六百年からの歴史をもつ秀れた古典芸能である。

ことに徳川幕府の儀式芸能とされ、四座一流はそれぞれ様をうけるようになって、ますます隆昌をきわめたが、明治維新に旧勢力が力を失うとともに大きな打撃を受けて滅亡の危機にさらされた。

しかし幸にもそれは一時的な現象にとどまって、今日の盛時を迎えるにいたったのであって、伸々隆昌曲折に富んでいる。それだけに、又力強いものを内に秘めている芸能であるとも言える。

さて今日一般に、歴史を忘れ、日本の国に生れ出るべき理由を具

日本はよきことさらに目を凝らして、発生し、成長して来たものであつて、そこには歴史があり、各時代の日本人の心が凝結しているものであるからである。

したがってこれに關係し、これに親しみ、これを鑑賞している内に、人々はおのづから日本のよきに醒め、日本人の誇りを感得することが出来るようになるのであつて、今日特にこの種の芸能が尊重せられねばならない理由がある。

この高い見地から専門家や愛好家の一層の精選と奮起とが望まれている。どうか日本の発展のために格段のご努力を切に願う次第である。

義談装束 (二十六)

二井栄逸



ボクンの違いだと思ひます。ボクンに代表される洋服は、合理的なリアリズムで、袖は袖だけの役目です。これに対して和服は袂一つとっても、袖でもあるしボケッともあるといつたように融通無碍なところがあつたり、紐が基本にあつて、そこでピシッと決つている。その紐も、ただギョウギウギ締めつけばいいというものはなく、要所要所への心くばりなんでしょう。だから、能役者の衾の紐などは、ゆつたりと結んでいながら、決してズリ落ちることがないんですよ」と、高橋さんは言つておられた。

和服がうまく着られない。これは、ババ抜きやババ生んだナンセンスかも知れない。ババ抜き、ゲバゲバ、ニャロメ等の現代の世間は、ずいぶんゆるいものを乱用してしまつてゐるが、また、その反面、新進の能楽も生まれてゐる。

さて、装束談義。今日は袴（かみしも）を書いてみる。袴は難子方、地謡、後見の常衣であるが、現代では、小書つきの場合、袴を着用、普通の演能の場合は紋服と納めてゐる。また、間狂言の多くは狂言袴といつて、模様のあるもの、また、長袴を着用する。

江戸時代、同じ染色の肩衣（かたぎぬ）と、はかまを小袖の上につけた武士の礼装であつた。元來、上と下の二部で「そろえ」となる衣服の形であつたが、室町末期には、肩衣とはかまを合せて袴と

「箆」の解説

源平盛衰記に「梁高景時城に入る並に景時秀句の事」という題で景時がその子源太郎景季の見えないので二度がけするその奮闘ぶりを描き、そして梶原がその時、梅が枝を箆に刺して指していたという物語をのせている。白梅の枝を笠印として奮闘する若武者景季の原とした勇壯さは、寒中に咲く梅の美しさにも通ずるといふやう。そして勇敢な景季の修羅道の苦患の表現、二月の季、梅花の風流と一抹の哀愁が修羅物の情趣を物語つてゐる。

拍子謡について

大槻秀夫

繰り返して記すと、上の句八文字は半声、七文字は本間（間なし）、六文字はヤの間、五文字はヤアの間、四文字はヤアの間、三文字はヤアハの間である。ここで復習の意味に左の如く、「しんは全部で左の如くである。「う」とい

能の手びき

二月の能 熱田神宮能楽殿

二月十五日（日）梅鑑會

シテ 梅若盛義

シテ 象（げんじょう）

シテ 梅若盛義

次第の囃子で、ツレ太政大臣藤原師長が、ワキ侍臣、ワキツレ使者を従えて登場、次第、道行に、師長が琵琶の奥義を究めるため人唐する道すがら名所の月を眺めようと須磨の浦に赴く旨を詠い、若セリフの後師長は脇座にて床几にかたむき、以下下座する。

出陣の囃子で、後シテ村上天皇が現われ、竜宮にある琵琶の名器獅子丸を取り寄せ、師長に弾かせ、正に出「いかに下界の龍神」云々と詠に向つてゐる。

早番で龍神は琵琶を弾けて現われ、龍師長に渡して帯に巻く。

能楽の友三周年記念 三月二十一日(祭) 一時始			
熱田神宮能楽殿			
舞囃子高砂	内藤 泰三	鏡 鏡一	鹿取 希世
母三郎	杉村 竹翠	鬼三郎	水田 利之
五郎	水田 利之	十五郎	泉 博二
能小袖曾我	大野 弘之	後藤 孝一郎	藤田 昭彦
狂言箆	野村 証二	青木 祥二郎	井上 凡之助
連吟	網之段	熊沢 惠美子	加藤 良久
独吟	玉之段	有賀 滋子	二井 栄逸
舞囃子遊行	柳 青柳之舞	柴田 初太郎	田 鶴之助
舞	笠之段	青木 祥二郎	片上 慶次郎
仕舞	葵 上	吉田 定男	鬼頭 季信
舞囃子絃	上	福井 啓次郎	鬼頭 季信
能道成寺	梅田 邦久	山田 仁三郎	飯島 六之助
	西村 欽也	高安 勝久	田 鶴之助
	高安 勝久	井上 松次郎	佐藤 秀雄
	後見 泉 太次郎	片上 慶次郎	泉 太次郎
	鏡 鏡一	片上 慶次郎	泉 太次郎
	後見 泉 太次郎	片上 慶次郎	泉 太次郎
	鏡 鏡一	片上 慶次郎	泉 太次郎
	後見 泉 太次郎	片上 慶次郎	泉 太次郎
	鏡 鏡一	片上 慶次郎	泉 太次郎

演、二ノ句に汐波む老の身の苦しさを詠い、アシライにて舞台に入り、ツレとのカケ合ひに、須磨の浦の景勝を讀み、ツレは上歌の打切でクツロギ、シテは正へ出、田子を左右の手にかけるように担えかえて、「田子浦の汐をばいざ下り立たん」と汐を汲み、常座にクツロギ、田子を下す。

「塩屋に帰ら休まらざるにて候」とシテは正中に出て坐す。ワキはシテに塩屋の主かと訓をかけて、太政大臣であり、天下の琵琶の名手である師長の一夜の宿をと乞う。問答、カケ合、地の下歌、上歌の後シテは、宿を承知する。一年前の神泉苑での雨乞いに秘曲を奏し、大雨を降らせ、雨大臣といわれた方の宿をするのだから、思出にその秘曲を聴かせて欲しい旨を夫婦している。ワキも師長にそれをすすめる。師長は「この須磨の巻の春かよ」と詠い出し、「玉の緒琴を弾き鳴らし」と扇を開いて琵琶に擬して構え、地の「管絃の障りあるらん」にて扇をたたみ直す。シテはこれを不審し、折柄の村雨のためであるからと聞き、「百にて飯屋を登き渡し」と立つて常座へ行き、扇をひろげ「さつと登き」とハネ扇して面をつかい正へ出て下座し、聞く。

ロンギではシテとツレが琵琶琴を弾く態で、シテは扇を左に抱えて安坐し、ツレはそのままに師長はその妙手に驚き、恥ぢて人唐を断念し、密かに塩屋を立ち去ろうと、床几を立て出て出るが、シテは気づかず、ツレがそれに気づいて二人で師長の袂を取る。老翁夫婦はここで初めて本体を明かし米序で申入する。

割烹・小料理 城

住吉小路(中区第3-10) 電話 241-0248

喫茶とグランド・カルチャーセンター内 電話 731-1128

宝生宗家著 舞集仕解第9巻 価 780円 70円

春日龍神・忠度・井筒・雲林院宅 三井寺・高野物任・龍太・鼓・安宅

池田和市著 うたい名所を歩く 価 600円 70円

全国の謡曲名所旧蹟を足でたずねた紀行集

東京都千代田区神田神保町3-9 電話 東京 4163番 わんや書店 東京都中央区銀座8-7-5 電話 (571) 0514

拍子謡について

大槻秀夫

即ち上の句七文字の一字目のいがないわけである。上の句六字、五字等の字不足は凡て、いとかいとか頭の仮名が無いと考へるのである。そしてその字不足の頭の部分は前句の下の句の終りの仮名を引いて埋めるのである。即ち次の如くなる。

1 2 3 4 5 6 7
いーろはにーはへとーちりぬる
をーいーろはにーはへとー

右の如く上の句六文字は、七文字が原則であるから、即ち一字不足であつて、この場合を「ヤの間」と言うのである。上の句が五文字の時は二字不足であつて「ヤアの間」と言う。

謡本には、只ヤとかヤアとか記してある。お稽古をしていてこのヤとかヤアとか出てくると、終りを引張って謡っているが、これは次の上の句が字不足のためその頭の部分を埋めていと言ふことを知らなければならぬ。

第三十二番 枕慈童中入前

枕慈童(親世流は菊慈童と称す)の曲は、周の穆王に仕えていた慈童が、誤つて皇帝の御枕を踏ぎ越えたので不敬の罪に問われ、山中へ流刑に処せられることとなつた。宮人が慈童を輿に乗せ御懸山へ捨てに行つた。出発に先立ち皇帝は憐れに思召されて彼の枕に法華經の普門品の偈の一部「具一切功德慈眼視衆生福寿海無量是故応頂礼」と書き記して慈童に賜つた。慈童はこの御枕を捧持して輿にゆられて山に到着した。宮人は直ちに慈童に橋を渡り山へ入るように命じ、慈童が橋を渡るや直ちに橋を引き放ちて崩路を絶ち、そのまま慈童は山に残されることになつた。これ迄が本曲の前段で、ここで中人になり以後七百年の後

に物使が様子を見にくると慈童が七百年の長寿を保ちていたといふ現行曲の枕慈童でありませう。

第三十三番 舞車

遠江の園見附の宿(元の中泉、現在の磐田駅より北方約一キロ)

古曲雑話

西村弘敬

には昔から色々の祭礼が行なわれていた。中にも祇園(きおん)祭には舞車と東西二輛の車の上で舞を舞わせる行事で、舞人にはこの宿を通行する上り下りの旅人から撰定して舞を舞わせるのである。或る年の祇園祭に、鎌倉亀ヶ江の谷の住人で或る都の女を家に

舞が始まることとなり、西方の車より始まった。舞人は女性で舞は伊勢物語で在原の業平が契りをつけた女性の数は数多あるも物語にあるのは十二人あり、先ず紀の有常の娘を初めとして忠仁公の御娘清和帝の御后染殿そのほか十余人何れを勝り何れが劣るなど定めら

れぬと物語の本意を歌い舞いをつなげた。さて次は東の車の舞にて、これは雷電の曲の中入前にある筋で、比叡山延暦寺の座主法性坊の僧正が仁王会を執行している時、去る二月に筑紫にて果てられた管承の幽霊が来り無実の謔言のため配所に客死した恨を述べ、柩櫃を口に含み噛み砕き、妻戸に吐きつけたれば妻戸が燃え上りたる奇特の様子を歌い舞つて終わつた。然るところ見物衆より今一番との所望のため、今度は大磯の虎御前が曾我の結成に名残を借みたる所を東西車を並べて相舞とする



楊貴妃



舟弁慶

舟弁慶の和島富太郎氏は豪放な芸の持主と定評があるが、中人前などしつくりとした感を受け、さすがと思われた。中人後は、耕地に金の立神輪の半切に白地に金の静海波の狩衣を衣紋着けにしての出立で、小書「波間の拍子」は波上に拍子踏む心にて音を出さぬ点あざやかに動き面白く観ることが出来た。

演能記録

1月の演能を観て

S 生

十五日清韻会は予定の頼政は、赤間氏の病氣のため、急拠福間氏の鶴亀に変更になった。鶴と亀を殿島氏姉妹で舞われ、姉妹とはいえず実によく揃つて、玄人はだしの感があり、シテの福間氏も鶴亀の曲柄によくあつた。楽など天下泰平安穩無事を祝ぐ、気分を出しておられた点など立派なものと想われた。

養老水波の伝も、囃子方の呼吸とよくあつた。あの烈しい動きに殿島氏も水年の経験を活かした舞振りで、面白く観ることが出来た。二十五日、三人を観る会では初

番清韻を、泉嘉夫氏とツレ近藤幸江氏で演ぜられた。替の型の小書で装束が替るので、どんな装束かと期待して観た。先ずツレの唐織も相当年代の立派な物、シテの着付もなかなか古い縫箔に、色、柄共によく調和した色大口に、気品のある長袖を肩上げして出られ、替の型にうつつけの出立で、あざやかに舞い納められた。

即ち当るヤの間と、当るヤアハの間は、ヤの間の間、ヤアハの間よりは半拍ずつ早く、第一拍、第三拍に当って謡出すので「当る」と言うのである。大成版ではこの当るを△の印にて、ヤ、ヤアハと記してある。それは前述の本地の符号として記した通り、第一拍と第三拍は△印のためである。

尚この当ヤ、当ヤアハの間は増節のためには生ずる間であつて、字不足から生ずる間ではないのである。

今年の名古屋の演能は、名古屋學生能楽連盟の一月大会(一月七日)で幕を切られた。能は名大宝生の経政と、岐阜女子短大金剛の小督で、他に舞囃子、仕舞、連吟、等盛沢山の番組で、各校とも真面目に、一生懸命の演出であつた。経政も小督も、地謡を全部字生で謡われた。小督はシテのほかワキ、ツレ、間狂言まで、それぞれ、自分達で懸命に演技されて、技の至らぬ点もあつたが、稽古の積み重ねによる不安のない、立派なもので、観ていて安心と好感が持たれた。

いよいよ研鑽せられ、来年はもっと充実したものなることを望んで止まない。十五日清韻会は予定の頼政は、赤間氏の病氣のため、急拠福間氏の鶴亀に変更になった。鶴と亀を殿島氏姉妹で舞われ、姉妹とはいえず実によく揃つて、玄人はだしの感があり、シテの福間氏も鶴亀の曲柄によくあつた。楽など天下泰平安穩無事を祝ぐ、気分を出しておられた点など立派なものと想われた。

即ち上の句七文字の一字目のいがないわけである。上の句六字、五字等の字不足は凡て、いとかいとか頭の仮名が無いと考へるのである。そしてその字不足の頭の部分は前句の下の句の終りの仮名を引いて埋めるのである。即ち次の如くなる。

1 2 3 4 5 6 7 8
いーろはにーはへとーちりぬるを
をーいーろはにーはへとー

即ち上の句八文字の場合、第一字目を、前句の終りの息継ぎの所、第八拍から謡出すのである。これを「半声」と言う。

上句の八文字でも半声でなく本間に謡う場合もあるがそれは後述する。上の句九文字の場合も半声で謡う。上の句九文字の場合、その一字目に必ず振りまたは廻りがあるものであるから、これは増節の説明の時に記すことにする。

謡本に上の句七文字の時は間なしであるから何も記号はない。また上の句八文字の時は、句読点がなく代りに、たての線が入っているのが半声の意味している。

例一 羽衣ケセより
1 2 3 4 5
木間 たーなびきーにけりー久方の
ヤ たぐひーなみもー松風も
ヤア おもーしうやー天ならで
ヤア そーのうへー天地は

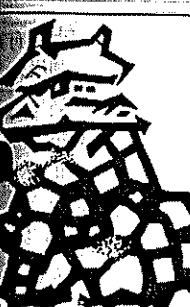
今年の名古屋の演能は、名古屋學生能楽連盟の一月大会(一月七日)で幕を切られた。能は名大宝生の経政と、岐阜女子短大金剛の小督で、他に舞囃子、仕舞、連吟、等盛沢山の番組で、各校とも真面目に、一生懸命の演出であつた。経政も小督も、地謡を全部字生で謡われた。小督はシテのほかワキ、ツレ、間狂言まで、それぞれ、自分達で懸命に演技されて、技の至らぬ点もあつたが、稽古の積み重ねによる不安のない、立派なもので、観ていて安心と好感が持たれた。

今年の名古屋の演能は、名古屋學生能楽連盟の一月大会(一月七日)で幕を切られた。能は名大宝生の経政と、岐阜女子短大金剛の小督で、他に舞囃子、仕舞、連吟、等盛沢山の番組で、各校とも真面目に、一生懸命の演出であつた。経政も小督も、地謡を全部字生で謡われた。小督はシテのほかワキ、ツレ、間狂言まで、それぞれ、自分達で懸命に演技されて、技の至らぬ点もあつたが、稽古の積み重ねによる不安のない、立派なもので、観ていて安心と好感が持たれた。

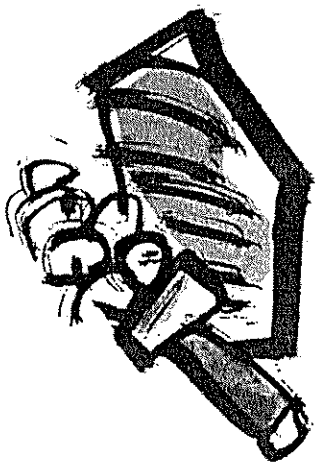
観能 二月の

師長が経政の奥義を究めるため人唐する道すがら名所の月を眺めようとする。須磨の浦に赴く旨を謡い、着セリフの後師長は脇座にて床几にかたまり、以下も手廻す。

早稲で龍神は長巻を捲けて現われ、ツレ師長に渡して幕に退く。



養老



三番 伊勢水氏

年の始め、或は季節の変わり目などに、節目を定めて互いにその日を祝い、祝賀を贈りたりして、無病息災・除厄招福、引いては国家の隆昌を祈るの儀は、昔も今も流らぬ世の人々の心であり、この精神は、神社の祭祀、古典芸能、はたまた社会一般の風習の上に、民族信仰として、色々な形で継承されている。

- 1. 人日節 (二月七日)
2. 上巳節 (三月三日)
3. 端午節 (五月五日)
4. 七夕節 (七月七日)
5. 重陽節 (九月九日)

節会と節句

熱田神宮権宮司 長谷晴男
皇学館大学教授

節日(せちじつ)とは、季節の変わり目などに、祝を行う日の義で、奈良時代の基本法令であった「大宝令」の中に「凡正月、一日、七日、十六日、三月、三月、五月、五月、七月、七月、十一月、大嘗、日、皆為節日。其普賜、賜トハ臨時ニ賜ル。」とあることにより、その起源の如何に古いか窺われる。ただ「九月、九日」を節日としていないが、純日本紀に「大宝二年十二月甲午勅曰、九月九日、十二月三日先帝忌日云々」の史料がある。これらを考え合わせると、たまたま九月九日が先帝の忌日であったので、一時的に節日からはずされたままであって、それ以前に於ては「九月、九日」も節日であったとするのが穏当な見方であろう。

節会とは、古くは宮廷に於ける節日の集いの義であったが、折り清める日」として、不祥を除くような折には、朝廷より群臣に対して酒食を賜るところから、後世に至っては主として、宮休を無で、之に災厄を負わせて延に於て公事のある節日の際、「宴會」を意味することとなった。明治維新後は、諸制度の改革に伴い、本朝に於ける節会は悉く廃止されたのである。

節会とは、古くは「節供」であり、節日毎に、天子に供する御膳、または御膳を供する義であった。古書に「御節供」「供御節供」などとある。

節会とは、古くは「節供」であり、節日毎に、天子に供する御膳、または御膳を供する義であった。古書に「御節供」「供御節供」などとある。

の間に、断然とした区分は見出し難い。強いていうならば、節会が宮廷限りのものであったのに対し、節句は上流社会から一般社会へと広く行い来たものであるといえよう。

節句は、古くは「節供」であり、節日毎に、天子に供する御膳、または御膳を供する義であった。古書に「御節供」「供御節供」などとある。

節会とは、古くは宮廷に於ける節日の集いの義であったが、折り清める日」として、不祥を除くような折には、朝廷より群臣に対して酒食を賜るところから、後世に至っては主として、宮休を無で、之に災厄を負わせて延に於て公事のある節日の際、「宴會」を意味することとなった。明治維新後は、諸制度の改革に伴い、本朝に於ける節会は悉く廃止されたのである。

の友社
〒164
7984
36393
F 300円
F 400円
30円

意欲的な演能期待

三浦乙太郎氏創 刊記念誌

放送予定
2放送8時
木友枝久久夫
洗金剛巖
村喜多流 演者
大蔵流
があります。

昭和四十五年
かまこ
邦
梅田邦久
名古屋市昭和区台町二丁目

2月の謡曲狂言番組
NHK ラジオ 第2放送
毎日曜日 午前8時から9時まで
(再放送) 毎金曜日 午後2時から3時まで
2月15日(日) 狂言「伯母ケ酒」 善竹忠一郎 ほか
「八句連歌」 茂山三郎 茂山千五郎
2月22日(日) 金春流「安宅」 桜馬道雄 ほか
NHK教育テレビ
2月11日(祝) 午前10時30分~12時
能楽生流「鉢木」 近藤乾三 ほか
22日(日) 午後4時30分から再放送
2月15日(日) 午後4時~6時
狂言「鬼の継子」 善竹忠一郎 ほか
「鉄輪」 金剛巖 ほか
狂言のかわることがあります。ご了承下さい。

笛師・菊田東穂氏
CBC文化賞を受賞
笛師・菊田東穂氏は、日本で稀な竹つくりとして六十有年、一筋に打ちこむ名古屋市の隠れた大きな存在であるが、このたび多分にわたり文化発展に貢献した功績が顕彰され、CBC文化賞を受賞した。
これを記念して池田長三郎氏、羽塚聖子氏ら同氏とゆかり深い有志が發起人となり、さる二月八日午前十時三十分から熱田神宮文化

欧風料理 とんかつ 亭
名古屋市千種区大久手町4-11 TEL731-3680

餅よめ名物
季節料理 美濃
名古屋市中区池田町(松坂屋東) 女子大小路GS観光ビル地階 電話(262)2934番

料理 軒
蓬菜軒
本店 熱田区神戸町3-4 電話(671)8686~8688
本 神宮東門店 熱田区新宮坂町1 電話(671)5596~5598

世界と結ぶ
マツザカヤ!
世界の優秀品を豊富にとりそろえました……



松坂屋

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友
名古屋千種区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購 読 料 1年 300円
郵送の場合 1年 400円
一 部 部 30円

能 楽 の 発 展 期 して

温 かい 激 励 と ご 支 援

日本民族のもつすぐれた文化財 屋支部はじめ能楽愛好の方々、ごもかく石の上にも三年の歳月を経て、三月二十一日に「能楽三周年記念別会能」を催すことのできるまで育てて頂いた。このことは、ひとえに創刊以来は、昭和四十二年一月、創刊以来果たして石に花咲くかといわれ、市、熱田神宮、能楽協会名古屋、お寄せくださった各界のご支援、



「道成寺」のスケッチ 仙田雪山子画

「能楽の友」が第一号を出したのが、昭和四十二年一月、創刊以来果たして石に花咲くかといわれ、市、熱田神宮、能楽協会名古屋、お寄せくださった各界のご支援、

創刊三周年を祝して
名古屋市長 杉戸清
日まじに暇がなくなりまして。能楽愛好者の機関紙「能楽の友」が、ここに目出たく創刊三周年をお迎えになり、記念公演として別会能を催されますことを、心からお祝い申し上げます。

創刊三周年を祝う
名古屋市長 宮田一雄
名古屋能楽界の動向を報ずるのと共に、その振興に貴重な役割を果しておられる「能楽の友」

お祝辞 沼 艸 雨
能楽の友が、早三年を迎えられた由、おめでとうございます。能の会をつづけることはむづかしいことですが、能の刷り物をつづけることは更にむづかしいこと。それを三年もつづければ、尚飛躍の体制をとっていただけることに敬意を表します。

お祝辞 沼 艸 雨
能楽の友が、早三年を迎えられた由、おめでとうございます。能の会をつづけることはむづかしいことですが、能の刷り物をつづけることは更にむづかしいこと。それを三年もつづければ、尚飛躍の体制をとっていただけることに敬意を表します。

海外における能への関心の高まりは、いろいろな角度から幾多述べられていますが、「見直される日本の伝統・歌米の演劇を見て」と題して、朝日新聞河地前特派員はつぎのように伝えている。

舞臺子高	砂	内藤泰三	田淵洋一	鹿取希世
母三郎	杉村竹翠	五郎	泉修二	河村修三
能小袖曾我	大野弘之	後見	河村修三	藤田昭彦
狂言箴	野村又三郎	井上孔之助		
連吟	網之段	加藤恵美子		
独吟	玉之段	二井栄造		
舞臺子遊行	柳	柴田初太郎	田淵徳太郎	鬼頭八郎
仕舞	葵之段	青木洋二郎	梅田邦久	慶三郎
舞臺子絃	上	山田仁三郎	福井啓次郎	鬼頭季信
能道一成	寺	梅田邦久	西村敬也	飯島六之佐
		高安勝久	田鍋惣一郎	金春忍右衛門
		井上松次郎	佐藤秀雄	
		後見	殿島修二	竹内六郎
		泉修二	加藤兵衛	矢代三郎
		後見	片山慶次郎	古橋正士
		鐘後見	片山慶次郎	古橋正士
			堀本秀雄	小林慶三

別会能番組
三月二十一日十二時三十分始
熱田神宮能楽殿

株式会社 代表 名電
料理と家

拍子譜について

大槻 秀夫

以上の如く上の句が七文字以下の場合は、一字不足から四字不足までであるが、前記の表の如く一字不足は一拍分下って読出すが、二字不足は二拍分下って読出すのではなく一拍半下った処から読出し、三字不足が二拍下って読出し、四字不足(即ちヤラハの間)が三拍下った処から読出すものであることをよく頭に留めて置かないと錯覚を起すことがある。

これは何回も繰返すことだが、一字目と四字目の仮名は生ミ字を作る性質の仮名であるためこういうことになるのである。

◎ 平ノリ本地の下の句
前項で説明したことは、平ノリ、本地(八拍拍子)の上の句であって、平ノリ本地の下の句の取り方に就いては次の如くである。

上の句は原則的に五文字であって「ちりぬる」である。

しかし、下の句にも字余り、字足らず等あって、下の句七文字、六文字、五文字、四文字、三文字等上の句同様さまざまあるが、五文字の次に多いのは、六文字と四文字であるので、この項には七文字、三文字等の僅少の場合は後述することにして、六文字と四文字の場合に就いて説明すると次のようになる。

右の如く、A・B・C・D・Eの五つの取り方が考えられるが、その殆どはAかBの取り方をするのである。Cの場合には稀にあり、Dも語調に依ってこの取り方を考えることもあるが、これは必ず中ノリと考えるべきであり、Eは平ノリには用いず、中ノリの取り方であるのである等後述する。

従って第八拍に句読点が出来ない場合は、このぬの字は常に生ミ字を作る仮名と考えるべきである。

例一 敦盛クセより

5	6	7	8	1
あきのの	の	の	の	の
あきのの	の	の	の	の
あきのの	の	の	の	の

例二 羽衣クセより

6	7	8	1
うつし	て	て	て
うつし	て	て	て
うつし	て	て	て

能「小袖曾我」

二 修 島 殿 修 二

すぢがき

曾我兄弟を題材にした曲は、古来相当にあつたようである。「小袖曾我」は現行曲「夜討曾我」「禅師曾我」と共に曾我物三部曲の一つで、男舞を相舞で舞う特色をもつ佳作で、祝儀曲によく用いられる。



このような形式で各流とも舞っていたので「小袖曾我」と命題されたのであろうと思ふ。

建久四年五月、頼朝が富士の裾野に於て養符を催したので、この狩には、兄弟の父の敵である祐経も必ず御供するであらうと、二人はこの機会に親の敵を討とうと狩人に紛れて出向くのである。その道すがら、母を訪ねようと思ふが、弟の時政は出家にならぬとの理由で勸当されて、十郎は二ノ松、五郎は舞臺に入り、母に乞うて勸当を母に乞うて貰えない。母の述べた詞になり、「母が出家になれと申して聞かざりし程に勸当せしに、出て行けば」と、ともにシオリながら立って橋懸へ行きかける。

母は漸く心が解けて「母は声をあげ、あれ留め給へ人々よ」と二人の後姿を見て立ち、地の「教すぞ教すぞ時政とて、泣く泣く出でさせ給へば」と、シオリながら二三足出る。二人は振り返ってこれを見相舞がよく揃わねばならぬという絶対的条件もある筈だから、単に軽い曲とのみ解釈してしまふことはできない。

この曲は、古来相当にあつたようである。「小袖曾我」は現行曲「夜討曾我」「禅師曾我」と共に曾我物三部曲の一つで、男舞を相舞で舞う特色をもつ佳作で、祝儀曲によく用いられる。

このような形式で各流とも舞っていたので「小袖曾我」と命題されたのであろうと思ふ。

建久四年五月、頼朝が富士の裾野に於て養符を催したので、この狩には、兄弟の父の敵である祐経も必ず御供するであらうと、二人はこの機会に親の敵を討とうと狩人に紛れて出向くのである。その道すがら、母を訪ねようと思ふが、弟の時政は出家にならぬとの理由で勸当されて、十郎は二ノ松、五郎は舞臺に入り、母に乞うて勸当を母に乞うて貰えない。母の述べた詞になり、「母が出家になれと申して聞かざりし程に勸当せしに、出て行けば」と、ともにシオリながら立って橋懸へ行きかける。

母は「祐成申すによつて時政の勸当教す」といふ。そこで二人の門出を祝う宴になり、十郎は母にお酌をし、また五郎にも酌をして男舞を相舞に舞うのである。

キリの舞のかざしのその隙に三つ拍子となり、以下全部が相舞である。

舞である。「社鹿の舞場に遅参やあらんと暇申して」と母に此の世の別れを告げ、勇躍して舞場へ出かけて行くのである。

この曲は現在物であるから、母は面をつけているが、他は真面(ひためん)といつて面を用いない。筋が劇的であるから、稍々ともすれば芝居のようになるおそれがあるが、能らしく演じなければならぬ所に見どころがあり、二人の相舞がよく揃わねばならぬという絶対的条件もある筈だから、単に軽い曲とのみ解釈してしまふことはできない。

能楽殿御用達 割烹料理仕出し

西みやか

名古屋市西区浅間町 電話 (531) 5507・6666

民芸料理 **乃志**

中区栄4丁目9-5 電話 241-9078番

祝能楽の友二周年

能楽の友二周年

十松全物并

かきすすい
かきすすい
かきすすい
かきすすい
かきすすい
かきすすい
かきすすい
かきすすい

目を守るシャレためがね (カラーコートレンズ)(新発売)

めがねの **アサヒ**

●営業時間 AM10時~PM8時 ●休日毎月第3日曜日
柳橋 ガーデンビル一階 電話 (561) 1652

3月の放 NHK第2

3月16日(日) 「安」

3月22日(日) 「芦」

3月29日(日) 「二人」

3月29日(日) 「盛」

番組のかかわること了承下さい。

狂言「簸屑」の解説

宇治は茶どころ
と昔からうたわれていて、その道理、茶は鎌倉時代、今より八〇〇年以前に栄西師といふ坊さんが中国へ留学して、土産に茶種を持って帰り、これを山城の宇治の里、今の宇治市に持ち栽培されたのである。茶を栽培するに、地質は勿論水が肝要である。この宇治は、とくに良質の水の出る所として選ばれたもので、現在では方々に茶園があるが、茶といえば、ひと口に宇治とさえ総称されている。宇治川の清瀬には、宇治橋がかかり、その橋には他に見ることのない中程に

「能は退屈ではない」とパンプレットのタイトルにある。なるほど、確かに退屈でない能もある。しかし退屈な能もある。これは能だけの話ではない。歌舞伎にも新劇にも舞踊にもある現象である。人間だって退屈な人間もあれば、退屈でない人間もある。人間界の森羅万象みなそうである。能は静の芸術といわれる。それ故に、東洋芸術の極致などといわれる。退屈な能が静の芸術だからでなく、能役者の芸が冴えないからである。見物の教養がないから……などといっている。教養のない見物さえ感動させるのが、真の芸術ではないのか。話が極端になった。久しぶりに観た能を語ろう。

久しぶりに観た能

前田満穂

「能は退屈ではない」とパンプレットのタイトルにある。なるほど、確かに退屈でない能もある。しかし退屈な能もある。これは能だけの話ではない。歌舞伎にも新劇にも舞踊にもある現象である。人間だって退屈な人間もあれば、退屈でない人間もある。人間界の森羅万象みなそうである。能は静の芸術といわれる。それ故に、東洋芸術の極致などといわれる。退屈な能が静の芸術だからでなく、能役者の芸が冴えないからである。見物の教養がないから……などといっている。教養のない見物さえ感動させるのが、真の芸術ではないのか。話が極端になった。久しぶりに観た能を語ろう。

「三人片輪」は会のタイトルから見てオシが中心人物らしい。中心人物というのはおかしなが、一番仕どころ、観どころのある役らしくは、メクラ、イザリ、オシと三人片輪に甲乙がなくてよくなかろう。演技が平均しすぎが含んでこそ面白い狂言であるはず。それは誰にでもわかる。そして事実三人の釣合はよくとれていたのだが、ネ、会名が「野村又三郎を観る会」だ。どうしてもオシに目がいくネ、やり甲斐もあろうか、また、その辺が気になる役でもあろうか。これも、この舞台上で観た名人弥五郎のオシを思い出したが、いいたいことは「清経」の場合同じこと、比較するつもりは毛頭ないが、オシだけが自立した目、自立した目。それには一方メクラやイザリの協力も必要だが、もちろんこれは一般論、この舞台上でだけではない。あんなに……

「三人片輪」は会のタイトルから見てオシが中心人物らしい。中心人物というのはおかしなが、一番仕どころ、観どころのある役らしくは、メクラ、イザリ、オシと三人片輪に甲乙がなくてよくなかろう。演技が平均しすぎが含んでこそ面白い狂言であるはず。それは誰にでもわかる。そして事実三人の釣合はよくとれていたのだが、ネ、会名が「野村又三郎を観る会」だ。どうしてもオシに目がいくネ、やり甲斐もあろうか、また、その辺が気になる役でもあろうか。これも、この舞台上で観た名人弥五郎のオシを思い出したが、いいたいことは「清経」の場合同じこと、比較するつもりは毛頭ないが、オシだけが自立した目、自立した目。それには一方メクラやイザリの協力も必要だが、もちろんこれは一般論、この舞台上でだけではない。あんなに……

演能案内

第二回 観世会
四月十九日(日)
熱田神宮能楽殿
梅若納義
観世鉄之丞
大根秀夫

清経 手
観世鉄之丞
大根秀夫

千原 安達原
大根秀夫

能藤 舞櫻子 郎
大根秀夫
西村 欽也
河村總一郎
藤田 昭彦

能熊 俊 寛
山本 義彦
林有右衛門
泉 嘉夫

能骨 野 高安 勝久
山本 義彦
藤田 昭彦

能狸 々 乱
西村 弘敬
田鍋 勉一郎
寛 助川 三男

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

能 菅 皮
野村又三郎
井上 松次郎
大野 弘之助
井上 松次郎

宗家 宝生九郎著 全七巻
宝生流囃子仕舞全集 価 2,500円 90円
第一巻発売 (隔月に一巻づつを発行)
収載曲目 (あ) 葵上・阿漕・芦刈・安宅・敦盛・海人・嵐山
(い) 生田敦盛・井筒・岩船 (う) 鶴飼・雨月・右近
・歌占・善知鳥・安女・柳枝・雲林院

龍蔵白蔵酒
社長 大西三郎
金山店・富士銀行西50米(金山ビル一階) 電話 6702
大津橋店・大津橋南50米 西側 電話 8051

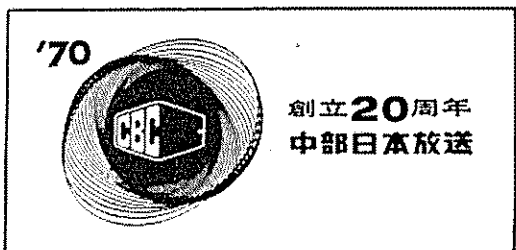
株式会社 千代田グラビヤ印刷社
名古屋営業所 所長 清水克朗
名古屋市中区錦一丁目20-27
TEL (052) 代 231-7827

友大
ナゴヤ納屋橋畔店 (231) 2709-6818
名鉄百貨店九階 のれん茶屋店

の友社
上本町2-20 464
7984
36393
年 300円
年 400円
年 30円

観世流能「道成寺」の能三番を 自由席一、五〇〇円、学生券六〇〇円。
観世流能「簸屑」宝生流舞 自由席一、五〇〇円、学生券六〇〇円。
観世流能「道成寺」の能三番を 自由席一、五〇〇円、学生券六〇〇円。
観世流能「簸屑」宝生流舞 自由席一、五〇〇円、学生券六〇〇円。

能(有料) 番組①面掲載
会 (来聴歓迎) 番組②面掲載
会 (有料) 番組①面掲載
会 (有料) 番組②面掲載
会 (有料) 番組①面掲載
会 (有料) 番組②面掲載
会 (有料) 番組①面掲載
会 (有料) 番組②面掲載
会 (有料) 番組①面掲載
会 (有料) 番組②面掲載
会 (有料) 番組①面掲載
会 (有料) 番組②面掲載



創立20周年
中部日本放送

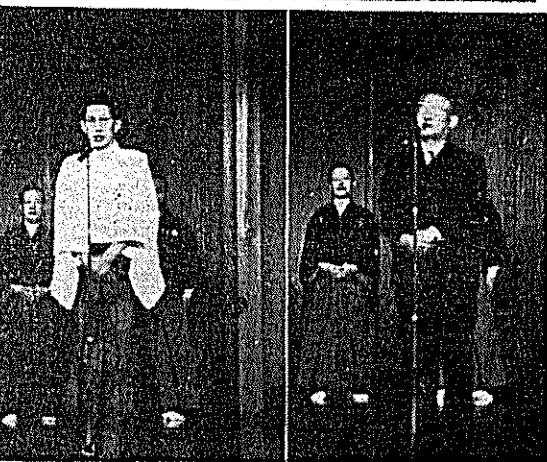
能 楽 の 友

題字は熱田神宮 篠田富司筆

発行 能楽の友
名古屋千種区吹上本町2-
(郵便番号 464)
電話 (731) 7 9 8 4
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 300円
郵送の場合 1年 400円
一部 30円



能楽の友三周年記念
別会能楽会場
三月二十一日(土)三時三十分
五代能楽の友社



能楽の友三周年記念能一写真①
熱田神宮能楽殿正面
②後あいさつする杉戸名古屋市長
③長谷熱田神宮権宮司

能楽の友創刊三周年の記念能は、春分の日の三月二十一日熱田神宮能楽殿で催され、能「小袖曾我」「道成寺」の二番、狂言「扇屋」「舞臺子」「高砂」「絃上」連吟「網之段」独吟「玉之段」仕舞「笠之段」「葵上」が演ぜられた。
当日は好日和に恵まれ、見所も大変な盛況で、演者、観客一体となった熱演がくりひろげられた。

盛大に記念能開催 能楽の友創刊三周年

とくに来賓として杉戸名古屋市長、長谷熱田神宮権宮司は、能楽の友創刊三周年を祝して「六百年の伝統を誇る日本の芸能、その粋といふべき能楽の道しるべとして愛好者とともにさらに一層の精進を望む」とあいさつ。編集同人を代表して、高安滋郎氏から、「多数のご来会を頂き感謝申し上げます」とお礼のことばを述べた。

「人類の進歩と調和」を統一テーマとして、大阪・千里丘陵に世界七十七カ国が集う日本万国博覧会は三月十五日その幕を開いた。「それぞれの時代において、人類が到達し得た文化の粋を一室に集め、それによって将来の人類進歩の方向を示し、これを共通の広場として、言語、人種、宗教の違いを越えて相互の理解を深めること」がその基本となっている。と

世界の芸能に伍して

くに技術文明の高度な発展にともない、生活全般にわたる根本的な変革を経験しつつある現在、精神面における交流の重要性が強く叫ばれている。このような意味で人類の祭典EXPO70での世界の国々の芸術の交流も重要な意義をもっているが、能楽部門では、五月三日、大阪中之島フェスティバルホールで「万国博能」、さらに六月二十九日、万博ホールで「万博能」が堂々上演される。

演目および出演者はつぎのとおりである。

- 万国博能
 - 五月三日(日) 正午始、大阪中之島フェスティバルホールにて開催
 - 主催 日本万国博覧会
 - 能「小鍛冶」小書・白頭、金剛殿
 - 狂言「武悪」野村万蔵、三宅藤九郎、和泉保之
 - 能「隅田川」梅若猶義
 - 能「船弁慶」小書・重前後替、前シテ観世流之丞、後シテ梅若万三郎
 - 万博能
 - 六月二十九日、万博ホール
 - 舞臺子「八島」宝生英雄
 - 能「羽衣」小書・和合之舞、シテ観世元正、ワキ高安滋郎、大鼓斎田喜兵衛、小鼓大倉長十郎、太鼓小寺金七、笛杉市太郎
 - 狂言「福の神」茂山千作、善竹忠一郎、茂山忠三郎
 - 仕舞「難波」金剛殿、「船弁慶」喜多実
 - 能「土蜘蛛」シテ金春信高

天		景		隅		藤		三千		杜	
玄	山	実	安	芦	紅	松	猩	猿	天	景	隅
象	替	姥	盛	宅	刈	葉	々	々	仕	仕	仕
五	段	菊	菊	小	西	神	浜	福	杉	杉	杉
		池	池	野	尾	田	口	木	田	田	田
		敏	重	島	房	佳	知	起	合	合	合
		子	郷	郎	子	代	子	志	高	高	高
									安	安	安
									波	波	波
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎
									郎	郎	郎

演能カレンダー

【4月】

- 12日(日) 久田観正会 (来聴歓迎)
- 18日(土) 猶風会 (来聴歓迎)
 - 番組①面掲載
- 10日(日) 観世会定式能 (有料)
 - 番組①面掲載
- 26日(日) 大槻清頼会 (有料)
 - 番組②面掲載
- 29日(祝) 幸友会 (来聴歓迎)

【5月】

- 5日(祝) 名古屋異会 (来聴歓迎)
- 10日(日) 掬水会 (来聴歓迎)
- 17日(日) 鳳鳴会 (来聴歓迎)
- 23日(土) 一謡会 (来聴歓迎)
- 24日(日) やるまい会 (有料)
 - 番組②面掲載
- 31日(日) 雲泉会 (来聴歓迎)

【6月】

- 5日(金) 熱田祭奉納能 (来聴歓迎)
- 6日(土) 和調会 (来聴歓迎)
- 7日(日) 名匠鑑賞能 (有料)
- 14日(日) 青陽会 (有料)
- 21日(日) 観世会定式能 (有料)
- 28日(日) 宝生会定式能 (有料)

—以上熱田神宮—

演能案内

名古屋 猶風会 大会
四月十八日(土) 午前九時三十分始
熱田神宮 能楽 殿

観世会定式能
四月十九日(日) 午前十一時始
熱田神宮 能楽 殿

女外舞 舞臺子
附祝言 梅若猶義
主催名 古屋 猶風会

4月の放送予定
NHKラジオ第2放送 午前8時
12日(日) 「大原御幸」観世流之丞
26日(日) 「唐船」山本博之ほか
NHK教育TV 午前11時
29日(祝) 「熊野」梅若六郎ほか
番組のかわることがあります
ご了承下さい。

一年生の時

初舞台
及されておらず、人も少なかつた。
そんな中で、なんとかして家芸を継がせようと、大祖父や祖父の苦闘は天変地変をしのぎ、順命のうらみは天に届いた。

戸松 取締役

義談東装 (二十七)

腰蓑(こしみの)

逸 栄 井 二 ぶと家

いくつものつくしが、敵前にひそむ雑兵のように頭を見せたいことを意図している。...



舞は、主には、源平合戦、曾我物語等の戦記物を題材としたもので、戦国時代武將の間で流行した。...

Table listing names and roles for the '清韻会別会' (Shōin Kai Wakai) held on April 26th. Includes names like 藤原, 阿部, 網野, etc.

「人間国宝」能楽部 門から新たに三氏 文化庁は、去月二十七日、人間国宝(重要無形文化財の保持者)として八人を認定...

Advertisement for '檜書店' (Hinashiya) with address in Tokyo and Kyoto, and phone numbers.

狂言やるまい会第十一回公演 (May 24th, 4pm) at Noto Shrine. List of plays and performers including 宗論, 花子, 武悪.

狂言やるまい会 五月二十四日(日)四時始 於 熱田神宮能楽殿 狂言組 解説 古川 久

能楽の友創刊3周年記念能記録 (Anniversary Record) with a list of names and a small photo of a performance.

各地だより (Local News) 笹月会四十周年記念能 (Sasaguki Kai 40th Anniversary Record) with details of a performance.

アマハ製菓株式会社 (Amaha Confectionery Co.) with address in Gifu and phone number.

大槻秀夫 (Omaki Shūō) 増節と拍子との関係 (Relationship between Tempo and Beat)...

大槻秀夫 (Omaki Shūō) 増節と拍子との関係 (Relationship between Tempo and Beat)...

大槻秀夫 (Omaki Shūō) 増節と拍子との関係 (Relationship between Tempo and Beat)...

大槻秀夫 (Omaki Shūō) 増節と拍子との関係 (Relationship between Tempo and Beat)...

大 槻 秀 夫

増節と拍子との関係
増節とはゴマ点に対して、廻わしとか振りとか、引きなどのことを指すのである。ゴマ点は一字分半拍分に譲うのであるが、廻わしや振りなどは二字分(一拍分)、又は三分分(一拍半分)、或いはそれ以上の長さで譲うものであるから、ゴマ点に対して増節というのである。

では「:」の点線が生ミ字の記しになっている。なお、本文では生ミ字のある假名の悉くにノベを記してあるわけではなく、特殊な処や、両用にとれそうな処などに記してある。即ち二字目に振りか来た為、一字目の当然生ミ字のあるべき「い」の字の生ミ字が消されたのである。

右の如き性質のもの、増節が不足を補う場合とがあるが、それは例えは上の句が六文字しかないのに、これをヤの間にせすに本間に譲わす場合などさまざまあるのである。現在初歩の段階にあって、これは高等の部に属するので説明は後にするべきではあるが、書き序でもあり、地拍子理論の面白さでもあるので記して見ると次の理由に依るのである。

右の如く四文字目の「に」に引きをつけ七字分にするのである。
又上句は二字のものもあると前述したが、これを三字分にする為、その一字目に振り又は廻わしをつけて、増節を以て仮名一字分を補い、これをヤヲハ又は当ヤヲハに譲わすことはしばしば用いられているのである。

右に記した如く、たて棒「|」は生ミ字を示し、片假名は増節の振りや廻わしの節を意味するのである。
(大成版では、本文では「く」の符号、これをノベというが、この記しが生ミ字であり、また本文前の地拍子の解説の欄

前に記した如く上句六文字は頭の一字が無く、ついで「ろはにへ」と考へるべきであると述べて来たが、その場合は如何にもヤの間ののであるが、中には終りの一字が無く「いろはにへ」例である。
なお、大成版の謄本に、廻わしや振り

ヤヲハ へーとー (廻わしの場合)
当ヤヲハ へーとー (廻わしの場合)
以上が増節を以て字不足を補った一例である。

四月十九日(日) 観世会
「清経」は、本紙昨年九月号、「千手」は十二月号、「安達原」は、同じく一月号に、それぞれ掲載されており、省略。
四月二十六日(日) 清韻会
藤戸(ふじと)

第二十四番 正行

(まさつら)

補正行は松井の取にて父正成と別れ故郷に帰り居たところ、後醍醐天皇崩御ならせ給いたるため柳相登登ちりぢりにならんとする様相が見えて来た。先帝の御遺勅にて第七宮を御位に即かしめ給わんとすの御本意なるに、その隙を窺い油臣共が押寄せてこれを妨げんとする。三吉野の山に城を構え皇居を守護せんとしたところ三吉野の山寺より当山は昔より王法を仰ぎ仏神を崇め、天下第一の御祈禱所であり、猥りに城郭を構えるなどではと抗議して来たので、正行はこれを和歌に託して返事をした。その内に、一部の兵が押寄せ来り一戦したるうちに正行の歌の心を感じて和睦することとなり円満に解決した。

第二十五番 現在江口

(げんざいせい)

現今各流に用いられている江口の曲は、旅の僧が江口の旧跡を尋ねて江口の長者の亡霊に行き逢いて昔語りを聞くという筋合いであるが、この現在江口とは西行法師

古曲雑話

(14) 西村弘敬

が初瀬詣でに下る道すがら、江口の里を通りかかると、一夜の宿を借りんとしたることを作りたる曲である。

江口の里とは淀川の川辺で、その当時は舟遊女の多く居た遊里であったので、西行法師が宿を頼まんとしたところ、なみの旅人ならば宿をするが出家の人には宿は参らせ兼ねると断られ、色々に

頼めども遂に宿を借り得ず小傾城どもにながれ無念に思い、門に短冊をさし置いて行った。その短冊には
「世の中を厭ふ迄そなたからめかりのやどりを借む君かな」と記して来た。これを江口の長者が見て、さては佐藤藤清の出家と

普賢菩薩と現われ「云々の句があります。江口の長者と普賢菩薩とどういふ関係があるのかと思われ、この曲の終りに、播州書写山の性上人が常々普賢菩薩を拝みたきと祈願して居たところ、或る時夢想の告げに信心の誠あらば播州江口の長者を拜み給へ、長者は普賢の化身であるとの教えを受けてわざわざ播州よりこの江口の里迄来られたとの事が語られてある。

第三十六番 現在檜垣
(げんざいひがき)
檜垣の老女は元は太宰府の白拍子であつて、檜垣を好んで家の周囲にしつらへて居たので、人呼んで檜垣の御(ひがきのご)と言つて色々の物語りをしたという筋合である。現行江口の曲の終りの部分に「是迄也や帰ると、即ち

た。現今曲の檜垣では若戸親音の僧の所へ毎日老女が水を持来るので尋ねたるに、昔の檜垣の老女の亡霊で白川の辺りで申して貰いたいと申して消えたので、僧は白川の辺り老女の旧跡を尋ね申つたので老女の霊が表われ昔語りをしたという筋であるが、この現在檜垣の曲では、延喜の帝々仕えて居た藤原の興範(おきのり)が通りかかると老女が水を汲んで差し上げ老女は年ふれば我黒髪も白川の

みつわぐむまで老にけるかなと歌を詠んだ。興範は老女は檜垣の老女なるを知り、老女は舞曲に勝れ殊に唐帝よりの乱拍子の乱れ足を相伝えて居たことを知り一さし舞を所望して乱拍子の足遣いの事など物語り、かつ乱拍子を踏んで見せたとの筋合である。

観能の手び

四月の能 熱田神宮能楽

七か所(熱田)の心は動かない。かくて「牛飼車寄せよ」との打切で、車出シという特殊の囃子で、後見は花見車を自付柱近くに出し、シテはこれに入り、ワキは同車の態でその左側に、ツレはその後方に立つ。上歌からロンキまで一行は車で東山に出かける場面とその道中である。

清水に着いて車を下りたシテは舞台正面に出て合掌し、観世音に祈願する。この時後見方によって車の作物はひかれる。観世の酒宴になり、ワキはシテに舞を所望する。ここでシテはイロエ掛中(イロエ)の舞を舞う。涙を隠し、舞園したい一心で舞うのが、この舞の習になつて居る。小書「村雨留」であるから中之舞は途中で省略され、「のうのう俄かに村雨のし花の散り候は如何に」と謡いながら留めるのである。

この「アト」イロエ短冊之段となり、シテは袂から短冊を取り出し扇を筆に擬して和歌をしたため、これを扇に載せてワキに示す。ワキは歌を讀んで心を打たれて、ついに熊野に帰園を許す。驚喜したシテは、観世音に合掌して、病母の許へ帰るのである。

日本能楽団、欧州六カ国で公演

梅若三郎師を団長とする日本能楽団は、きたる五月十二日渡欧一カ月にわたり、イギリス、ドイツ、イタリア、スイス、オランダ、オーストリア六カ国で演能する。一行は二十五人、とくにイギリスでは、ブライトン市で開かれる国際音楽祭に参加して、五月十五十六日の二日間演能する。

シテ方には、梅若三郎、梅若万紀夫、梅若万佐晴、梅若基直、上田照也、浦田保利、藤谷政二氏ら、ワキ万宝生弥一氏ほか囃子方一噌庸二氏ら四人、狂言万茂山千五郎氏ら、ステージ・マネージャーとして北岸佑吉氏が同行する。

躍進する 中日グループ!
東京中日新聞
中日グループの躍進
中日グループの躍進
中日グループの躍進

名古屋市中村区島森村内上22
野村又三郎

大森を月見ることかき、腰袋は、厚板や熨斗目を着ながし、上衣に水衣を着し、その上につけるのである。

能楽の友 倉能記念



写真④能「小袖成」
①見所いっぱい



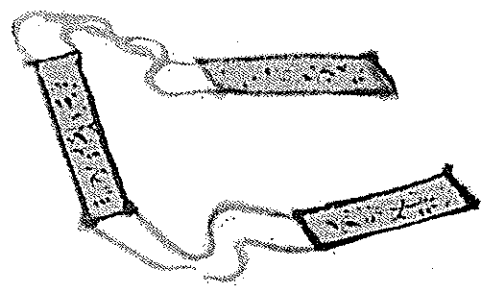
義談東装 (二十八)

腰蓑 (こしみの)

逸 栄 井 二 ふと 委

みどりは雨によって美しく洗われ心にしみよるような爽やかさを増してゆく。したの芽がほぐれる程に降る雨はなくなつた。さみどりの山を音もなく包んでシトシトと降る山小。雨コートがお花屋のように美しくなる街の雨。日本の雨季は一段と情緒的になる。

能装束はわたしの目に、自然がその豪華をきわめたときの如く……温室の中でおおい茂り、からみあう花のように……幾世にもわたる文化によって深みを増した生の躍動に輝いて見えた。これは、ベニト・オルトラニ教授の言葉である。能装束は歴史の洗練をえながら、ある約束にしたがって様



式美を完成した芸術品である。こが不似合だからかえるといふことは一切不要である。それは、完成された日本の一つの姿であるといつてもよい。これを私は歴史的事洗練という。このことは能のすべてにいうことが出来るであろう。

観能の手びき

きたる六月七日、名匠鑑賞能が催されるが、能楽評論家・沼田雨氏は「博通望憶」と題して次のような一文をよせている（鑑賞能解説より）要旨を紹介させて頂く。

博通望憶

たまきはる命をかけてわが舞へで芸道一路はるかなるかもこれは片山博通氏の歌ですが、この一首に氏の全貌は偲ばれます。故郷近江の生家の当主として関西流の探題としての統

けたのが片山博通氏でした。名匠鑑賞能が、氏の追憶を意味する片山一家一門能を企画されました。能を大切に扱っている名匠鑑賞能の日頃の主張の現れとして深甚の敬意を表するものであります。

情があります。安政から天保頃の関白藤原公通が後援していた、五世片山九郎右衛門に「三輪」の「繁納（せい）」を勧めるようにいったのですがこの小書は観世宗家の、一子相伝の秘曲なので、辞退しました。そこで関白と九郎右衛門がいろいろ相談して、実質上「繁納」に劣らぬものを作りました。これが「白式」であります。家元も外ならぬ関白の家のお前がかりなり由緒ある片山家の事なので、これを許し、出来片山家のものとなつたのでした。何しろいろいろのものよしの所を果てているので、左近氏も「これ程気持のよい、楽しい能はほほほ」といった程で

拍子謡について

大槻秀夫

そのものに左の如きがある。又次は特殊な取り方だが、実例は多い。当ヤハハ、きーいみが代は（羽衣）ヤハハ、つちいも木も（田村）

能	名匠鑑賞能 (第六十一回)	宝生会定式能
能	舞臺子 海士 青木祥二郎 吉田定男 助川 龍男 熱田神宮能楽殿	六月二十八日(日) 熱田神宮能楽殿
能	三輪 論 大蔵弥太郎 善竹忠一郎 善竹圭五郎 中村 亨道 小寺 金七 片山博太郎 宝生 弥一 田鍋 惣一郎 杉 市太郎	能「道成寺」上演 片山博太郎師後援会
能	望月 間 善竹圭五郎 河村 洋一郎 鬼頭喜太郎 後見 片山博太郎 小林 慶三 加藤 文太郎 武田 欣司 堀本 秀雄 杉浦 元三郎 分林 弘一	能「道成寺」上演 片山博太郎師後援会
能	班 女 武田太加志 高安 滋郎 田鍋 惣一郎 藤田 六郎兵衛	能「道成寺」上演 片山博太郎師後援会
能	狂言 文 蔵 井上松次郎 大野 弘之	能「道成寺」上演 片山博太郎師後援会

金剛流春鶯会

金剛流山田社中・春鶯会では五月十七日午前九時三十分から、名古屋駅前、松崎旅館で謡曲囃子会を催す。

春季謡曲囃子会

素謡 神歌(若尾和佐女、梶田かすみ) 竹生鶴(大津米子、田付とみえ、加藤たす子、鈴木富貴子 服部 奏)

舞臺子 龍田(百々貫美子、藤田昭彦、後藤孝一郎、寛敏一、池田茂) 雲雀山(後藤孝一郎、藤田昭彦、田島英太郎、寛敏一) 熊野(田村とみえ、藤田昭彦、吉川周子、寛敏一)

素謡 飛鳥川(牧野元子、水谷さく、後藤孝一郎、高田はる) 清経(大平洋美、川村富美子、小寺雅子) 仕舞 富士太鼓(水谷さく) 松風(山田さゆり) 敦盛(梶田かすみ) 八嶋(安藤貞子) 連吟 鞍馬(天狗(高橋三市、堀壽十、林茂、後藤孝一郎、藤田昭彦、安部長太)

舞臺子 巻袖(北村房代、鬼頭

観世会定式能

六月二十一日(日) 十一時始

素謡 熊坂 高野瀬 透 尾関健太郎 加藤 文太郎 杉本 秀雄

仕舞 網之段 堀本 秀雄 加藤 文太郎 武田 欣司 杉浦 元三郎 分林 弘一

能 刈 西村 欽也 吉田 定男 福井 啓次郎 寛 三男

仕舞 大江山 武田小兵衛 柴田 初太郎 上田 照也

能 班 女 武田太加志 高安 滋郎 田鍋 惣一郎 藤田 六郎兵衛

狂言 文 蔵 井上松次郎 大野 弘之

能 記 生の羽衣が出た、初能のこととなかなかよく勉強されたか、呼かけからして、しっとりしと立ちはだち。見



吉田妙さん

わが舞へで 芸道一歩はるかなるかも 浦友雪氏を迎えてこの度の番組は...

大槻秀夫

以上の如く、廻し、の来る仮名の位置に依って、大に謡ったり、小に謡ったりするのである。 かくの如くにして、廻し、が一字目にある場合から七字目にある場合まで...

古曲雑話

(15) 西村弘敬

老女が捧ぐる幣帛の上に怪したる人が虚空にかけり、老女の頭を撫で給ふので如何なる人ぞと尋ねたれば、これこそ権現の御使ひ護法善神である...

能班 武田太加志 高安 滋郎 田鍋徳太郎 藤田六郎兵衛 大野 弘之

演能記

この辺で今迄記した事を実際に練習する為に、極く易しい拍子当りの曲から順に選んで、実例を挙げて説明する。 その為には先づ正坐して、両手を膝にのせて、一二三と号令を掛けながら、前述した通りに八個拍手(本地)を繰返す...



「天鼓」吉田妙さん



「羽衣」鈴木胡蝶さん

宗家 宝生九郎著 全七巻 宝生流囃子仕舞全集 2,500円 90円 第一巻発売中 (隔月に一巻づつを発行) 収録曲目 (あ) 葵上・阿漕・芦刈・安宅・敦盛・海人・嵐山 (い) 生田敦盛・井筒・岩船 (う) 鶴飼・雨月・右近・歌占・善知鳥・采女・梅枝・雲林院 わんや書店

夏夕の飾る新能 13日東京新能別会 夏の夕べの飾能として期待された。今日は一寸今迄にないような切能の野守を、柴田収武氏が舞った。今日は一寸今迄にないような...

山伏の正体



能狂言のうち山伏といふ異様な姿をして現われるものがある。その代表的なものは勸進帳で、能楽ではこれを安宅と題し、義経が頼朝の追捕使の手を逃れんために、義経主従が山伏の姿となって身をくらし、奥州へ落ち行く途中、安宅の関所で見現われ、弁慶の苦行、富樫との問答で、終に富樫は弁慶の主を思ふ忠義その熱意に感動し、通行を許し、あまつさえ酒宴を開き、弁慶は延年の舞を舞う。この場面は歌舞伎十八番の中でも所作事として有名で誰しもよく知っている。

さてこれは作り山伏であるが、狂言ではこれが題材となつて構成組織されているものが沢山ある。すなわち福宜山伏、犬山伏、泉(ふくら)山伏、蟹山伏、柿山伏、巻(つと)山伏、くまびら、蝸牛等がある。

されば何故にこの山伏を作者が題材として狂言に仕組んだものであろうか。その出立(でたち)が面白いのであろうか。いかにもいかめしい姿で、不浄をへだつる忍辱の袈裟衣、頭には兜巾を頂き、七宝の露をはらひし條懸にいらたかの珠数をつまぐり、行者は加持に参らむと、肩で風を切つて道中する。全体これは何を仕事とする者であろうか。もちろん加持祈禱である。病人を祈禱して病を本腹にせよは横濱の道徳を説きし道

つたであろうが、一般庶民ではない伝えられた藁草か、まむしの黒焼位を用いたに過ぎなかつたのであろう。そこでこの山伏をたよりの神として尊敬し、一歩上座に据えたものであろう。しかしながら一口に山伏といつても段階がある。狂言に組み入れられた山伏は中でも修業の足りない山伏に違いない。果たせるかな、横柄な態度でいばつているそのあさはかさがいづも不覚の本となる。その不覚となる面白さが見どころで、作者にたのしみられたものであろう。その一例として幸い今年は大年であるから犬山伏の解説をしてみよう。

これは僧と山伏がそれぞれ道中していたところ、途中の茶店で僧が腰をかけているのを後から来た山伏が見て、無礼者と僧を引きおろし、その謝罪に山伏の持つてい

互いにせり合ううちに犬は山伏に向かい噛みつきこうとする。僧にはあまえてなつきをばえる。遂に山伏の負けとなり、犬に負われて逃げ廻り、勝つた僧は、持たせられい持たせられいといつて追込みて舞に入る。

山伏の眞の正体

元祖はいつまでもなく、役の行者である。奈良朝以前、唐制輸入時代欽明天皇の御世、今より約千四百年前、奈良県葛城村にて出生。役小角と称し、博学聰明にして深く仏法に精進し山伏宗教(密教)に心を馳せ、修験道として自然の山伏の偉大な力、その身をひ

藤の皮を法衣としてまとい、木の実を食し、滝にうたれる等、あらゆる苦行に耐え身を練り、霊力を施して天下の御祈禱即ち国土安穩諸願成就を行なうところとす。大日如来を神変大菩薩とあがめ、崇敬の的となす。大日如来は即ち太陽である。

古代人は彼等が最も恐れている生命力に溢れる慈光を注いでくれる太陽を偉大な神として信仰した。エジプトも太陽は宇宙を旅しながらその生命力を万物に与えてくれると唱えている。ギリシャ神話にあるアポロ神も太陽の象徴である。

さてこの山伏の清々しい装いは頭に兜巾(トキン)を頂く。すなわち五智の宝冠とて布にて作り、十二因に象り、十二の裡を設け、無明暗黒煩惱を表し、薩懸(すずかけ)は法衣にして、懸とは薩の字義三徳の妙理を證得する。即ち加身身の徳、般若の徳、解脱の徳。これにて深山の露を払い、錫杖は大地をつき妖怪の襲撃を払い法螺貝を腰につけ、これを吹きながらして一切の畜類魔群を退け、笈は行脚の際身の衣類を入れ、連尺にて背に負ひ、片箱も同様棒に縛りつけて肩にするもあり、肌身離さず手にする念珠は最多角(イラタカ)とて精製せざる角ある珠数その他護身のため小刀を持つち

のとなす。

しかして各地に散在する修験道の宗徒は、祖師の教を嗣ぎ、大峯葛城へ分け入り、難行苦行の修行をおこめ、国元へ帰りは身変大菩薩とて大日如来の仏前にて護摩を焚き、朝暮祈禱を行ない、霊力を身に受け、世上における難問を解き、或は人命を守りて病苦を去らしむる等を業務とする。現在もこれら修験道の宗徒は、大峯山に登りて心身を鍛練し、高野山大学院或は別山醍醐寺の伝法学院にて修学するものと聞いている。

本山高野山(真言宗)は、弘仁七年、僧空海弘法大師が金剛峰寺をおこしたところ、別山醍醐寺(真言宗)は、貞観十六年鎌倉時代聖徳太子が開創にて、役行者の遺風を慕ひ、勅命を受けて大峯山を再興、わが国修験道の開祖である。

ちよつとガイドを一つ物をたべて舌鼓を打ち、うまかつたと嘆賞した言葉に、「ああ醍醐味である」という。これはこの理源大師が真言宗の教を弘めるため聖告により、この山に登られた時落葉の下から湧き出る水を汲み取られ、喝々醍醐味なるかなと嘆賞された言葉である。

(卯三郎)

朝日新聞夕刊の「東海・人と土」文化欄に、このほど「幼いころ」のテーマでワキ方高安滋郎師が紹介された。その内容を再録する。

とりたてていうほどの思い出は残っていないが、ただ、私の幼いころといえは、能や謡のけいこのつらかった記憶がすぐもどつて来る。物心ついた五歳ごろから、尾張瀬おかかえの能楽師だった祖父から毎日、小謡を口づつしでけいこされた。そのけいこがすまないと三輪車が出してもらえず、悲しい思いをしたことを覚えてる。

新刊紹介

『能と金春』 廣瀬瑞弘氏著

永年金春流に師事してきた広瀬瑞弘氏(名古屋在住)が、能の源泉を解明する『能と金春』を刊行したが、同氏をかこむ関西能楽懇話会の集いが三月十九日、京都先斗町「いわを」で開かれた。

当日は、広瀬氏はじめ沼津雨、権藤芳一、藪田嘉一郎、仙田雪山子、村井康彦、前西芳雄、村山祐吉、渡会恵介、金春晃実、村田次郎、中村保雄氏らが参席した。

なお「能と金春」は京都市東山区三条通白川橋五丁目、初音書房刊、五〇〇円。

なお月刊「宝生」誌は、三月号で「能と金春」をつぎのように新刊紹介している。

能の四座(観世、金春、宝生、金剛)の中で一番古いのは金春座(円満井座)である。従来の能楽史が、一流に偏して編纂されているのではないかと疑問から、こんどは金春流からみた能楽史を編さんしてみようと思ひ立つて書かれたものである。それは最も古い座であるからである。われわれ明治の能楽史に関心を持って居るものは最後の明治百年史につきぬ興味を覚える。他流の記録も散見し資料的価値も高い。能楽について史的興味を持つ方に御一読をおすすめた。

大槻清韻会主催 伊勢神宮奉納能

大槻清韻会主催による伊勢神宮奉納能が四月七日内宮能楽殿で催された。

番組は番囃子「翁」大槻文蔵、泉泰孝、西川敬子、清水直子、岸井美雅子、野口伝之輔、袴能「小御會我」柴田徳子、絵野郎子、久田舞一郎、山本孝、「廻々」大槻秀夫、福王茂十郎、藤井以佐、吉松泰子、山本敬一郎、鬼頭八郎の

観世流シテ方、殿島修二氏母堂せつさんは、四月二十六日午前十時三十分九十一歳で逝去。

告別式は二十八日午後一時から二時まで名古屋市東区松山町、含笑寺で仏式で執り行なわれ、わめて盛儀であった。

の目録だった。一年生の五月に初能(初めて能の舞台を勤める)で「廻々」のワキを勤めた。祖父の妹にあたる人が非常に喜んで、そのころのお金で一円をホウビにくれた。十銭、二十銭でも子どもにとっては大金だった時代だから、随分はりこんだものだが、その金を何に使ったかは記憶にない。

幼いころ

一年生の時

初舞台

そんな中で、なんとかして家芸を継がせようと、大祖父と祖父の苦心は大変だったらしい。昨今

楽の友社
吹上本町2-20
号 464)
7 9 8 4
古屋 36393
1年 300円
1年 400円
30円

万国博能を上演 世界の芸能に伍して

カレンダー

田親正会 (来聴歓迎)
風会 (来聴歓迎)
番組①面掲載
社会定式能 (有料)
番組①面掲載
清韻会 (有料)
番組②面掲載
友会 (来聴歓迎)

5屋興会 (来聴歓迎)
k会 (来聴歓迎)
舞会 (来聴歓迎)
5まい会 (有料)
番組②面掲載
t会 (来聴歓迎)

3祭奉納能 (来聴歓迎)
t会 (来聴歓迎)
鑑賞能 (有料)
t会 (有料)
社会定式能 (有料)
社会定式能 (有料)
—以上熱田神宮能

割烹・小料理

城

・住吉小路(中区栄3-10)
電話 241-0248
・喫茶とゲルル 栄文化センター内
電話 731-1128

伝統と新しいセンス

河内屋眼鏡店

名古屋千種区大久手電停前西側
電話 (052) 代表 741-2328
支店 東海市高橋須賀町(高校西)
電話 (0562) 32-2771

の放送予定
第2放送 午前8時
原御幸」観世流之
船」山本博之ほか
V 午前11時
野」梅若六郎ほか
ることがあります。
い。

戸松冶金株式会社

取締役社長 戸松利作
名古屋瑞穂区堀田通4-10
電話 (052) 8111 (代表)

欧風料理
とんかつ

亭

名古屋千種区大久手町4-11 TEL 731-3680

古い歴史・新しい経営・若い力
でご奉仕する (じゅうろく)

十六銀行

創立 明治10年
本店 岐阜市
資本金 24 億円

能 楽 の 友

題字は熱田神宮 藤田宮司筆

発行 能 楽 の 友
名古屋千種区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7 9 8 4
振替口座 名古屋 38393

購読料 1年 300円
郵送の場合 1年 400円
一 部 30円

能「竹生島」「天鼓」上演

8月1日熱田神宮で

夏の恒例行事として親しまれて
いる名古屋新能は、きたる八月一
日(土)熱田神宮境内で繰りひろ
げられる。

会場は、熱田神宮神楽殿前に設
けられる特別舞台、午後五時三十
分開演で、能二番はじめ狂言、囃
子、仕舞八番が予定され、能五流
狂言和泉流の総出演で神楽に納涼
能楽の夕べの催しとして愛好者に
期待されている。

主催は名古屋市中都府県能楽協会
それに熱田神宮の協賛で、新能の
ふんい気をみなぎらせる火入れ式
は、熱田神宮権宮司長谷岡男氏に
よって厳かに行なわれ、杉戸清名
古屋市長のあいさつが予定されて
いる。

名古屋新能は昭和四十一年から
はじまりとし五百回である。
各地の薪能としては、東京では
すでに五月十三日、十四日の二日

間、芝増上寺で催され、京都は六
月一日、二日の二日間平安神宮で
盛大に行なわれた。さらに八月に
は大阪新能が予定されている。
名古屋新能の番組は

宝生流「竹生島」前シテ鈴木義久
後シテ竹腰勝一、ツレ鬼頭嘉男、
ワキ高安滋郎、ワキツレ高安勝久
飯富雅介、笛鬼頭季信、小鼓福井
啓次郎、大鼓吉田定男、太鼓鬼頭
八郎、間 佐藤友彦

観世流「天鼓・弄鼓之舞」シテ
梅田邦久、ワキ西村欽也、笛三
男、小鼓後藤孝一郎、大鼓河村総
一郎、太鼓池田茂、間佐藤秀雄

「椿持」佐藤卯三郎、井上礼之助
野村又三郎の所演、このほか金
剛流・囃子「田村」伊藤鉄之進、
喜多流囃子「藤」長田肇、仕舞は
観世流「松風」熊沢恵美子、金春
流「蟬丸」前田茂穂、宝生流「鶴

之段」辰巳孝、観世流「御郡」久
田秀雄、「実盛」柴田初太郎の諸
師、地謡に地元各流楽師の総出演
で、能楽界夏の行事として愛好者
だけでなく、一般市民から大きな
関心と期待がもたれている。

新作能「女と影」
7月10日、大阪で公演
きたる七月十日、大阪・御堂金
館で新作能「女と影」が公演され
る。作者は、ポール・クロードル
氏。

ポール・クロードル氏は、元駐
日フランス大使で劇作家として著
名。とくに古典演劇に関心深く、
一昨年名古屋で同氏の作品「女と
影」が能として上演された大きな反
響をよんだ。今回の「女と影」も
シテ泉嘉夫、ワキ高安滋郎ほかの
諸氏で演ぜられる。

六月十四日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

六月二十一日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

六月二十一日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿



狂言面のいろいろ
(上) 黒式尉 (下右) 大黒 (下左) 姪子 (解説③面)

演能カレンダー

〔6月〕
14日(日)青陽会 (有料) 番組
21日(日)観世会定式能 (有料) 番組
28日(日)宝生会定式能 (有料) 番組

〔7月〕
5日(日)調友会 (有料) 番組
12日(日)朝日狂言会 (有料) 番組

〔8月〕
1日(土)名古屋薪能 (有料) 番組
一熱田神宮

6月の放送予定
NHKラジオ第2放送 午前
14日(日)宝生流「景清」宝生
21日(日)喜多流「鶴飼」福岡
和泉流狂言「鐘の音」野
28日(日)観世流「高野物狂」
大西信久、大西

演能案内

巻	忠	鶴	半	青	陽	能
高橋 藤一 佐藤 太俊 細 能 神楽留 西村 欽也 大野 弘之 後見 加藤文太郎 附祝言 加藤文太郎	梅若 盛義 高安 滋郎 後藤 孝一郎 井上礼之助 河村 初太郎 柴田 初太郎 地謡 加藤文太郎 竹内 六郎	河村 真之助 河村 鉦二 立石 澄雄 高安 勝久 飯富 雅介 佐藤 秀雄 河村 総一郎 田鍋 惣一郎 竹内 六郎	天 雲 雀 山 鼓 加賀 敏彦 生駒 美代子 祖父 江修一 服部 紗枝 竹内 六郎	六月十四日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿	六月二十一日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿	六月二十一日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿
小	文	班	芦	熊	能	組
片山 博太郎 高安 滋郎 立石 澄雄 河村 総一郎 河村 初太郎 後見 橋岡 邦久 附祝言 橋岡 邦久	賀 之 茂 賀 之 茂 賀 之 茂 賀 之 茂 賀 之 茂 賀 之 茂 賀 之 茂 賀 之 茂	武田 太加志 高安 滋郎 高安 勝久 飯富 雅介 井上礼之助 佐藤 秀雄 佐藤 秀雄 佐藤 秀雄	柴田 初太郎 柴田 初太郎 柴田 初太郎 柴田 初太郎 柴田 初太郎 柴田 初太郎 柴田 初太郎 柴田 初太郎	六月二十一日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿	六月二十一日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿	六月二十一日(日)午前十一時始 熱田神宮能楽殿

られず感情移入出来ないまま、期
待と共に、繰り返し様々な思いを
込めて舞台上に投げつけられ、それは、
出来は、まずその舞子の方にかかっ
てくる、と、

出させ、楽しいものであった。
加えて「三輪」に限らず狂言の
新鮮さが印象に残った。
最後に、目に三つもの演能は、
観客に、又演者にとつても、は

茂山千作
幸次郎

小料理と
安
名電

義談東装 (二十九)

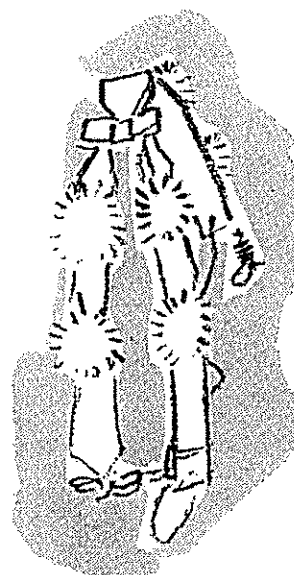
篠懸 (すずかけ)

逸 栄 井 二 ともふ



箱根うづきがみずみずしい葉を... 六月の風がさわぐと、山には一面に青い波が立ち...

爽やかに語えた一節であった。その後は、信徒の中の謡曲同好の人... 山伏の語源は、修...



選、及び、鈴木正治 永田六兵衛... 水谷清諸氏の囃子を交え、サンから曲まで、と、キリの二回にわた...

浄泉寺の方丈が親鸞の謡曲を強く... 要望されたのは、昭和三十六年の東本願寺舞台で見た先生(実師)...

狂言面のこと

編集部の依頼で狂言の面を開扉... 仮面として最も古いものは雅楽に用いられた面...

(一) 黒尉 祝言能にて翁登場の際、狂言方の演ずる三番目に用いる仮面...

鞍馬の黒沙門天へ祈誓をかけたところ高札を打つと、黒沙門天が早連雲人の舞になろうとして集った...

宝生会定式能 六月二十八日(日) 六月二十八日(日) 六月二十八日(日)

- 調友会第九回能組 七月五日(日)午後一時始 熱田 神宮 能楽殿 八 島 和島富太郎 鬼頭 季信...

七月月中旬に冷房設備が完成

熱田神宮能楽殿に、このたび冷房設備がとりつけられることになり、工事が行なわれるが七月中旬完成の予定である。

うたい訓話 ①

謡曲古二、先ツ修羅ヲ習ヒテ次ニ聲ノ優ナル事ヲ習フナリ。声ニ心ヲ付ケテ声ヨクナサント思フベカラズ、唯チキヤウニクシ...

拍子謡について

大槻 秀夫

うのであって、(みん)と仮名が長くなくてはいけないのである。

拍子謡の場合も、下に下げる節を踊る場合も皆同様であって、二つの音階(即ち節)を踊るの半拍分を踊る...

手びき

手びき 熱田神宮能楽殿 青刈 (あしか) シテ 橋 岡久共

四、七夕節句(七月七日)
七月七日、古来節日の一つに数えられていたが、殊にその夜を賞美して、万葉集・古今集などに「なぬかのよ」と詠まれた。それがいつしか昼を主としていうこととなった。

「なぬかのよ」を七夕(たなばた)と称するのは、毎年陰曆七月七日の夜には、牽牛(彦星)と織女(織姫)の二星が、天の川の橋を渡って、一年に一度の逢瀬を楽しむという支那の故事に因んで、この夜、女子がこの二つの星を祭り、織物・裁縫の巧ならんことを乞うもので、乞巧(きこう)でん、たなばな祭、単に「たなばた」ともいう。棚機津女(たなばたつめ)の略で、即ち織女の和訓である。乞巧は、織物・裁縫の上達を願う意であるから、もとは七月七日と限らなかつたが、後世に至って、陽数の重なる七月七日に固定したといわれ、願い事について、右のほか、恋愛・出産・音楽・詩歌・書道など、漸次その範囲も広くなり、また、牽牛星は農時を知ら基準とも考えられたところから、この星に農耕を祈ることもあった。

節会と節句

熱田神宮権宮司 皇学館大学教授

長谷晴男

で機(はた)を織りつつ神を迎える乙女を神女として、これに神を祭らせ、神慮を慰めることから、さらに送り神に托して穢(けがれ)を持ち去ってもらい、穢(みよぎ)を行って災厄を被うのである。さて「乞巧(きこう)」の起源は支那の漢の時代であり、荆楚歳時記によれば、この日に婦女は綵線(いろいと)を結び、針に七つの孔をあけ、または金・銀・鍍石(ちゆうせき)で針をつくり、瓜を庭中に供えて裁縫の上達を祈った。その時、蜘蛛(くも)が瓜の上に網をかけたならば、願い事が叶うと信じたのである。

上に横たえ、机の周囲や、机と机との間には九台の燈台を置いて火をともし、天皇は庭中の御椅子にお掛けになって、二星の星合いを御覧になり詩歌を作らせ給うた。この日、内膳司から素餅(さくへい)が献られる例であった。室町時代になると、歌を供える風が入って来たために、従前の様式とは大分変化した。御製をはじめ、朝臣の歌を集めて、梶の木に結びつけ、広蓋に、硯・筆・墨・楯の葉を載せて木の下に置き、時輪切りを七つの土器に入れ、また塩飽を切ったのを七つの土器に盛って台に載せる。梶の葉・硯の葉を台の上に敷き、蓮の花びらを載せる。縁側には、角盤(つのだら)を置き、七つの御灯を点じ、机の上には懐紙を載せておく。天皇はここで歌を詠まれたという。七夕は江戸幕府に依って、五節句の一つに定められたのであるが本稿に述べた漢土より伝来の「乞巧(きこう)」は、古くはそのまゝ宮中や上流社会に取り入れられたものといつか我が固有の信仰と結びつき、乞巧という面よりも、むしろ機を扱うことに目的が移ったものと思われる。屋根の上に供へ物を投げ上げたり、海に流し棄てたりする風習も、これを物語るものであろう。

第五回 薪能
八月一日(土)午後五時半始
熱田神宮神楽殿前仮設舞台

季の物を供えるというように、行事が簡単になった。その反面に、娯楽的な要素が加わり、七夕に因んで、鞠・花・貝覆・揚弓・香・歌などの七種の遊び、七百首の歌、七調子の管絃、七十韻の連句などで楽しみ、これらを七色の手向(たむけ)・七種の法楽と称した。江戸時代になると、その初期では、天皇の御前へ、広蓋の中に芋の葉の露の水を入れた硯七つ、筆二本、墨一挺を入れて内侍が持参する風習も、これを物語るものであろう。

楽の友社
吹上本町2-20
号464
7984
5屋36393
1年300円
1年400円
30円

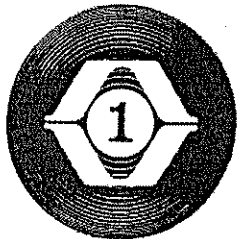
奉納大祭

川を渡るに先立って、堤防の夜祭をいりとする。提灯は一年三百六十五日の健康と繁栄を祈る意味をこめて三百六十五個つるされる。船首は鳥居形に飾られ、毎年五つの町内から一隻ずつ奉納し

演能カレン
【5月】
10日(日) 掬水会(来)
17日(日) 風鳴会(来)
23日(土) 一福会(来)
24日(日) やるま
【6月】
5日(金) 熱田祭(来)
6日(土) 和調会(来)
7日(日) 名匠会(来)
14日(日) 青陽会
【7月】
5日(日) 調友会
12日(日) 朝日狂
一以上熱田神宮
5月の放送
NHKラジオ
午前8:00
17日(日) 観世
木原
橋岡
24日(日) 金我
31日(日) 金我
番組のかわります。ご了承ください。

紅葉狩雑感
魔性「天の岩戸の由来」
北素明
あたたためて紅葉を焼く」と謡曲の一節を、小声で詠ってみたが、どうも先程の話では、びったりこない。こんどは、一気に終りまで詠ってみた。そして謡曲には、とてつもない壮大な劇の組み合わせのあることに気がついた。これまでも、何度となく詠って来て、ついで、そんな感じをうけたことはなかったのにと考えた。強いていえば、船弁慶などにもみられる、劇の急転換は、序破急の巧みな組み合わせだと、早合点して少しも気にしていなかったのである。おもしろい話だが、長い年月をかけていながら、曲趣を極める努力をしていなかったということである。それが、あの素朴な、味わいのない伝説で「紅葉狩」とは、紅葉という悪女を退治したことにすぎないと言われてみて、はじめて謡曲の作者の心の大きさと、発想の深遠さを教えてもらったようなものである。この岩戸伝説は、共同浴場で浴客の出入りも多い。さきほどまで騒しく談笑していた若い人たちが勝ったのか、急に静けさが重くのしかかるように思えた。
② 奥州と信濃
静かになった。黒々とした岩肌には、はいあがっていき湯気の白さが、生きもののように見える。どうも先程から、考えてみようと思っていたことより遠く何かを追っているようである。岩と岩との間に、もう一つの空間があつて、それが間にでもつながっているように、湯気の白さが異様である。源経基が平将門の乱のあと二十一年ほど世を去っていることから考えると、この伝説の展開には、いささか時間がなさすぎるのではなからうか。
中心人物である「紅葉」にしても、愛妾という、なやかな生活から、追放されたといえ、短時日のうちに、盗賊をたぶらかし、國司に謀反を起させる実力を、どうしてつけたのかも不思議に思えてくる。そう思っていると、陸奥の地から、わざわざ信濃の戸隠へ追放というのも、おかしい。当時はおもと近くに、安達ヶ原などかっこうの地があつたはずである。どうも、この地理的な関係には無理があるようで、唐突な感じはまぬがれないという気が、ますます濃厚になってきた。こんなことを書くと、浅薄な歴史の知識で、明確な資料のない伝説を、とやかく言い出したら、日本中の伝説は皆々存在の理由を失ってしまうではないか、と言われそうだが、私は、なにも歴史と取り組もうとしているのではなく、紅葉と温泉と伝説という、ロマンチックな組み合わせにぶつかって、欲楽と慰安と勉強というカクテルみたいなロジックをもてあましたので、そのときの模様を、わかっただけで、思っただけである。とにかく、戸隠山の附近と別所温泉のある筑摩山地あたりに、平維茂の遺跡があつたり、鬼女の店に岩屋の残っているのには、何かわけがあるように思えてならない。ちなみに謡曲の資料としては、「いまだ扱るところを知らず」とあることだけは、附記しておかなければ、どうやら迷感になりそう

蓬菜軒
御料理
本店 熱田区神戸町34 電話(671)8686-8688
神宮東門店 熱田区新宮坂町1 電話(671)5596-5598
友の楽能
ナゴヤ納屋橋畔店(231)2709-6818
名鉄百貨店九階のれん茶屋



現代をみつめる眼
東海テレビ

能 楽 の 友

題字は熱田神宮 篠田宮司筆

発行 能 楽 の 友
名古屋市中区上本町2-1
(郵便番号 464)
電話 (731) 7 9 8 4
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 300円
郵送の場合 1年 400円
一 部 30円

秋 (謡日)
10月



「葵上」のスケッチ

仙田雪山子画

本紙では、第2回謡曲名所めぐりとして「秋の嵯峨野を訪ねる」バスツアーを、十月十日(祝)に催します。

要項は次のとおりです。詳細は次号にてお知らせしますが、定

第2回謡曲名所めぐり 秋の嵯峨野を訪ねる 10月10日実施、会員を募集

員の関係もありませんので、早目にお申し込み下さい。

るよう計画しております。
●日時 昭和四十五年十月十日(祝) 東急バスデラックスバス
テレビ塔8・30発、稲荷19・30
●コース 名古屋―名神ハイウェイ―京都 嵯峨野の謡曲名所めぐり(野宮、定家、磯、小骨、嵐山、百萬)

能 衆 大 愛知文化講堂 9月6日 能三番上

愛知文化講堂
9月6日 能三番上
宝生流能「半部」シテ内藤泰二、ワキ高安滋郎、喜多流能「小銀魚」シテ和島富太郎、ワキ高安滋郎、舞臺子・金剛流「高砂」山田三郎、金春流「松風」櫻馬金太郎、宝生流「唐船」辰巳孝、観世流「融」藤井久雄、仕舞 観世流「井筒」加藤良久「雨之段」河村純二「花篋」梅田邦久「女郎花」柴田初太郎、ほか狂言一帯。
開演は午後二時 指定席千円、自由席八百円

演能カレンダー

- 〔8月〕
1日(土) 名古屋新能(有料) 一熱田神宮境内一
16日(日) 楽師会乱能(有料)
23日(日) 藤門会 (来聴歓迎)
29日(土) 楽謡と持能の夕 (有料) 一以上熱田神宮能楽殿一
- 〔9月〕
6日(日) 大衆能(有料) 一愛知県文化講堂一
18日(日) 名古屋観世会 (有料)
15日(祭) 名古屋橋岡会 (有料) 一熱田神宮能楽殿一

熱田神宮 宮司 篠田康雄
権宮司 長谷晴男

7月の放送予定

- NHK第2放送 8時
19日(日) 独吟「班女」渡見 重弘
独吟「生田敦盛」岡 久雄
26日(日) 観世流「山姥」井上嘉久ほか
番組のかわることがあります。ご了承下さい。

「葵上」の解説

「葵上」の曲は、源氏物語から取材してつくられてあるもので、左大臣の御息女葵上が病臥しているところへ、六条御息所の怨霊が葵上に怨みを報いんとて、枕辺に現われて、怨みを述べるところでその発端は、加茂のお祭の行列を見物せんとて、多くの貴婦人たちが車に乗って集ってきた際に、葵上は何分にも左大臣の御息女であるのに、六条御息所の方は車も貧弱であり、従者は少ない。葵上の従者たちが御息所の車を車溜りの奥の方へ押し込めたので、御息所は非常に恥じ悲しんで、その怨念が生霊となって葵上の枕辺に現われてきたところで、この図は、中入後の姿であるが、常の姿とはかわり、空之祈とか無明之祈などと小唄のついた節には、緋の長袴を用いるのである。

に会員証をお送り致しますから当日ご持参下さい。
百番集または一番本をご持参下さい。一番本は、コース案内の裏面にカシヤの中の謡曲本をご持参下さい。

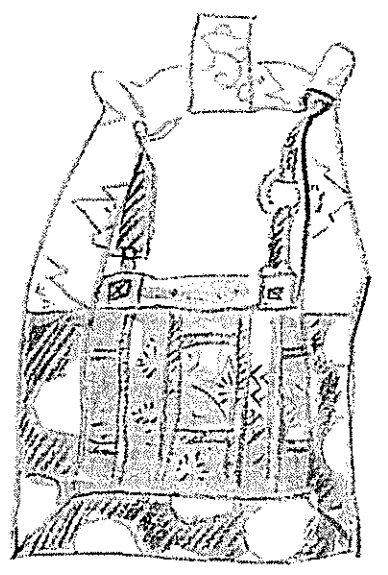
演能写真
「芸能スナップ・カラー・8ミリ」
〒602 京都市上京区北野上七軒
ワシントン写真工房

幽花会 片山慶次郎 〒603 京都市北区山下花ノ木町二二 電話 四九二一五三〇二番	幽謳会 片山博太郎	鳳鳴会 武田太加志 名古屋市中区東区葵町九 吉田義正方	観世元昭会 名古屋中日文化センター 特別講座	熱田神宮能楽殿 観世元正 東京都渋谷区恵比寿南 一丁目二十一番地	鎌倉能の会 中森晶三 中森貫太	大槻文蔵 大槻秀夫 大阪府東区上町二番地	料風会 欧風会 料風会
淵水会 林甲子夫 名古屋市中区今池町二ノ四九 電話 (〇五二) 四四一八三	掬水会 柴田初太郎 柴田収武	藤井久雄 藤井徳三 藤井楽人 神戸市芦屋区熊内町二ノ九四ノ五 電話 (〇五二) 五一四四番	井上嘉久 京都市北区紫雲寺下島田町六	大槻文蔵 大槻秀夫	中森晶三 中森貫太	大槻文蔵 大槻秀夫	料風会 欧風会 料風会

装 束 談 義 (三十)

掛 絡 (から)

逸 栄 井 二 ふ と



らとそよぐのを見ると、無色無濁 (いろなしぬいはい) を見るようである。

半夏生 (はんげしょう) が雑草の中でヒラリヒラリと真白い葉を風にたがせているのを見ると、花と見まがう位である。夏を過ぎ半夏生になる頃、頂きに一枚ないしは二枚の白い葉をつけるのでこの名前がある。ほたるぶくろやひるがをの中に、半夏生がしらじ

色々と考へなくてはならぬ。先賢の和島富太郎さん (喜多) の装束づけは天下第一品と定評があるが、氏の装束づけは実に素晴らしい。装束のもう一つ大事なことは文様 (もんよう) であろう。能装束の文様は大きく分けて抽象文と具象文の二つに分けることが出来る。抽象文は幾何学的文といつてもいい、直線と曲線の組合せや直線ばかり強弱を象徴させたものが多く、具象文は写生的な文様で、花とか鳥とか器物とか、一見して何かであることが分る文様である。



盛久 経文あらたに盛りなき 剣段々に折れにけり



抽象文に対する具象文は、自由文といつてもいい、構成の自由さがある。一番多いのは、女性のやさしさを強調する花であろう。桜、なでしこ、菊、梅、はまき、あじさい等、かすかきりなくある。動物では、鳳凰、千鳥、鶴、さぎ、雀、うづら等、力を象徴するものに、鷹や鶴等の猛禽類、可憐なところでは、蝶やとんぼ、又、物としては、御所車、色紙、扇、短冊、巻物、笛、鼓等を象徴させている。文様の形式を分類すると以上

演 能 案 内

楽 師 会 乱 能

つて能装束特有の家業細道を現出し、或は、幽玄な深い味わいをたどらせているのである。 装束談義。掛絡。僧侶が儀式の際に左肩から斜めに着用する金網や紗などで作った袷袋の簡略化されたもので、能装束としては、いろいろな製法を綴り、半袷袋とする。自然居士、東岸居士、盛久、那那のシテ、千寿 (千手) 小原御幸 (大原御幸) のツレ、又、鈴木

Table listing performance details including dates (August 16th), times (12:00 PM), and names of performers and organizers. Includes names like 梅若修, 梅若修, 梅若修, etc.

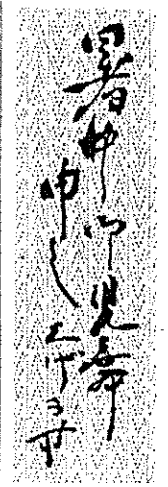


Table listing names of performers and organizers, such as 梅若修, 梅若修, 梅若修, etc.

Table listing names of performers and organizers, such as 梅若修, 梅若修, 梅若修, etc.

拍子謡について

大 槻 秀 夫

この様に、拍子謡を取り出す時に、大成版ではその、拍子謡 (カ) で固めているのである。 「拍子」の字に廻りがあるの、の字の生、字が消え

観世喜之 観世武雄 増田一雄 塚本秀雄 自賀滋子

金剛永謹



に、鷹や鶴等の猛禽類、可憐なところでは、蝶やとんぼ、又、物としては、御所車、色紙、扇、短冊、巻物、笛、箏等を登場させている。

野宮 梅若 盛哉 井戸 良造
紅葉狩 能沢 恵美子 岡田 朗詩
梅若 盛哉 井戸 良造 池内光之助

大槻 秀夫

次句「俗人の姿」は、上句八文字あるので、前句の息継ぎの所に、この八文字の一字目の「れ」を語るのである。前に記したとおり、これを術語で「半声」と云う。謂本には前句の終りの仮名と、この八文字の一字目の仮名の間に縦の線を入れてある。これが半声の意味であって息を切らないで続けてお誦いなさいと云う印である。

「乱れ笠」は、五文字の上句であるから、二字不足している「ヤア」の間にならなければならない。すなわち前句の終りの仮名を引いて二字不足を補っているのであるが、その引き具合は表の通りである。

「なりけれ」との呑み節は、「とんー」と語らずに「とんー」と語るのである。終りの句は上句七文字であるが、一字目に、廻し、があるので半声となり、大の廻し、に語らせる事は以前に説明した通りである。

以上の如く、百万・富士太鼓・高砂の三曲を掲げて説明したが、他にもキリヤ初音又は次第・道行・下歌・上歌・待謡或いはロンギなども比較的拍子当りの易しい曲が多いので、いままでも説明した廻を繰返し蒸説されて、色々の曲を独習されるのが良いのである。

「乱れ笠」は、五文字の上句であるから、二字不足している「ヤア」の間にならなければならない。すなわち前句の終りの仮名を引いて二字不足を補っているのであるが、その引き具合は表の通りである。

「君の恵みぞ」で小さい丸印のあるのは半句謡(はんとく)と云い、一句の内に、節、として切つて語う取り方である。

返しの「君の恵みぞ」の句は、上句にも下句にも沢山の拍子がある。上句にある等の三つの生文字は、三つとも消されてしまうのである。

拍子の種類とトリに就いて
いままでも説明して来た句は、総て、本地、であった。本地、は、八拍拍子であったが、トリ、はその半分の、四拍拍子である。即ち、一三三四と四つ拍つのである。

第四十三番 貴 船

(きぶね)

京都の北山に有名な鞍馬山という山がある。その西の麓の山裾には貴船川という清冽なる流れの小川があり、其の傍に貴船明神と申す神社がある。その神主が或る夜霊夢を蒙った。それは明日都より参詣の人が来る筈であるから其の人が来らば霊夢のようを知らせよとの事であったので心待ちに待って居たところへ、上東門院に仕えて居た和泉式部(いずみしきぶ)が何事か祈願のために参詣に來て百首の和歌を一巻に認めて持参し神前へ奉納せられた。神主は霊夢のようを語つたのは「我に祈る事信心堅固にして偽りなし殊に手向の和歌は五言の暇りを覚ますなれば男女の仲を守るべし、然らば神前にて和歌を誦じて舞を舞へ祈りの願ひを叶へとせんとす」との事

申し伝えたので、式部は立あがり舞を舞い神慮をすすしめて居た所へ、藤原の康政と申す人が従来式部とねんごろに致して居たのに一時式部と遠ざかって居たので、久しぶりに式部を訪れた所貴船へ参詣に行つたとの事を聞き、そのまゝ、貴船の宮へ追掛り来り、神前にて廻り廻りて元の如く仲直りし

の社人に狸々の出で来るのは誠に尋ねられたるに、社人は暫く待たせ給へ狸々を呼び出し来るべしとてかきけす様に姿を消した。夜になり狸々の姿の狸々が来り或は籠を抱き、又は大盆を取り持ち花を散らし松の藤原殿山裾とりに色々の舞をつくり霊酒を勅使に授け、勅使は霊酒を持ちて芽出

して居た。烈しい雪で里人なども一人も来ないのに、一人の女性が来り、言葉交し、こは恋の松原とてゆかりのある松原であると告げた。昔この辺りに住んで居た人が忍び妻と契り、この松原にて待合せする事として居たところ、或る時女が来て待てども男が来らず、其の中吹雪烈しくなり遂に雪に埋れて空しくなつた。さも浅間しい邪淫の姿を哀れと思し召し跡弔ひて給われとて雪の中へ姿が消え失せた。僧は気の毒に思ひて懸に除帯の経を説んでやつたので、女は再び昔の姿を表現し、邪淫の罪にて黒繩聚舎の地獄の責に苦しむ身がお僧の弔ひにより開く花の台に至る事が出来ると聲の声と共に姿は消え失せた。

古曲 雑話

西村弘敬

第四十四番 駒形狸々
(こまがたしやうじやう)

三河の國駒形の海岸にある駒形明神に海中より狸々が出て来り、不老不死の霊酒をすすめ報酬を授けるとの事が都へ知れ渡り、賢きあたりより勅使が下向せられ明神

第四十五番 恋の松原
(こいのまつばら)

諸国一見の僧が北陸道方面の旅を終え、都へ上るため若狭路に差しかかり、三輪山という所へ来たところ、俄に雪が烈しく降つて来たので、近くの松原へ入り小屋があつたので立寄り雪を晴らそうと

若手能の会

7月16、17日京都親世会館で

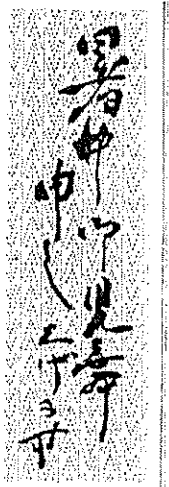
誠交会 奥 善 助
東京都世田谷区三軒茶屋二一〇一三
電話 (〇三) 四三二二六三七

観世武雄

増田 一雄
塚本 秀雄
有賀 滋子
長谷川 章
高木 美智子
加藤 保彦
青木 武弘
吉田 妙

大江 又三郎
京都市東山区本町二〇丁目
電話 五六一〇六二二番

山本 博之
山本 勝一



雄風会 下田 雄三
大阪市東区高麗橋詰町五三

静交会 高橋 静夫
東京都世田谷区若林三ノ三三ノ三
電話 (四一三) 一二二八番

猶恵会 熊 沢 恵美子

此水会 高野 瀬透

竜神会 竹内 六郎
岡崎市六供町三ツ岩五七

神楽会 増田 十草

壺 泉 会
名古屋市昭和区山里町
南山大学ハイム一号
電話 八三二二二番

金 剛 永 謹

豊 嶋 弥 左 衛 門
豊 嶋 三 千 春
京都市東山区知恩院山内林下町

菊 扇 会
東京・京都・名古屋

広 田 泰 三
金剛流華月会

今 井 幾 三 郎
清 隆

金 剛 流 春 鶯 会
山 田 仁 三 郎

中 部 金 剛 会
山 田 仁 三 郎

宗 家 宝 生 九 郎
〒113 東京都文京区本郷一五五

倉 本 雅
神戸市東灘区住吉宮町
六丁目一五二一八四一三

緑 宝 会
名古屋市中区鳴海町池上二六ノ一
電話 (六二二) 三四二八番

加 藤 勝 利 方

紅葉狩雑感

魔性「天の岩戸の由来」

北 素 明

この温泉は四十二度から四十五度までと聞いていたが、こゝも、いろいろと、こみ入った想像をたどっているうちに、とても熱い湯につかっているような気がして来た。

岩陰に冷たい水が、こんこんと湧きあがっている。少し頭でも冷やそうと、ザブンとかぶって外に出た。

③ 神と鬼と

カスのようなものが胸につかえている。だがそのとき、私は何を考えようとしていたのだ、謡曲の杜大さについて思ってみようとしていたのではなかったのか、まるで見当ちがいのことを考えていたようである……ことに気がついた。

伝説はそれを素材に扱ったのであり、能の作者は、それを高度化させ、昇華させて、こんにちに見る壮大さをなしたのである。

④ 謡曲の旅路

「紅葉狩」の作者は、観世小次郎信光ということである。

信光が成長した時代は、北条早雲が、堀越御所を滅して、伊豆を併呑し、小田原北条の基礎をつくらせた時を同じうしている。

殿島蒼人氏逝去

名古屋演劇ペンクラブ理事長、芸能評論家殿島蒼人氏は、七月六日逝去された。享年七十二。告別式は東区泰安殿で盛大に行なわれた。氏は本紙にも創刊以来しばしば寄稿された。

観能感想

名匠鑑賞能

N 生

能の舞台ほど、観客と演者にとって不親切なものはない。他の演劇に見られる弊、一作ごと、あるいは幕ごとに変わるべき背景は見られず、単調そのものである。作り物といっても、ひどく簡素なもので、内容について、わずかな暗示を受けるだけである。観客の視線は、舞台上の何の手がかりも見つけられず感情移入出来ないまま、期待と共に、繰り返し様々な思いを込めて舞台上に投げられ、それは、焦点が定まらば、乱れ重なり合っ

維持することはたやすくはなからう。この舞台の複雑な単調さに耐えませんが、それを打ち破るのは難子方である。音と拍子のうちに、様々な思念を一気に含み込んで、舞台を現実と異なる見えざる世界として変じ続ける。様々な思念は、乱れ重なり合ったまま舞台の背景となる。あるいは、それを未だ表にならない人の内部の世界、無意識の世界と呼んでもよいかも知れない。そうした背景から形式を求めて表現するのが芸であらうし、それを通して観客は、内部に世界を創るのであらう。ともかく演能の出来は、まずその難子方にかかっている。

わけ、笛の澄んだ音色は、観る者の様々な思念と緊張に耐えつつ、内部の奥深いところからあるいは遠い過去から聞えてくるような音色であった。清純、壮重な曲「三輪」を終始支えるに充分な難子方であった。

生み出していた。面のみが明るく輝いていたシテは、神楽の舞で、舞台全体に、闇から一気に澄んだ明るさをとりもどした。一つの見どころであった。ただし、シテの謡には、声の良さにひきつけられつつも、もう一息の広がりを感じさせず、統一を欠いた感を感じたのは、観者の未熟さの故だろうか。

名古屋能楽鑑賞会
かすみ会
田鍋惣太郎
藤田六郎兵衛
藤田昭彦
龍吟会
茂山千作

幸流小鼓 亀井俊一
萬野流大鼓 亀井忠雄
宝生流シテ方 亀井保雄
萬野流大鼓 亀井保実
幸圓次郎

佐野正治
本田光洋
福王茂十郎
福王輝幸
福王信光
豊嶋十郎
森茂好
殿島蒼人氏逝去
名古屋能楽鑑賞会

三宅藤九郎
和泉保之
善竹忠一郎
茂山忠三郎
杉市太郎
寺井政数
山本敬一郎
飯島六之佐
飯島忠

能の友社
吹上本町2-20
464
7984
5屋 36393
1年 300円
1年 400円
30円

名古屋新能近へ
能「竹生島」天鼓上演

カレンダー
陽会(有料)
会定式能(有料)
会定式能(有料)

友会(有料)
狂言会(有料)
以上熱田神宮能楽
屋新能(有料)
一熱田神宮能

の放送予定
第2放送 午前8:00
「景清」宝生九郎
「鶴飼」福岡周助
「鐘の音」野村胡堂
「萬野物狂」大西信久、大西信

小料理と樽酒
安田屋
名古屋・東新町東北側
電話 (971) 0916・0158番

宗家 宝生九郎著 全七巻
宝生流囃子仕舞全集 2,500円
第一巻発売中 (隔月に一巻づつを発行)
収載曲目 (あ) 葵上・阿漕・芦刈・安宅・敦盛・海人・嵐山
(い) 生田敦盛・井筒・岩船 (う) 鶴飼・雨月・右近
(え) 歌占・善知鳥・采女・梅枝・雲林院
わんや書店

畠中見舞広告について
畠中見舞と芳名広告は紙面の都合にて、七月号、八月号に掲載させていただきますので、悪しからずご了承下さい。(編集部)

行紀能

孫次郎

文と絵 二井栄逸



まえがき
一つ一つの能面をみつめ、描き
んと一緒に語るのからこの稿
をおこしてゆきたいと思いま
ほんのつかつかの面でも描き
んの胸の内に残つてゆけば幸
と思ひます。

この頃の世の中は何もかも自然破
壊の潮におされて人間自身までが
人造人間になってしまつたのではな
いかとさえ思ふ位である。テレビ
でお茶を飲むひしゃくを造つてい
る人の仕事をみたが、三十数年、
この道一筋に小刀とくさで茶室
のひしゃくを造り続ける人。機械
で造れない尊貴をしみじみ思つた。
近鉄の特急電車にはいつも車窓
に花が挿してあつて、旅の心を豊
かにしてきてくれたのが、いつの

間にあのいやかなボンコンフラワ
リになつてしまつたり、桜餅の桜
の若葉や、ちまきの葉っぱがほん
ものでなくなつてしまふ。こんな
小さなことにさえ私達は自然と断
絶のうき目を見るのである。
こないだ伊勢の徳川山にあるK
邸で紅梅の会があつた。この会は
花のお師匠さんばかりで、毎月、
花の美技指導を主に課外として、
絵のお稽古、演劇研究として能の
見方等を講義する会で、いわば氣
楽な研修と、お遊びの会なのであ
る。初秋も近い空が、すみれ色に
夕暮れると、ひつそりと静まりか
えつた庭にはつかりと突然に夕顔
が咲いた。ほんとかすかな音さえ
するのである。あゝ哀愁夫人、と
私が叫んだのでみんなひつくりし

たらしい。それはいかにもはつぱ
りと、そして、あでやかに闇に浮
いたように咲いたのである。此の
花は清楚な白一色の花であるが、
おふりのせい、あでやかとい
う感じである。ほんとうの名前は
夜顔（よるがほ）で別名を満月草
ともい、俗に夕顔ともいふ。俗
名の方がびつたりする為か、多く
の人は夕顔と呼んでゐる。
能面の女面の中にも数々あるが、
孫次郎という面（おもて）の清麗
さは、丁度、夕やみに咲いた夕顔

そのものなのである。先年、東京
の三越の襦袢に出品した孫次郎の
バックに、私は夕やみの感じを出
し、哀愁夫人と題名をつけたので
あつた。K邸の庭に咲いた夕顔は
その哀愁夫人なのである。
二十四、五才から三十才位まで
勿論、男性と深い関係のある女性
を表現した孫次郎に私は無限の憧
れを感じる。それはあつたかも夕暮
がただようようなほのかな哀愁を
感じさせるからである。私の両室
には、完成したものや、かきかけ
の幾人かの孫次郎が絵箱の中から
ほゞえみかけてくる。妻をくじし
た金剛孫次郎が、美しい妻への思
慕と愛着を忘れたか、秘かに亡き
妻の面影を打つたものと伝えられ
てゐる。その為に孫次郎という親
しみやすい名前になつたのであろ
う。作者によつて孫次郎の中にも
頗るでぶお公卿様のお姫様のような
鷹揚なもの、肉付きも豊満で健康
的なもの、つゞましく清らかなも
の、色々あるが、私は、洞白や
洞水のものよりも、夕やみの中に
哀愁をたゞえ、夫を切々として慕
う佳人のおもさしを秘めた金剛
孫次郎の方が好きである。
（絵は孫次郎）

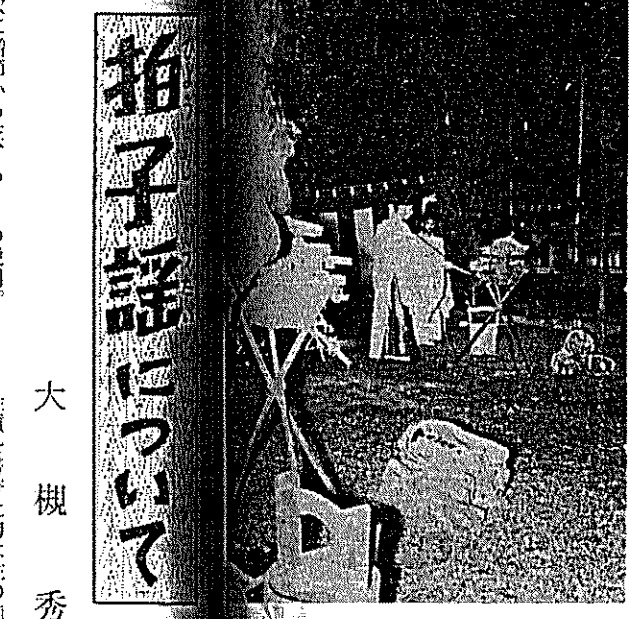
第五十番 行家（ゆきい）
源行家は源為義の第十子にて彼
の有名な鎮西八郎為朝の次の弟で
従つて九郎判官義経の為に伯父
に當つて居た。義経が関東より都
へ上り来て平家の軍と戦を始めた
時分には義経の軍に入つて、諸方
の戦場にて源氏の軍の手伝いをして
いたが、此人性来の臆病なのか
或は作戦の下手なのか、いつも敗
戦ばかりで義経としては有難迷惑
な存在であつたが、源氏の一族で
あり、且つ肉身の伯父なので捨て
るわけにも参らな、そのままに過
ごして居た。そのうちに義経は兄
頼朝との仲違いで遂に都を置いて
西海方面へ逃く為大物の浦から舟
出したが、難風に吹き流されて根
津の岸に辿りつき天王寺の寺中に
隠れて居たところ、追手に見付け
られ、殺すに居た。行家も山
中に分入り隠れて居た。行家も

古曲雑話 (19) 西村弘敬
傷したが、遂に行家を祖伏せ郎党
の手にて召し捕り都へと送つた。
時は文治二年五月の事であつた。
第五十一番 御裳濯川
（みもすそがわ）
朝廷の臣下の者が伊勢大神宮へ
参詣に來り、石の鏡を見する為
に御裳濯川に参詣した。行家も

第五十二番 正儀世守
（しょうぎせいしゆ）
昔唐土（今の中国）に正儀世守
という兄弟の者があつた。兄は正
儀といふ、弟は世守といつた。彼
等の父親は左の大臣の為に討たれ
たので兄弟二人が復讐に左の大臣
を討ち取つたが捕えられ、その國
の大法により誅せられる事となつ
た。そこへ彼等の母親が来て役人
と色々論争の末、二人の内一人
を斬る事となつたのが、兄弟の者
は自分が斬られようと互いに譲ら
ず、依て役人は母に命じて兄弟何
れかを撰び出させんとした。母は
継子の兄を助け、弟の弟を斬らせ
んとし、それよりも自分が身替り
とならんと申出でたが容れられず
斯く言争ひて果しがつかないの
で役人も腕を投げ捨てて立ち上つた。
この事以上は知られて互の謀謀の

三世代の能
沼 艸 雨
梅若六郎、大江又三郎、鈴木一
雄氏という円熟の極にある年代。
梅若六郎、大江又三郎、鈴木一
雄氏という円熟の極にある年代。

お知らせ
NHK第2放送日曜日の「謡曲
狂言」（午前8時〜9時）の放送
曲目を、早く知りたいとの要望が
ありますので、本紙では、希望に
より、読者に放送予定速報として
毎月がきにて、お知らせ致しま
す。（無料）
ご希望の方は、郵送の都合上、



拍子謡について
大槻秀夫
その
凡らくないと思はれるのである。
又半声の句も一寸頭に浮かんで来ない
が、二人静の「桜木の宮」などは、現行
の大成歌で、上りの生音を聴きこ

麦の会能組
九月二十六日（土）午後二時始
熱田 神宮 能楽 殿
講演 「本日の能について」 西田 三好
独吟 鐘之段 二井 栄逸
表裏 正直 河村 徳一郎 寛助 三男
能 藤 西村 欽也 後藤 孝一郎 寛助 三男
間 井上 礼之助
仕舞 笠之段 倉本 雅
仕舞 殺生石 大島 政允
狂言 文 荷 佐藤 友彦 井上 松次郎
狂言 実 盛 磯 相島 富太郎
狂言 小 督 長巳 孝 田鍋 惣太郎
一調 一声 長田 義 寛 鏡一 鬼頭 好信
能 熊 坂 高安 滋郎 福井 啓次郎 藤田 昭彦
間 佐藤 秀雄
附 祝言 主催 麦の会

名匠鑑賞能 (第六十二回)
十月二十五日（日）十一時半始
熱田 神宮 能楽 殿
舞囃子 養 老 鈴木 一雄 田鍋 洋一 鬼頭 八郎
能 丸 大江 又三郎 橋岡 久馬 福王 朝幸 吉田 定男 寛 三男
間 佐藤 友彦 田鍋 惣一郎
狂言 栗 焼 井上 松次郎 井上 礼之助
能 遊 行 柳 梅若 六郎 西村 弘敬 河村 徳一郎 前川 善雄
間 青柳 之舞 佐藤 昭三郎 田鍋 惣太郎 藤田 六郎兵衛

NHK第2放送 8時
9月の放送予定
(日) 宝生流「富士太鼓」松本 謙三ほか
(日) 狂言「瓜盗人」山本 則寿ほか
(日) 親世流「玉 苞」山階 信弘
(日) 金剛流「望月」豊嶋 弥左衛門ほか
(日) 親世流「遊行柳」坂井 晋次郎ほか
(日) 15日(祝)「織」喜多 実ほか
(日) 金春流「卒都婆小町」松間 道雄ほか

御会費(税込)
(全部指定席)
特 二、五〇〇円
甲 一、五〇〇円
乙 一、〇〇〇円
主催 名古屋能楽鑑賞会
後援 名古屋教育委員会
名古屋音楽会
名古屋新聞

お知らせ
NHK第2放送日曜日の「謡曲
狂言」（午前8時〜9時）の放送
曲目を、早く知りたいとの要望が
ありますので、本紙では、希望に
より、読者に放送予定速報として
毎月がきにて、お知らせ致しま
す。（無料）
ご希望の方は、郵送の都合上、

社の友社
 東京本町2-20
 464)
 7984
 1年 300円
 1年 400円
 30円

初めての夏の乱能

8月16日 能楽殿で開演

放送予定
 8時
 喜多川 大観
 喜多川 大観
 喜多川 大観
 喜多川 大観

紅葉狩雑感

魔性「天の岩戸の由来」③

北 素 明

彼の作には、船弁慶あり安宅ありで、その都度出かけていたのは、なんぼ七十年の齡を全うしたとしても無理である。

こゝで、私は思い切って、大和の住居から信濃に入り、筑摩山地から戸隠山を経て、富山を通り、安宅(石川界小松市)を調べて、摂津の大物(尼崎市)へ至る、謡曲製作の旅を考えて見た。

③ 戸隠山麓で
 信光は、長い旅の道すがら、紅葉と鬼女の組み合わせの想をねって三河から飯田に出て、天竜の水しぶきに秋を感じ、諏訪神社に折りをかけて、丸子あたりから別所温泉への道を進んだとしよう。

そのころ、すでに五百年に余る歴史を経た温泉地名を知られていて、筑摩山麓には無数の泉郷が開けていたことだろうから、湯治と研究に目を重ね、信濃路特有の紅葉を持つあいだ、私が見た将軍格をたずね、その地の古事から、

④ 結 び
 私が別所温泉を訪れたのはもうかれこれ十年も前のことである。昭和十一年から山に籠れ、四季を

「麦の会」上演
 きたる九月二十六日(土) 熱田神宮能楽殿で麦の会主催により宝生流能「藤」喜多流能「熊坂」はじめ狂言、一調一折各一番、仕舞三番、独吟一番が上演されるが、麦の会喜多流能分長田嶋、宝生流能分長正宜両氏は、発会にあたり次のようにあいさつしている。

こあいさつ
 藤々と春の陽の光りに照り映えて、まっすぐにすすくと伸びる青い麦の姿は、雲の道に携わる私たちに、この上ない美しさと、すがすがしさとを感じさせます。しかも、その姿は萌え出した芽を、踏まれ踏まれてこそ、立派に力強く生い育って行き、ここにもまた私たちは、深く教えられるものがあります。

このたび私たちが、それぞれ流儀の宗家のお許しを得て、先輩・流友各位の御支援のもとに、ささやかながら研修のための催しを行なうことになり、これを麦の会と命名致しましたのも、偏に青い麦の姿にあやかって、正しい芸の伝承に携る精進と練習を続け、それによって、私たちの技芸の伸展をはかりたいという念願からには、はかりません。

就きましては、何卒この意図に御賛同下さいまして、恰も麦の芽を踏むお気持ちで、忌憚のない御批評と御叱正をいただき、やがて黄熟の麦の秋を迎えることが出来ますよう、幾久しく変わぬ御指導と御援助を、切にお願い申し上げます。

五、重陽節句 (九月九日)
 九月九日は古来、節句の一つに数えられ、宮庭に於ては、此の日菊花宴(きくかのえん)が催されたので、菊花宴・重陽宴(ちやうようのえん)・九月節会などと称し、民間では、重陽節句・菊節句・粟節句などと称した。そこで重陽は、節句の何れに属するかは区分し難いが本稿では一般の例に倣い、節句の部類に入れておく。

重陽というのは、日本歳時記五九月に「九月、重陽と云ふ、月と日と二ながら老陽の数かなふ故にかくいふなり、又重九ともいふ」とあることによる。

またこの節句のものとして、菊の花を珍重し、菊の酒を飲んで長寿を祈り、或は栗などを親戚や友人の間に贈る風習があった。菊節句・粟節句の名もここからきている。

菊に延寿の效があると信ぜられた起源は古く、昔支那で、汝南(じよなん)の恒景(かんけい)が費長房(ひちやうぼう)に学んでいた時、或る日、費長房が恒景に「今年九月九日汝の家には災あり、当日一族に紅葉に茶黄(じゅゆ)を入れ、臂(ひじ)にかけさせ、

節会と節句 (4)
 熱田神宮権宮司 皇学館大学教授 長谷晴男

またこの節句、菊を賞(め)でるために、前夜の露に花の色のうつらうつらをおそれ、真綿を菊の大小に縫い、丸く薄く平にして花にかぶせた。これを「菊のきせ綿」といい、これによって菊の花の香が綿にうつるので、この綿で顔や体を拭くと、老を拭い去ることが出来、仙境に咲くという菊にあやかって、長命延寿の効能がある。

としたものようである。さて重陽宴の起源については詳かでないが、天武天皇十四年九月九日の宴を以て、史上初の初見とされる。

この日、粟司から栗黄の実を献上し、これを盛つた羹を御膳の左右に懸け、五月五日の節会の時に懸けた栗玉と取りかえた。

天皇、紫宸殿(古くは神泉苑乾臨園)に出御になり、博士等を召して詩を賦せしめ、探題のこともあった。内膳司は天皇・皇太子に御膳を供し、臣下にも宴を賜わった。此の間に國栖奏(くすのそう)並びに舞妓(ぶぎ)の舞があり内弁宣命を誦して式を終る。

國栖は吉野の古代民族で、応神天皇行幸の時、歌笛を奏し、御費(みにえ)を献じたことが宮中の吉例となり、大嘗祭をはじめ他の節会の時に参賀して古風を奏した。これが即ち國栖奏で、舞妓の舞とは、朝廷に於て、雅楽寮の外に、女楽(めがく)・踏歌(と

うか)などを教習する内教坊(ないきようぼう)の舞妓の奏するものである。

この日、天皇が出御にならない場合は、上野宮(かみのみや)の平敷(ひらしき)の座に著き、「平座」といつて略式の宴を催される例であった。

また、朝廷に於ては毎年十月五日に、残菊を賞して酒宴を賜わった。これを「残菊宴」と称した。

このような重陽宴は、平安初期から末期にかけて盛んに行われたが、鎌倉時代以降は衰微して行たようである。

朝日文化センター
 10月から囃子教室
 朝日文化センターでは、来る十月から囃子教室(小鼓と笛)を開講する。

講師は、小鼓・幸清流・田嶋惣一郎師範、藤田流三男師、毎週火曜日午前十時から月四回である。詳細は、朝日文化センター(名古屋市中村区柳橋角ガールズビル六階)に問合わせられるとよい。

はれの日を一層美しく.....

才世非や衣裳部

婚 礼 用
高 級 貨 衣 装

名古屋市中区栄三-22-30 TEL(0)251-1821-241-0555

宗家 宝生九郎著 全七巻
宝生流囃子仕舞全集 価 2500円
 第一巻・第二巻発売中 (隔月に一巻づつ発行)

第一巻収録曲目(あ) 茨上・阿漕・芦刈・安宅・敦盛・海人・嵐山
 (い) 生田敦盛・井筒・岩船 (う) 鶴飼・川月・石近・歌古・善知鳥・采女・梅枝・雲林院

東京都千代田区神田神保町3-9 東京都中央区銀座8-7-5
 坂 番 東 京 4 1 6 3 番 わんや書店 坂 番 東 京 (571) 0514

和風料理

薫

中区東瓦町61
 瓦町信号東へ徒歩約60米東向
 電話(261)3938

割烹小料理

城

・住吉小路(中区栄3-10)
 電話241-0248
 ・喫茶とグリル 岩竹文化センター内
 電話731-1128

大 山 垣 浦 田 保 利 住 所 京 都 市 左 京 区 下 鴨 芝 末 町 五 八

能 紀 行

小 面

文と絵 二井栄逸



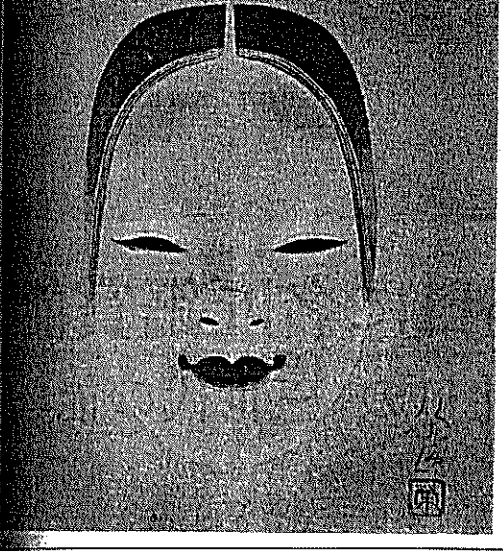
般若等のようにはげしい動きがない小面は、一寸と

笑み給う。扶座の野ぼとけまんにじゅしゃげ。門下のKさんが作った句である。Kさんの作品が時々白鷺という句誌にのつているところを見ると、どうもKさん

続いたであろう。石の上(いそのかみ)は現在の天理市である。大和路の秋は殊のほか美しい。白壁作りの家が、多く、ひとむらさき

大開秀吉が愛蔵したという小面に、雪月花の三面があつた。夜空に南々と能管をひびかせ、しばし

拍子謡について



大槻秀夫

(若し拍子がなければ、とりもたず、半声の本地のみとなり次の通り。)

例一 高砂クセ

10月の放送予定

NHK第2放送8時

Table with columns for date, program name, and performer. Includes programs like '龍太鼓' and '半菰'.

NHK教育テレビ 10時30分

Table with columns for date, program name, and performer. Includes programs like '葵' and '止動方角'.

主催名古屋淡交会

Main table listing performers and their roles for the '淡交会秋季大会' and '鹽雲会大会'.

Table listing performers and their roles for various events and programs.

Advertisement for 'はれの日を一層美しく.....' featuring '才世幸衣' and '高級貸衣裳'.

Advertisement for '流元 剛行 金流 世宗' featuring '檜書店'.

第五十三番 狸々中入前
支那(今の中国)の金桂山(かねぎんざん)の飛揚子(ようぼう)の里に、高風と申す人があつて、或る夜ふしぎの夢を見たので、其の夢の告に従つて揚子の市に出て酒を作り売り出したところ追々と繁昌して遂に富裕の身となった。又或る日例の通り市に出て店を出したるに、いつもの若い童子が来り、酒を求めて飲み初め「秋の水みなぎり落ちて舟の去る事速やかなり。よるの雲おさまりて風の行衛に明ぞふる。薄湯の江の波枕浮寝定めぬ此身かな」などと口吟みながら酒を嗜み、上機嫌で居るのに、其の顔の色も一向に変わらぬのでふしんに思い、其の名を尋ねたるに、我は人間とやいわん、又は何とも白波の海中に住んでいくはくもなき狸々といえる者なりといふもあへず、酒樽を打抱え其の

観能の手びき

(9)面つづき

道成寺(どうじょうじ) 内藤 泰二
狂言の後見方が、作物(つくりもの)の鐘を、四人で担いで出て舞台の中央に吊り上げる。
ワキ(道成寺住僧)はワキツレに従って登壇する。鐘の供養のことを述べ、問答を呼んで、女人禁制であるから、供養の場へ一切女性を入れたはならぬようにと布告をする。

シテ(白拍子)は次第の囃子にて舞台に入り、次第、サシ、道行を踊り、着セリフになり、能力との問答ありて、物着になる。この間大鼓は一調にてアシタウ。物着に鳥帽子を着けてシテは、橋掛り一ノ松へ出で、舞台の鐘を見込み大鼓のツツケヨセの手で舞台に入り、ここで乱拍子となる。乱拍子は舞台を離れ、小鼓の一調に、笛が入り、独得の所作を展開するのである。中之段を過ぎて、ワカを踊り、乱拍子を踏み終り、ここで、極度の静から動に移る急激な変化が起る。

ま、川波に沈んで行った。こゝで中入となり、此の後が現曲の「老いせぬや葉の名をも菊の水」とつゞく。即ち現行曲は中人後のみを用いてある。
第五十四番 火上(ひがみ)
尾張の国火上の里に、火上の明神とて、此の國の開基国司の大祖神であり奉福増長を守り給うので、

古曲雑話

(20) 西村弘敬

急ぎ参詣申せとの宣言を受けて物使が参詣に来た。この火上明神とは因縁の詔有りしより宮寶姫(みやたからひめ)の尊を祀られてあると、以前は愛知県知多郡大高村と言った所で、今は名古屋市緑区大高町で水上姉子神社(みづがみあねこ)といひ、熱田神社の摂社になって居る。本曲は、一般の脇

能同様に、物使参向して色々の神祕を承りて帰るといふ至極平凡な筋合である。此の宮寶姫の尊は此所に住んで居られた所へ日本武尊(やまとたけのみこと)が東夷征伐に趣く道すがら、此所に泊り、宮寶姫尊から天の村雲の鏡を借受けて東國へ趣き、土賊を平けてから掃り道に又此所に立寄り、宮寶

界進し、清盛は遂に太政大臣に迄昇り、其の行動は横暴を極むるに到りたる為、後白河法皇を始めとして新大納言成親、多田行綱、備後寛、備西光、丹波少将成経、入道平康頼其の他の面々が密かに東山の鹿ヶ谷(しかがたに)に時々会合を催し、平家の滅亡を計画して居た。行綱が変心して此の由を清盛に密告したので、清盛は烈火の如くに怒り、成親其の他の一味の者を捕え、成親は備前の國へ俊寛成経康頼は鬼界が島へ流し、其の他の一味の人々は夫々各所へ配流した。後白河法皇は鳥羽の院へ押込めんとて家来に其の用意を命じた。然るところ主馬判官盛國(しゆめのはんがもりにく)がこれを知り、容易ならざる一大事也と小松重盛の邸へ馳付け、此の旨重盛に告げたので、重盛は直ちに衣冠束帯のまま、清盛の所へかけ

つけて清盛に申して曰く「世に四思ある中に皇恩を以て第一とす。抑我家の遠祖は葛原親王の末流なれども、ひと度巨籍に下り貞盛公の功績ありしに漸く一受領の地位なりしも、父君には破格の榮誉を受け、位人臣を極め、一門の宗族何れも公卿に列し不肖重盛さえ連府権門(れんぶかいもん)の位に昇り、一門の榮花を極むる事、之備へに皇恩の厚きに外ならずや此の皇恩を思はずして、一時の怒りに上を侵すが如きは我家の礎を揺がす甚なり。若し御心をひるがへし給わずば、重盛に死を賜へ忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず重盛の進退にきわまつて候」とて泣き伏して懇々と諫めたので、遂に清盛も自止まった。世に言う小松諫言の次第を本曲に作られてある。

京都 豊春会秋の能

金剛流・豊春会秋の能は、十月十一日、京都金剛能楽堂で第十六回公演を行なう。能は二番で、豊嶋弥左衛門師が「野宮」車出之伝合奉留の二つの小書で舞い、豊嶋訓三、同三千春師が「正尊」を演ずる。

此水会秋季素謡会

此水会(高野瀬透師)では、秋季素謡会を十月十八日、東区白壁町二、旅館双葉で開催する。曲目は、清経、遊行柳、班女、藤戸、阿漕、天鼓、鶴飼、土蜘蛛など。

熱田神宮能楽殿喫茶室

熱田神宮能楽殿の喫茶室は、お茶の湯もあつた。お茶の湯もあつた。

新刊 紹介

「金春禅竹の研究」

伊藤正義氏著

禅竹能楽論に新方向

金春禅竹の能および能楽論の集大成といへべき画期的な伊藤正義氏著「金春禅竹の研究」が京都・赤尾照文堂より十月下旬発刊される。著者は関西大学助教授、能と能楽論を中心に中世文学史を専攻、著作には、法政大学教授表章氏と共編で「金春古伝書集成」(昭和四十五年五月、わんや書店刊)があり、禅竹能楽論研究に新しい方向を切り開いている。

新刊「金春禅竹の研究」は、A5判、三五〇頁、クロス上製本、函入、定価三、八〇〇円(千九〇〇円)、特定期間として十月中に申込みの場合は、三、五〇〇円(千九〇〇円)である。

「金春禅竹の研究」の刊行を喜ぶ

法政大学教授 表章氏
世阿弥研究が花やかなのは対照的に、その後継者たる金春禅竹についての研究は取り扱われない。このたび、その伊藤氏の業績の数々が新刊を加えて一書にまとめる。これは、禅竹研究の発展に大いに貢献する。

伊藤正義著 (関西大学助教授)
金春禅竹の研究
←金春禅竹に関する画期的論考
←能楽論・能楽史のみならず、中世文学史、中世思想史に及ぶ禅竹の総合的研究として、研究史上はじめての公刊
I 禅竹序説
二 禅竹をめぐる人々
三 世阿弥と禅竹
II 禅竹の能楽論
一 禅竹の伝世について
二 六輪一露の体系について
三 世阿弥と禅竹
III 禅竹にみる伝承と信仰
一 田浦井屋伝承考
二 稲荷山参籠記考
限定四〇〇部 定価三八〇〇円
昭和四十五年十月末刊行 特價三五〇〇円
(昭和四十五年十月末)
お申込みは、直接弊社・又は最寄りの書店まで
京都府京都市中京区河原町通六角下る
TEL (221)1588(211)7773 振替京都3326
有限会社 赤尾照文堂

柔道着製造販売
株式会社 白虎堂
名古屋市中区笠取町
電話 (522) 6161 番

く、彼は一休に師事したなどという誤解が横行して、禅竹の芸論の正しい理解を妨げていたことや、六輪一露説に代表される彼の理論が一見したところ難解で、研究者に敬遠されがちであったことなどが、主たる原因であつたろう。そうした障害の多い金春禅竹研究に早くから取り組み、みずから新資料の発掘に努めて資料的不備を是正するとともに、世阿弥論をどう継承発展せしめたかなど、禅竹の思想的背景をつぎつぎと明らかにすることによって、禅竹能楽論研究に新しい方向を切り開いてきたのが、異友伊藤正義氏である。氏が禅竹の思想に及ぼした神道書の影響の大きさを指摘して、我々を驚かせた数年後に、禅竹自筆の新資料「明宿集」が出現し、伊藤氏の正しさが見事に実証されたことなど、記憶に新しいが、そのうたの一事から、氏の学的方法的確さが推測できよう。このたび、その伊藤氏の業績の数々が新刊を加えて一書にまとめる。これは、禅竹研究の発展に大いに貢献する。

お知らせ
NHK第2放送日曜日の「謡曲正音」(午前8時~9時)の放送曲目を、早く知りたいとの要望がありますので、本紙では、希望により、読者に放送予定曲目として毎月がきにて、お知らせ致します。(無料)
九月十五日(敬老の日)午後零時半始
熱田神宮 能楽殿

社友の友
政上本町2-20
(464)
7 9 8 4
1 屋 3 6 3 9 3
1 年 3 0 0 円
1 年 4 0 0 円
3 0 円

意欲的な秋の演能

名曲、大曲をそろえ

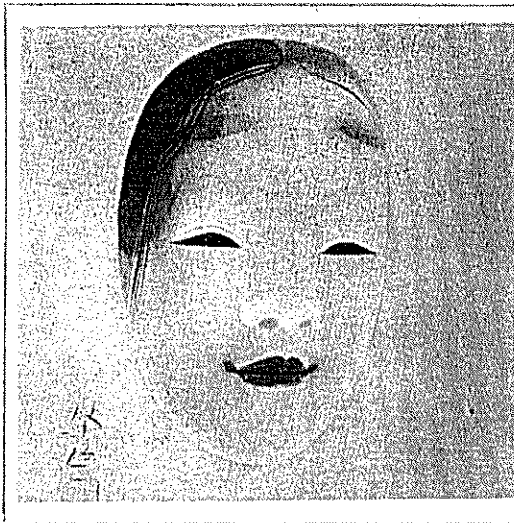
東海の3つのミオン

ミリオン積立預金 ミリオンカード ミリオン住宅ローン

東海銀行

能 楽 の 友

発行 能 楽 の 友 社
名古屋市中千種区吹上本町2-20
(郵便番号 464)
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 300円
郵送の場合 1年 400円
一 部 30円



「若 女」 二井 栄 逸

能楽協会名古屋支部(支部長田鍋惣太郎氏)では、歳末助け合い運動に協賛して昨年初めて義捐金募集能を公演、能楽愛好者の暖かい理解と協力によって盛大に催され、愛知県、名古屋市にそれぞれ義捐金を寄託したことは本紙既報のとおりである。

協会名古屋支部では、ことし第二回の義捐金募集能をきたる十一月二十日(日)熱田神宮能楽殿で催すことになった。

能組は二面掲載のとおり、第一部、第二部に分かれ、第一部でわ親世流能「巴」喜多流能「是界」の能二番に、金剛流舞囃子「童田」宝生流舞囃子「絃上」第二部は、能が親世流「杜若」宝生流「小鏡治」、舞囃子が金春流「竹生鳥」親世流「藤戸」ほか仕舞など。また狂言は、第一部「神山伏」第二部「伯母ケ酒」を上演する。

この歳末助け合い運動は、能楽界として、東京、名古屋、大阪と行なわれ、東京では、ことしで八回目を数え能楽協会の積極的な社会福祉活動として大きな関心をよ

NHK第2日毎週
日曜 8時~9時

11月 放送予定

8日	素謡(宝生)	「求塚」	宝生英雄ほか	
15日	素謡(金春)	「八島」	桜間金太郎ほか	
	狂言	「釣針」	和田喜多郎ほか	
22日	番囃子(親世)	「俊寛」	片山博太郎ほか	
29日	番囃子(喜多)	「松風」	和島富太郎ほか	
	〃	〃(親世)	「熊坂」	泉 嘉夫ほか

◆ 演能カレンダー ◆

〔11月〕	
7日(土)	修 風 会 (米聴歓迎)
8日(日)	竹 韻 会 大 会 (米聴歓迎)
14日(土)	第10回 和泉会 (有料)
15日(日)	名古屋親世会定式能 (有料)
22日(日)	霞会・囃子会 (米聴歓迎)
23日(祭)	名古屋親衛会大会 (米聴歓迎)
29日(日)	風韻会秋季大会 (米聴歓迎)
〔12月〕	
6日(日)	邦 謡 会 (米聴歓迎)
13日(日)	宝生会定式能 (有料)
20日(日)	歳末助け合い 義捐金募集能 (有料)

—以上 熱田神宮能楽殿—

能楽協会名古屋支部(支部長田鍋惣太郎氏)では、歳末助け合い運動に協賛して昨年初めて義捐金募集能を公演、能楽愛好者の暖かい理解と協力によって盛大に催され、愛知県、名古屋市にそれぞれ義捐金を寄託したことは本紙既報のとおりである。

協会名古屋支部では、ことし第二回の義捐金募集能をきたる十一月二十日(日)熱田神宮能楽殿で催すことになった。

能組は二面掲載のとおり、第一部、第二部に分かれ、第一部でわ親世流能「巴」喜多流能「是界」の能二番に、金剛流舞囃子「童田」宝生流舞囃子「絃上」第二部は、能が親世流「杜若」宝生流「小鏡治」、舞囃子が金春流「竹生鳥」親世流「藤戸」ほか仕舞など。また狂言は、第一部「神山伏」第二部「伯母ケ酒」を上演する。

この歳末助け合い運動は、能楽界として、東京、名古屋、大阪と行なわれ、東京では、ことしで八回目を数え能楽協会の積極的な社会福祉活動として大きな関心をよ

鬼 熊井菊 仕 瓦 坂筒童 舞 和泉 保之 大野 弘之 山本 勝一 柴田初太郎 藤井 久雄

後見 久田 秀雄 梅若万紀夫 佐藤卯三郎 梅若万紀夫 西村 欽也 吉田 定男 藤田 六郎兵衛 山松 郁 仕 風 耶 舞 藤井 徳三 藤井 眞義 山本 眞義

貴 妃 間 西村 欽也 吉田 定男 藤田 六郎兵衛 山松 郁 仕 風 耶 舞 藤井 徳三 藤井 眞義 山本 眞義

楊 梅若万紀夫 西村 欽也 吉田 定男 藤田 六郎兵衛 山松 郁 仕 風 耶 舞 藤井 徳三 藤井 眞義 山本 眞義

大西 信久 飯富 雅介 河村 総一郎 藤田 昭彦 盛 谷田 宗二 高安 勝久 井上 礼之助 長胡床 井上 礼之助 梅田 邦久

清 下 経 舞 加藤 総兵衛 丹下 三義 占 占 舞 梅田 邦久

放 下 占 占 舞 梅田 邦久

歌 占 占 舞 梅田 邦久

卷 素 舞 犬飼 末吉 後藤 契雲

観世会定式能
四十五年第五回
十一月十五日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

主催 名古屋和泉会
狂言共同社

会費 指定席 八〇〇円 普通席 六〇〇円 階上席 三〇〇円

名古屋市民芸術祭参加
第十回 和泉会
十一月十四日(土)午後三時三十分始
熱田神宮能楽殿

船 渡 舞 井上 松次郎 佐藤 秀雄

素 囃子 安 宅 流流シ 小鼓 吉田 定男 大鼓 藤田 六郎兵衛 田鍋 惣太郎

楽 阿弥 和泉 保之 野村 万之丞 野村 万之丞 佐藤 卯三郎

木 六 駄 大郎 冠者 三宅 藤九郎 伯茶 主 野村 又三郎 野村 又三郎 井上 松次郎 井上 松次郎 井上 松次郎

草 山伏 佐藤 卯三郎 井上 礼之助 井上 礼之助 井上 礼之助

会費 指定席 八〇〇円 普通席 六〇〇円 階上席 三〇〇円

附 祝 言 (十八時終了予定) 御来場歓迎 事務所 名古屋南区観音町八の六六

舞囃子 番外仕舞 水井 葵 柏雨 室 上 崎クセ

碓 花 山崎 栄治 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛

花 波 神谷 和美 藤田 昭彦 藤田 昭彦 藤田 昭彦

難 波 神谷 和美 藤田 昭彦 藤田 昭彦 藤田 昭彦

求 塚 村 順 村 順 村 順

千 手 福中 静 伊藤 昌一 伊藤 昌一 伊藤 昌一

敦 盛 福中 静 伊藤 昌一 伊藤 昌一 伊藤 昌一

紅 葉 狩 真壁 サワ 福井 啓次郎 福井 啓次郎 福井 啓次郎

羽 衣 三宅 川公香 吉田 琴子 吉田 琴子 吉田 琴子

班 女 吉田 琴子 吉田 琴子 吉田 琴子

船 弁 慶 福田 昌子 藤田 昭彦 藤田 昭彦 藤田 昭彦

素 謡 千 手 福中 静 伊藤 昌一 伊藤 昌一 伊藤 昌一

素 謡 清 野村 三郎 山田 達

素 謡 小 野村 三郎 山田 達

高 砂 野村 三郎 山田 達

附 祝 言 後見 柴田初太郎 地謡 竹内 修二 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛 加藤 総兵衛 藤井 眞義 山本 眞義

観世会秋季囃子会
十一月二十二日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

名古屋親衛会大会
十一月廿三日(祭)十時始
熱田神宮能楽殿

故青木恒治氏追善

野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達

野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達

野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達

附 祝 言 後見 柴田初太郎 地謡 竹内 修二 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛 加藤 総兵衛 藤井 眞義 山本 眞義

観世会秋季囃子会
十一月二十二日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

名古屋親衛会大会
十一月廿三日(祭)十時始
熱田神宮能楽殿

故青木恒治氏追善

野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達

野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達

野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達 野村 三郎 山田 達

修羅物の能のうち唯一の女武者
深刻なものがあり、情趣こまやか
で、自修の中での傑作の一つ。
アタマの囃子で、前多里女
人増正が、ハヤシを伴って登場
三軍に重なる観の曲だが、主眼は
見世場が、最後の剣を打ち合

て静かに序ノ舞が舞われる。
この曲は伊勢物語に取材し、杜
若の精が業平と二条(高子)の後
ツレに刀身を渡して退場する。
この曲はワキ方にも動きの多い
見世場があり最後の剣を打ち合

刀身を受取り、合から下りて、四
海安穏五穀成就を祝福して、ワキ
ツレに刀身を渡して退場する。

能楽殿料理
茶まぶし

能 紀 行 ③

若 女

文と絵 二井 栄 逸

能の構成の中核をなす女物には使用される面の種類にもいろいろある。端だけ清純なもの、艶麗さを表現したもの、神性を示したもの、凄麗さや中年の女性美のもの、佳人老残を示すもの、ハッキリと狂女の相の表れたもの、怨恨の鬼化したもの、女の怨望を表現したもの等、実に多様にわたる。

若女(わかおんな)は、女面の中でも、小面とともに端だけ清純な女性を表現する面の部類に入る。小面は十六、七才より二十才位までの処女の面といっているが、若女は日常の生活の中に男性のある面、年令は孫治郎と同じく二十四、五才より三十才位までである。小面より肉感的で、ことごとく落ちついた感じがする。観世では三番目物に若女を多く使用しているようである。

この班女にも観世では若女を用いている。漢の成帝(紀元前三一七年)の後に班婕妤(はんしやうじよ)という若くして才学にすぐれた美女があったが、君の寵愛がおとろえるに及んで、秋とともに捨てられる。

秋の野山にきりん草が黄色の波を打つ。京にいても、大阪に行っても、今年ばかり草がばいである。黄色い星から来た宇宙人が種子を日本全土にまいていったのではないかとさえ思われる程である。雁赤紅は秋の陽に映えて燃えるように美しいし、サルビヤは家々の庭に其赤である。こないだ雨の音等を散策してきたが、風がぼつ／＼紅をさしそめている。

班女の後半の舞台である下鴨の社の美しい森は紅葉と澄んだ水で日本の秋を色どることであろう。大自然の美しさはかけがえがない。昨夜、仕事をしながらラジオをきいていたら、ホールディング教授が社会変化の法則性という講演の中で、社会も丁度人間の体と同じように、いくらばいさんにおかされても自然にならうとする力が働いている以上大丈夫だ。決して自ら崩壊することはない、という意味の事を言っていた。

大自然の法則そのまゝに何事も実践して行くとき何事にも行き詰らないで、すべての事が順調に運ぶ。それが当然である。その当然が当然として順調に運ばないのは事物の進行が法則にのっていないからである。

自然と共に——私はアナクロニズムでもなく、芸術至上主義でもなく自然と共に毎日生きゆくことを自負している。

①面の絵は若女、スケッチは班女



らんかんに立ちつくして
そなたの空よと眺むれば
——喜多実師——

指子謡について

大槻 秀夫

その句もある。例一俊寛
1 はなもなみだをこそ(き)
2 次の三句は源氏供養のクセの文句で、
3 間なし、当ヤの間、ヤの間の句である。

何れにしても七・五調を基本にしている謡曲文は、本地が主眼であるので、片地そのものが既に変則であるのであるか

風韻会秋季能楽大会

十一月二十九日(日)午前九時三十分始

賀茂	能楽	組	神宮	能楽	殿
賀茂	能楽	組	神宮	能楽	殿
賀茂	能楽	組	神宮	能楽	殿

能船	舟	慶	高安	勝久	河村	総一郎	藤田	昭彦
能船	舟	慶	高安	勝久	河村	総一郎	藤田	昭彦

訪ねて

斤めぐり
が参加して催され

名古屋宝生会定式能

十二月十三日(日)午後一時始

能	實	野口	稔久	高安	滋郎
能	籠	太	鼓	西村	欽也

歳末助け合い

十二月二十日(日)

能	實	野口	稔久	高安	滋郎
能	籠	太	鼓	西村	欽也

宗家 宝生九郎著 全七巻

宝生流囃子仕舞全集

第一巻・第二巻・第三巻発売中 (隔月に一巻づつ発行)

第三巻収録曲目 祇王・碓・清経・金札・草薙・国徳・熊坂・鞍馬天狗
車僧取巻・源氏供養・絃上・高野物狂・小督・小袖曾
我・胡蝶・西行桜・桜川・央盛・三笑

中央マンション

地下2階 地上10階
分譲・賃貸

名古屋市中央区錦3丁目13番5号
中央地所株式会社
電話(961)3271(代)

わんや書店

東京千代田区神田神保町3-1-9
電話(571)0514



門、谷田宗二朗ほか、開狂宮茂山千之丞、茂山千五郎の諸師、この曲は、脇方の重習ものであり、金剛座師の初演として意欲的な演能が期待される。

後シテ 富士道周明 高安勝久 河村総一郎 鬼頭喜太郎 能船 弁慶 高安滋郎 藤田昭彦 前夜之替 飯富雅介 後藤孝一郎 藤田昭彦 井上松次郎 古澤清三郎 藤田昭彦

能 小鍛治 西村欽也 吉田定男 助川 三男 間 高安滋郎 田嶋洋一 真助川 三男 佐藤友彦 能楽協会名古屋支部

大槻秀夫

以上の如く、数多くのトリが出て来たが、このトリの句の性質を明らかにすると、

ものであるが、拍子の理論は前記を参考にされ、お解りと思う。

「然るに」「草目土砂」「林の」「曉かけて」

片地(かたぢ) 片地には一と記してあるは六箇拍子であって、その符號は次の如くである。

「春の」「東」「霜は」

片地(かたぢ) 本地は八箇拍子で十二文字、トリは四箇拍子で六文字であるから、片地は六箇拍子であるから、当然九文字が本格である。そして符號を見れば理解出来る如く本地に較べて△×の二拍子が少ないのであるから、上句四文字、下句五文字が原則となる。

例一 松風上歌
1 2 3 4 5 6 7 8
よーせてはーかへるかアたをなみー
ー。あーしべ(トリ)

例二 老松上歌
1 2 3 4 5 6
わーがちうーよりもなほ。
上句三文字はヤの間であるべきであるが、上句三文字でも下句が六文字も七文字

例三 老松上歌
1 2 3 4 5 6
わーがちうーよりもなほ。
上句三文字はヤの間であるべきであるが、上句三文字でも下句が六文字も七文字

右の如く「緑の垣」「神の宮滝」「誰か云いし」等ヤヲ、又はヤヲハの句は、下句のみにて、上句のない句もあるのである。又半声の句もある。

例四 老松上歌
1 2 3 4 5 6
わーがちうーよりもなほ。
上句三文字はヤの間であるべきであるが、上句三文字でも下句が六文字も七文字

右の如く「緑の垣」「神の宮滝」「誰か云いし」等ヤヲ、又はヤヲハの句は、下句のみにて、上句のない句もあるのである。又半声の句もある。

観能の手びき

十一月十五日(日)観世会
実盛 (さねもり)
シテ 大西 信久

この曲は修羅物の中でも最も難曲とされている。前シテは老翁にて、さしたる見どころはないが、後場は老武者が年齢をかくして、最後の奮戦を物語るもので、篠原の合戦で、手塚の太郎が討ち取った敵の首級を樋口ノ次郎が召されてその首を検分することになる。「洗はせて御覽候へと申しもあへず首を持ち」で扇を開き首を洗う所作を見せる。こゝは曲中の型どころである。

楊貴妃 (よおきひ)

シテ 梅若方三郎
阿 漣 (あこぎ)
シテ 山本 博之

シテの語りで、この浦は昔から伊勢大神宮御料の海で禁漁となっていたのだが、阿漣という漁夫が夜な夜な網を引くことが遂に人に知れ、手足を縛ってこの浦の沖に沈められたと語り、地の下歌「苦しみも度重なる罪事はせ給へや」でワキへ向き面を伏せる。クセは

菊慈童 (きくじどう)

十一月廿九日(日)風組会
菊慈童 (きくじどう)
シテ 奥田 薫

菊の花で飾られた一舞台、引回しをかけた薬屋の作物が据えられシテ慈童はその中にいる。引回しがあつた、床几にかけたシテ慈童が「それ那那の秋の夢」と述懐のサシを語り。初回に狐独の境遇を嘆き、ワキとの問答の後、作物から出、狂傲な「楽」を舞う。アトも優雅な型が、つぎつぎと舞われ、見て楽しいめでたい曲である。

弱法師 (よろぼし)

シテ 水野 雅子
弱法師 (よろぼし)
シテ 水野 雅子

弱法師 (よろぼし) シテ 水野 雅子

船弁慶 (ふなべんけい)

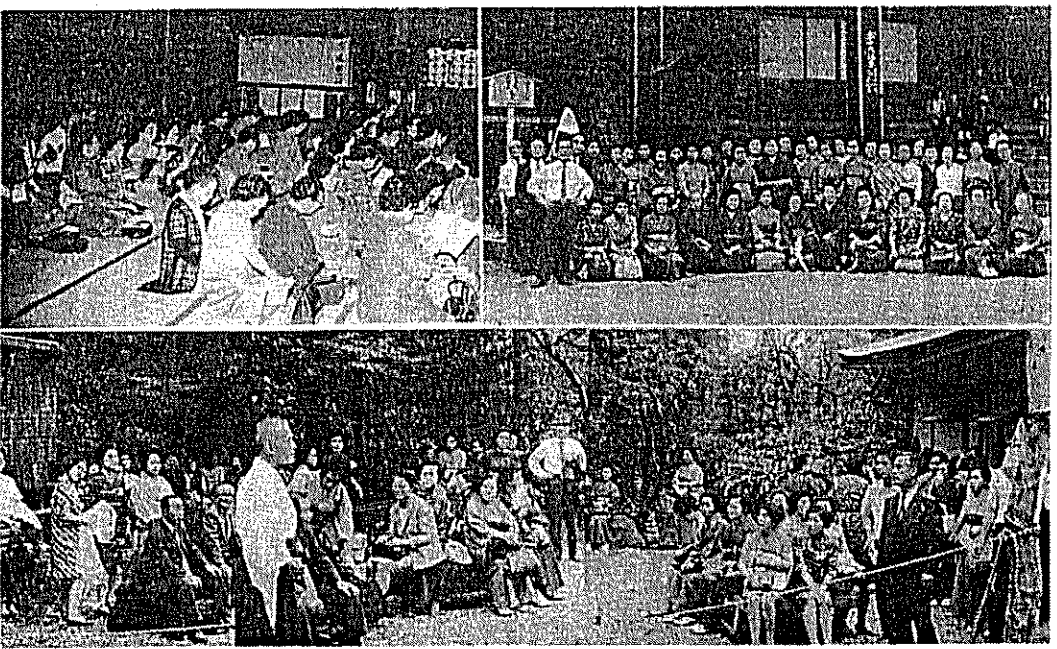
シテ 前 殿島満里子
後 富士道周明
船弁慶 (ふなべんけい)
シテ 前 殿島満里子
後 富士道周明

船弁慶 (ふなべんけい) シテ 前 殿島満里子
後 富士道周明

秋の嵯峨野を訪ね

第2回謡曲名所めぐり

一行は、名古屋市内はじめ県下、岐阜県の同好の方々が参加、午前八時三十分名古屋テレビ塔を出発、車中にて「小僧」を同時しつつ、爽秋の名神ハイウェイを西へ十一時半嵐山渡月橋畔に到着、小督塚に参拝ののち、大塚川の清流を前に料亭百楽にて昼食、



都心に近
ビジネスと
中

戸松冶金株式会社

取締役社長 戸松利作
名古屋市瑞穂区堀田通4-10
電話(881)8111(代表)

につとう

同東

中区栄五丁目25-32
日東マンション地下
TEL(261)2694



古い歴史・新しい経営・若い力
でござ仕する(じゅうろく)

十六銀行

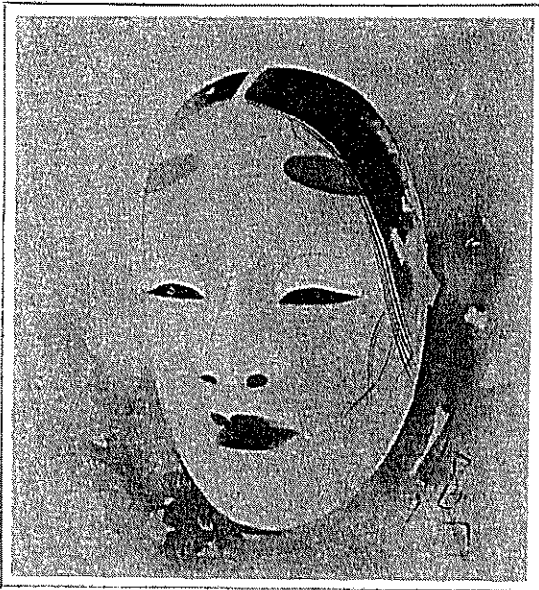
明治10年 創立
昭和24年 本店
名古屋市中区栄2丁目24番地

能楽の友

題字は熱田神宮 篠田宮司筆

発行 能楽の友
名古屋市中区吹上本町2丁目
(郵便番号 464)
電話 (731) 798
振替口座 名古屋 3639
購読料 1年 300
郵送の場合 1年 400
一 部 30

推せらるる所以はつぎの理由に
よる為であります。
第一 肺にある悪い空気がこころ
へよく入るからである。



「十寸髪」 二井栄逸画

幅をひろげた演能 昭和45年を回顧して

昭和四十五年は、国際化の年といわれた七十年代の最初の年として、能楽界も大きな「飛躍」と「調和」の課題に迫られた年であった。

本年の最大の国家的な行事として記録されるのは、日本万国博の開催であり、それにちなんで、能

また本紙でもとくに、創刊三周年記念の「別会能」として能「道成寺」「小袖曾我」を公演、盛大な記念能を催すことができたことも付記しておきたい。

さらに広く能楽愛好者の関心を呼んだ第五回名古屋新能は能「竹生島」「天鼓」上演(八月一日)熱田神宮例大祭での能「田村」「羽衣」(六月五日)愛知県文化講堂での大衆能・能「大仏供養」「半番」「小鍛冶」(九月六日)、そしてきたる十二月二十日の歳末助

は、正規の万博協会主催の催しとして、大阪フエニステイバルホールでの「万国博能」(五月三日)と万国博ホールでの「万国博能」さらに万博会場内のパビリオン主催として、鉄鋼館、ギリシャ館、円形劇場、お祭り広場で演能が行なわれたことも記録されるべきであろう。その他各地で万博記念と銘うっているいろいろな公演がなされた。

中部能楽界では昨年にも増して熱田神宮能楽殿での演能は盛んで観世、宝生、金剛各流の定式能はじめ、伝統ある名匠鑑賞能、狂言大会、各社中大会が日曜日にもちろん、祭日、土曜日をうめつくして催された。

またことしは愛知県の勤労者を中心に一般市民の利用に供する総合福祉センターとして、鶴舞公園南に十六億円をかけた建設中であつた愛知県勤労会館の完成には、日本能楽協会会長宝生九郎宗家が来賓として「翁」「石橋」により竣工記念行事が盛大に催されたことも意義があつた。

激しい変化のなかで、能の伝統は、よりさらに広い市民層に、とくに若い人たちの内面に新しいテーマを投げかけて生かされていく一層求められていくであろう。

テレビをはじめとするマスメディアの進歩と調和を要求しているといえる。

ことし親世祖先祭であげられた祝詞の一節につきのように述べられてゐる。

「日々にも激しき世に在りても、少しだにも激しき時を忘れむとする人々の心は残りて、初めてテレビに映し出された篝火の光に、舞い納むる神事能の有様は、さながら祖神の始め給ひし幽玄の昔に返りたる心地して、見る人、聞く人、皆共に我を忘れて、見入る増上寺の新能は、新しき世の習として、その状を知らせし放送を見るにつけては、又心にその時の事よみ返りて、かばかり美しきわざ遣り出し、ひろめ給ひし祖等のみいさをし辱くぞ仰がれ、高々に祖神等のみ教えの一つだにもむくい参らせむ。」

テレビに代表される今日のマスコミに、能狂言は新しい基礎を確立しつつある。そしてこれを支え成長させる努力はますます重要であらう。

昭和四十五年の能楽界は、さらに新しい胎動を生む貴重な歴史をつくりつつ終ろうとしている。

本紙は、明年創刊五周年を迎えるが、地元能楽界はじめ東西能楽界の暖かいご支援とご指導、全国のご愛読者のご声援を感謝申し上げ、昭和四十六年へ心新たに精進を誓うものです。

演能カレンダー

〔12月〕

6日(日)	邦謡会 (来聴)
13日(日)	宝生会定式能 (有料)
15日(火)	学生鑑賞能 (来聴)
20日(日)	歳末助け合い義捐金募集能 (有料)

〔46年1月〕

3日(日)	能楽協会名古屋支部新年謡初式
7日(木)	学生能楽連盟能 (来聴)
15日(祭)	名古屋清韻会能 (来聴) (番組2面)
17日(日)	名古屋宝生会
24日(日)	和島富太郎、泉嘉夫、野村又三郎の三人を観る会 (有)
31日(日)	故梅若実師追善能 (有) (番組2面)

—以上熱田神宮能楽殿—

演能案内

邦謡会発表会
十二月六日(日)九時始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞
龜 梅田 邦久
宗宮 武夫 三木 英一
山口 良孝
山口 敏
山崎 正規 杉藤 芳男
遠山 敏

素謡 経 正
素謡 俊 寛
素謡 大原御幸 内局法 成瀬由喜恵 山際 静子 野々山 登子 水野美代子 水野 光子 田中貴久子 清水 啓子

河村 加藤井知子 河村総一郎
原 正義 福井啓次郎
高安 滋郎 鬼頭喜太郎 寛 三男
西村 欽也

船弁慶 前後之替 井上松次郎
ほか舞囃子、仕舞、連吟など

梅田 邦久
田 謡
久 会

宝生会定式能
十二月十三日(日)
熱田神宮能楽殿

素謡 雲雀山 宝生 公恵 古田智恵子 倉本 雅
戸田 雅和 浦見 節子

能実 野口 緑久 高安 滋郎 佐藤 友彦
狂言 福の神 佐藤 三郎 大野 弘之
能籠太鼓 倉本 雅 西村 欽也

付祝言
名古屋宝生会
十二月二十日(日)
熱田神宮能楽殿

歳末助け合い
義捐金募集能 (第二回)
十二月二十日(日)
熱田神宮能楽殿

能(總) 巴 殿島 修二 西村 欽也 河村総一郎 後藤孝一郎 地謡 伊藤 季信	能(總) 是 界 長田 新龍 高安 滋郎 高安 勝久 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 杜 若 有賀 滋子 高安 滋郎 田村総一郎 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 竹生島 前田 茂穂 吉田 定男 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 絃 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 綾 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 巴 殿島 修二 西村 欽也 河村総一郎 後藤孝一郎 地謡 伊藤 季信	能(總) 是 界 長田 新龍 高安 滋郎 高安 勝久 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 杜 若 有賀 滋子 高安 滋郎 田村総一郎 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 竹生島 前田 茂穂 吉田 定男 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 絃 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 綾 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 巴 殿島 修二 西村 欽也 河村総一郎 後藤孝一郎 地謡 伊藤 季信	能(總) 是 界 長田 新龍 高安 滋郎 高安 勝久 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 杜 若 有賀 滋子 高安 滋郎 田村総一郎 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 竹生島 前田 茂穂 吉田 定男 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 絃 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 綾 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 巴 殿島 修二 西村 欽也 河村総一郎 後藤孝一郎 地謡 伊藤 季信	能(總) 是 界 長田 新龍 高安 滋郎 高安 勝久 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 杜 若 有賀 滋子 高安 滋郎 田村総一郎 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 竹生島 前田 茂穂 吉田 定男 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 絃 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 綾 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 巴 殿島 修二 西村 欽也 河村総一郎 後藤孝一郎 地謡 伊藤 季信	能(總) 是 界 長田 新龍 高安 滋郎 高安 勝久 福井啓次郎 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 杜 若 有賀 滋子 高安 滋郎 田村総一郎 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 竹生島 前田 茂穂 吉田 定男 柳原富士忠 山口 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 絃 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 綾 上 内藤 泰三 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦	能(總) 花 月 福井 道子 吉田 定男 鬼頭喜太郎 藤田 昭彦
---	--	--	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	---	--	--	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	---	--	--	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	---	--	--	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	---	--	--	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------

久保田 千三郎 好

居酒屋 未

能 紀 行 ④

十 寸 髪

文と絵 二 井 栄 逸



玉葱「打ち果てね恨めしや」

十寸髪(ますかみ)。憎悪に満ち、乱れかかった髪や、何ものかを凝視するように眉を寄せた見つめるまなざし等、狂おしい美しさを示す若い女の面、いさゝか狂気めいたシテに用いられる凄婉な能面である。

五年ばかり前、お稽古さきで十寸髪を写生させてもらったことがあったが、それには官能美さえひそんでいた。

増阿弥久次(さうあみひさつぐ)の十寸髪には素晴らしいものがあるのを写真で見たり、また実物を見る機会がない。増阿弥は、若い女性にひたむきになった時の表情を頭にきざり込んで何度か試作したことである。十寸髪は、玉葱、浮舟、牡丹等に用いられる。

孫次郎、小面、若女を書いて来たがこの外に、増(さう)。節木増(ふしきぞう)。近江女(おうみおんな)。万姫(まんび)。それにこの十寸髪(ますかみ)増髪女(まげめ)等、色々あるので順次取り上げてゆきたいと思う。

面を使用するについても、流儀の芸術上の主張から、例えば、三番目物には、宝生流では節木増、観世流では若女、金剛流では孫次郎、金存流、喜多流では小面を使うといった工合である。又、演者の主張で万姫をかけた、近江女を用いたりすることもある。

て、あたりは枯葉色になる。そして、北国に雪が降り初めると、野山はにわかには紅葉して、草もみじ、はげみじまでがめだつてくる。春夏秋冬のめぐりが毎年早くなってくるような気がするのは世の中がやたらと忙がしくなった為だろうか。でも、気の遠くなるような話もある。

玉葱の舞台になる長谷寺は、現在、奈良県桜井市初瀬町にあり、旅の僧が少女の姿をした女性に案内されて川小舟でのぼったという初瀬川も美しい水をた、え、初瀬の町の中を流れて流れている。

結葉色、それは秋の花野がひっそりと姿を消した色。源氏物語の中から作られた能も数多いが、私はその中に何となく淡々とした能、玉葱が好きである。あわれで数々のなやみもあるけれど、常の源氏物のように幽玄ニズムに徹することなく、何となく、白々とした枯葉の中で夢を見るような能、それは、作曲や文章がまことに流暢なせいかも知れないし、又、物狂風の四番目能になった為かも知れない。

五千年目、ねむりのさめた時、どんな形の人間がひかえてくれるであろう。又、吾々を栄光の神々としての身の廻り品を宇宙博物館にでも展示するかも知れない。或は迎えてくれるものは、コンピュータの涙だけかも知れない。

能	昆布	天鼓	野宮	高砂	神歌	能	卷	花	実	東	恋	葛	邯	能	通	小	町	熊	雲	安	林	坂
鬼頭貴代子	井上松次郎	富士道周明	山田富美	八神由季代	赤間 鏡雄	高安 滋郎	後見 殿島 秀夫	若 松本 頼一	盛 下山 然一	守部 啓子	赤間 鏡雄	大和舞 昌作	渡辺 節子	西村 欽也	後見 田村 文蔵	河村 欽也	三木美智子	坂田 盛	坂田 盛	坂田 盛	坂田 盛	坂田 盛
吉田 定男	佐藤 友彦	三島 憲	山田 富美	長谷川 隼子	地謡	田島 一郎	山田 富美	水野 雅子	三島 憲	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美
鬼頭喜太郎	井上松次郎	三島 憲	山田 富美	長谷川 隼子	地謡	田島 一郎	山田 富美	水野 雅子	三島 憲	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美	山田 富美

花木商店

記念品・ご贈答品に最適な品ばかりです……
宝石のことはどんなことでもご相談承ります
名古屋市中区栄2丁目16
電話 (231)2891・6727 (211)1019・1974

檜書店

観世流・金剛流 宗家本元
東京都千代田区神田小川町2-1
電話 (291) 2488-9 3552
東京都中京区二条通駄馬町東入
電話 (231) 1990 113

療所

大槻秀夫

夫

オクリとは二箇拍子で成立しているものを云う。

オクリについては何文字か基本になるのか。八箇拍子の木地が十二文字、六箇拍子の片地が九文字、四箇拍子のトリが六文字であるから二箇拍子の

大槻秀夫先生、十一月十五日午前十時、市内堀田区丸屋町、米川

観能雑感

N 生

能が、ごく限られた仲間の中で演じられるのでなく、公開され能に初めて接する人を含めて様々な層の人達の目の前で演じられる機会が多くなると、演者の仲間入りしようとする者も増し能の 대중化が生じる。そしてそれと共に大衆化の一方の面、つまり観客ととりわけ素人の目は演者にとって厄介な恐いものになるだろう。

そこに期待し魅せられるのを望んでいる。真にそれ故、時としてその内容は漠然としながらも時に落ちない不調和な点に敏感であるといえる。それを取るに足らないものとして見過す事は演者の先々の成長を妨げるものになる。なぜなら過度な要求かも知れないが、自己満足に陥らず演者が最後迄求めるべきは完璧なものとは自らの師匠ではなく、この世界に全く疎遠なもの、ことであり、あるいは自己の内にあるこの世界に疎遠な部分である。そしてこの点は演者の場合、より多く演出(者)にかかわる点である。

十一月一日、青陽会主催で行われた能三曲、とりわけ情緒豊かな「事多き能」松風には、演出の不在を感じさせた。永遠の潔白な演出不在を感じさせられた。

私の健康法

柴田初太郎

別荘で、福井五郎先生などから冗談に「柴田君に生命保険を掛けたいから必ず一儲けしてくれ。」と言われていた私が、今年八十三才を迎えるまで生き延びられ、ことに不思議に思っています。

十五才の時、父に健康法の一つとして勧められ、始めました。それが、今日まで健康を保持できたものかと思えます。それは、いろいろの過程を通し今日の考えにまであがったものですが、過程まで説明しますと、大変長くなりますので五十代より後のことをお話ししたいと思います。

健康には、発音が第一健康を保持するためには、まず発音だと考えまして、私は、発音法について研究を始めました。まず、義太夫、長唄、歌舞伎役者の発音に注目し、名人と言われ

観能の手びき

12月の能 熱田神宮能楽殿



修羅物の能のうち唯一の女武者

深利なものがあり、情趣こまやかに、真修羅の中での傑作の一つ。アサノの能子で、前シテ里女

十二月二十日 歳末助 義捐金 募集 能楽協会 名古屋支部

十二月二十日 歳末助 義捐金 募集 能楽協会 名古屋支部

十二月二十日 歳末助 義捐金 募集 能楽協会 名古屋支部

十二月二十日 歳末助 義捐金 募集 能楽協会 名古屋支部

十二月二十日 歳末助 義捐金 募集 能楽協会 名古屋支部

十二月二十日 歳末助 義捐金 募集 能楽協会 名古屋支部

はシオル。ワキはこれを不審に思

の一声を連呼する。次いでにわかに風雨が吹き、山河草木が震動し雷鳴すまじい光景が、地上に歌で詠われ、大ベシの囀りにて、後シテ天狗界が正

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

はシオル。ワキはこれを不審に思

の一声を連呼する。次いでにわかに風雨が吹き、山河草木が震動し雷鳴すまじい光景が、地上に歌で詠われ、大ベシの囀りにて、後シテ天狗界が正

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

はシオル。ワキはこれを不審に思

の一声を連呼する。次いでにわかに風雨が吹き、山河草木が震動し雷鳴すまじい光景が、地上に歌で詠われ、大ベシの囀りにて、後シテ天狗界が正

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

はシオル。ワキはこれを不審に思

の一声を連呼する。次いでにわかに風雨が吹き、山河草木が震動し雷鳴すまじい光景が、地上に歌で詠われ、大ベシの囀りにて、後シテ天狗界が正

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

はシオル。ワキはこれを不審に思

の一声を連呼する。次いでにわかに風雨が吹き、山河草木が震動し雷鳴すまじい光景が、地上に歌で詠われ、大ベシの囀りにて、後シテ天狗界が正

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

はシオル。ワキはこれを不審に思

の一声を連呼する。次いでにわかに風雨が吹き、山河草木が震動し雷鳴すまじい光景が、地上に歌で詠われ、大ベシの囀りにて、後シテ天狗界が正

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

ワキが待機で跡を叩いていると

能楽殿御用達 割烹料理仕出し 西みやか 名古屋市西区浅間町 電話 (531) 5507-6666

鳥料理 本場名代 登録商標 鳥 電話 二三二二 一七二五〇 一〇一五五

友大 茶屋 名古屋市中区栄三丁目 電話 (231) 2709-6818 名鉄百貨店九階のれん茶屋

中華料理 桃源亭 御宴会・御集會・御商談等には是非御座敷を御利用下さい 中區栄三丁目29 (松坂屋南) 電話 241-2938・6081 支店 名鉄百貨店9階 のれん茶屋

能楽の友社 名古屋支部 11年 300円 12年 400円 30円

歳末助 義捐金 募集 能楽協会 名古屋支部 12月20日 能楽殿で

名古屋市民芸術祭参加 第十回 和泉会 十一月十四日(土) 午後三時三十分始

後見 梅田 邦久 柴田 初太郎 井上 松次郎 加藤 兵衛 藤井 本木 徳三 一 義雄